

神鳥の唄



ワー！

人々は両手を打ち鳴らし、喝采をあげた。

闇に包まれた開場の中、唯一ライトアップされたステージに佇んでいるのは、大小様々な楽器を持った楽師達。喝采に沸いた会場に向かって同時に頭を下げると、一人、また一人と裏手へとはけて行く。

ステージを照らしていたライトが消えると、自然と喝采も収まり、暗闇と静寂が場を支配した。

なのにも関わらず、開場の人々の視線はステージ上から動かない。

それもそのはず。まだ公演の全ては終わってはならず、まだとりが控えている。そしてそのとりこそ、人々が待ちわびていたもの。

再びステージにライトがつけられた。先ほどのように全体を照らすのではなく、中央の一点のみを照らす、最小限のもの。

舞台袖から、一人の小柄な影が姿を現した。人々の視線が、現れた影に一齐に集まる。

ライトアップされた中央に現れたのは、小さな少女だった。襟首で切り揃えられた黒髪に、若干緊張した面持ちを宿した黒い瞳。純白の衣装に覆われた右腕とは裏腹に、肩から先が露になっている左肩は、とても華奢で細く頼りない。

初めて公演を見た者はそろって眉間を寄せる。

こんな小さく華奢な少女が歌うのか。己が望んでいる至高の歌を本当に聞かせてくれるのか。

しかし左右非対称な純白の衣装こそが、彼女がとりを勤める最高の歌い手『神鳥』であることを意味している。それでも過ぎる不安を抱いてしまうほど、舞台に立つ少女は儂い雰囲気纏っていた。

少女が大きく息を吸い込む、そして――

「――」

紡がれた歌声に人々は大きく目を見開いた。華奢な身体から発せられたとは思えないほどの声量が、広い開場を所狭しと駆け巡る。高音を発しているというのに、とても耳に心地良い。音程の変化もはっきりわかるほどメリハリがあり、なのに上擦るといってもなく。開場全ての人間がうっとり聞き惚れるのに時間はかからなかった。

『神鳥』が全ての歌を歌い上げると、静寂が再び場を支配する。しかし、少女が客席に向かってペコリと頭を下げた途端、我に返った客達は一齐に両手を叩き始めた。まばらだった拍手が合わさり、次第に大きくなっていく。

ピタン！

が、それは一つの有りえない音と共に突然ピタリと止まってしまった。その音の発生源はステージ上。先ほどまで高々と歌い上げた『神鳥』の少女が、顔を抑えながら蹲っている。

「――！」

少女は慌てて立ち上がると、客席に向かって一度頭を下げ、顔を抑えながら舞台袖へとはけていく。

何もない舞台上で彼女は転んだのだと気づいたときには、既に開場に明かりが灯され、すっかり明るくなってしまった後だった。

(ま……またやっちゃったよ……！)

リーベはずきずきと痛む額を押さえながら、焦りや羞恥の入り混じった複雑な感情と合わさって泣きたくなくなるのを寸で堪えていた。衣装を脱ぐのも忘れたまま、楽屋の片隅で膝を抱えて蹲る。

「リーベ。いい加減落ち込んでないで、早く着替えな。落ち込む気持ちもわからなくはないけど、衣装係に

迷惑がかかってしまうよ」

「ううううう……」

頭上から注がれる少し呆れの混じった声を聞きながらゆっくりと首を動かすと、案の定そこにはよく見知った長身の幼馴染が、腰に手を当てながらこちらを見下ろしていた。

「フォクノお……」

「ほら、立つ。着替えはここにあるから、衣装脱いでちゃんと畳んで返さないよ」

「うん……」

友人フォクノに促され、リーベは徐に立ち上がり、手渡された着替えを近くのテーブルの上に置いて、着替え始める。明日もまた公演があるのだから、すぐに返さなければ衣装を管理している係りの者に迷惑をかけてしまうだろう。舞台上で転んでしまうという失態を犯したのだから、これ以上の迷惑は避けたい。

ひらひらとした純白の衣装を脱ぎ、普段着慣れたベージュのワンピースに身を通す。それだけで、腹の中に溜まっていた窮屈な空気が抜けていくような気がした。幾分か気分が楽になる。

「じゃあ衣装返しに行こうか」

「うん」

背の高い彼女の傍に並んで楽屋を出る。すれ違う楽団員達と会釈を交わしながら、衣装室へと辿り着いた。

「失礼しまーす」

「あら、フォクノにリーベ」

衣装室の扉を開けると、そこには楽団の先輩達が備え付けの椅子に腰掛け、世間話に花を咲かせていたようだ。衣装ではなく既に私服で、化粧も落としている。完全にリラックスしているようだった。

「お疲れ様、姉さん達」

「お疲れ様です」

「二人もお疲れ様。特にリーベ、今日の歌もよかったわよお」

「あ、ありがとうございます」

彼女達はリーベと同じ歌い手であり、少人数でのアンサンブルやカルテットをメインに歌う、精鋭達だ。そんな先達に褒められて、リーベは頬を紅潮させながらペコペコと頭を下げる。

「まあ、最後に転んだのはいただけないけどねえ」

「うう……！」

容赦のない一言に、リーベは言葉を詰まらせた。しかし正論である。舞台上で転ぶだなんて、本来あってはならないことなのだ。なのにリーベはまた、やらかしてしまった。それを咎められて、文句など言えるはずもない。

「何もない舞台上を歩くだけで転べるのって、リーベだけよねえ。ある意味すごいことだわ」

「そうよねー。そういえば常連客の間では、公演でリーベが転ぶか否かの賭けが流行ってるそうよ」

「それ本当？ なら、転ばないに駆けた人は大損したってわけね」

「え……え？」

まさか己が賭けの対象になっているだなんて。それも失態に関する事で。さあっと顔が青ざめる。一体、どれだけの人に舞台上の失態が伝わってしまっているのだろう。

「や、やっぱり無謀すぎたんだよ……わたしが、わたしが『神鳥』だなんて……！」

何度も舞台上で転んでしまうような人間に『神鳥』など勤まるはずがない。

『神鳥』とは、音楽を披露する場所であるミュージアムのとりを勤める、ミュージアムが誇る至高の歌い手への称号だ。

元々『神鳥』とは、大昔に信仰されていた神の心を癒すために唄ったとされる鳥のことである。至高の歌声を持つ神鳥の歌声は神のためだけにあり、何処へと飛び去ってしまわないよう、羽は片羽しかない。神鳥の衣装が左右アンバランスなのはそのためだ。

かつて信仰が盛んだった頃は人間達も神の心を癒すためにと、多くの歌を作曲し、天へと捧げた。しかし時が流れるにつれて信仰そのものは失われ、神に捧げた歌だけが現代に残っている。

神を楽しませるために作られた歌が、今では一般の人々を楽しませるものへと姿を変えた。そして歌や演奏を披露する会場はミュージアムと呼ばれ、その中でも最も歌の上手い歌い手を神の鳥から肖り、『神鳥』と呼ばれるようになったのだ。

「ユナフィアオーナーに言ってこないと……やっぱりわたしに神鳥はムリですって」

神鳥の質は、そのままミュージアム全体の質といわれている。そんな重大な役目を、入団してから一年も経っていないリーベが担うなど、やはり無謀以外の何者でもなかったのだ。何度も舞台上で転び、あまつさえ賭け事の対象になってしまう者など、神鳥に相応しいわけがない。

「え、ちょ、ちょっとリーベ！」

「待ちなっってリーベ……姉さん達、からかいすぎ」

オーナーがいるであろう部屋へ行こうとするも、フォクノに肩を掴まれて阻まれる。じわりと熱くなる目尻を懸命に堪えながら振り返ると、先輩達はあたふたと慌てていた。

「ごめんなさいね、まさかそこまで気にしてるなんて思ってなくて……」

「あたし達ちゃんと知ってるのよ、リーベが舞台上で転ばないように、毎日練習してるの」

リーベとて、ただ毎度毎度転んでいるわけじゃない。ヒールのある靴に慣れるべく、毎日履いて慣らそうとしたり、何度も舞台上を行ったりきたりして転ばなくなる練習を重ねている。

「ちゃんとその成果は出てるじゃない。最初の頃なんて出だしから転んでたのに、今転ぶのは終わった後だもの」

「歌ってる最中は一回も転んだことないのは流石よねえ」

「それに転ばなかったこともあったじゃない。……まだ三回くらいだけど」

初めの頃は、舞台袖から出た直後に転んでしまい、お客さんをとても不安にさせてしまったと思う。今でもまだ転ぶものの、出だしでは転ばなくなったのは事実だ。それに、まだ数は少ないが転ばずに終わらせられたこともある。いずれは転んでいたことが嘘のように、転ばなくなる日もそう遠くはないかもしれない。「ほらリーベ、あなたの好きなトンツェルの焼き菓子よ。お客さんからの差し入れだから、遠慮しないで食べて」

「トンツェルの焼き菓子……！ いただきます！」

トンツェルとは、この街フォーリエストに昔からある、老舗の焼き菓子店だ。昔ながらの味を守り続け、毎日のように行列が出来ている人気店でもある。フォーリエストに住んでいる人間ならば、きっと知らぬ人はいないだろう。

リーベは甘いものが好きだ。だから当然、トンツェルの焼き菓子も大好物である。トンツェルの焼き菓子を食べることが出来たのは、フォーリエスト唯一のミュージアムであるカーテュアリーミュージアムに所属して、たくさんのお客さんから拍手をもらったことの次に感動したことだ。人気店であるが故に、並んでも売り切れてしまうことも多々あるため、実際に食べることが出来たのは、入団してからが初めてだったのだ。

焼き菓子を口に運ぶと、さくつとした食感と共に、ふわりとした甘さが口いっぱい広がる。自然と口元が緩むのを感じた。

そして焼き菓子に夢中なリーベには、先輩達がお互い親指を立てあっていることに気づかない。

「焼き菓子一つで簡単に機嫌が直るもんだから、からかわれ続けてるんだらうな……」

「ん？ フォクノ何か言った？」

「いんや、なにも」

「ほら、リーベもっと食べていいわよ」

「！ ありがとうございます！」

先輩に勧められ、もう一つ手にとり口へと運んだ。幸せそうに焼き菓子を食べるリーベの姿に、先ほどまでの悲哀な表情は微塵もない。

さらにもう一つ食べようと焼き菓子に手を伸ばしたとき、衣装室の扉が開いた。先輩達は突然口元を引きつらせるが、背を向けているリーベには誰が入ってきたのかわからない。

「……あら、こんなところで何をしているの？ 『神鳥』さん」

「！」

口調は丁寧だがヒヤリとした声音に、リーベはビクリと背筋を震わせる。恐る恐る振り返ると、そこにいたのは想像していた通りの、豪華な銀の長い巻き毛と黄金色の瞳を持った華美な美少女の姿。口角はニコリとつりあがっているのに、黄金色の双眸はとても冷たい色を放っている。

「こ、こんにちはメリージア、さん……」

恐々と彼女に向かって頭を下げる。先ほどまで焼き菓子で浮き足立っていた心が急速に萎れていくのを感じた。

「随分呑気な神鳥さんだこと。舞台上で大失態を犯したことなんて、もう気にも留めていないのかしら」

「そ……それは」

リーベは俯きながら胸部の服をぎゅっと掴む。

「舞台上で何度も転ぶなんて、やっぱり貴女には神鳥としての自覚がないのではなくて？ このカーテュアリーミュージアムに泥を塗っていると気づいていないの？ ——何故貴女なんかが神鳥なのかしら」

「っ……」

リーベが神鳥らしくないことは、己が一番理解している。先ほども、自分からオーナーに神鳥を辞することを伝えに行こうかと思っていたところだ。

「舞台経験が全くない素人を神鳥に据えるだなんて、本当にどうかしてますわ。神鳥は歌だけでなく洗練された動作も求められるというのに。リーベ、貴女歌さえ歌えればいいと軽んじているのではなくて？」

「か、軽んじてなんて……」

いないという言葉は尻すぼみになって消えていく。

リーベがカーテュアリーミュージアムに入団したのは、数ヶ月前のこと。昨年度、玉砕覚悟でカーテュアリーミュージアムの入団試験を受け、運良く合格したのだ。それまでのリーベはただ歌が好きな、どこにでもいる極普通の娘だった。当然舞台上に立った経験はなく、歌も特別な訓練を受けていたわけでもない。

そんな自分を知っているからこそ、メリージアの言葉に強く反論することなどできなかった。むしろ、彼女の言う通りだとさえ思う。

「——どうしてリーベが神鳥なのかって？ そんなの決まってる、リーベがカーテュアリーミュージアムで一番歌が上手いからだよ、お嬢様」

リーベとメリージアの間に、長身の女性が割り込んでくる。フォクノだ。長身の彼女がリーベの前に立つと、メリージアの姿は完全に見えなくなる。

「リーベを神鳥に据えるとき、ほぼ全員賛成で決まったと思ったけど。お嬢様がどうしても気になるというのなら、最終決定権のあるユナフィアオーナーに言えばいいじゃないか。彼女ならあたし達とは違って公平な意見をくれるだろうから」

フォクノの言葉に、リーベはだいたい一月ほど前に行われたメリージアとの神鳥の座を賭けた勝負を思い出す。

そう、メリージアはカーテュアリーミュージアムで、リーベの前に神鳥を務めていた元神鳥だ。

リーベはミュージアムに入団してからまだ数ヶ月しか経っていない新米である。それなのにミュージアムで最高の歌手が務める神鳥をしているのかといえば、メリージアと神鳥の座を賭けて勝負をし、勝ってしまったからだ。

「お前ね、わたくしの神鳥を狙う愚か者は」

ある日舞台が終わってフォクノと共に差し入れの焼き菓子を食べてリラックスしているところに、彼女は突然そんなことを言ってリーベの前に現れた。

「え……？」

「惚けても無駄よ。先ほどわたくしはこの耳で、しっかりと聞いたのだから」

惚けるもなにも、リーベは全く身に覚えがない。それどころか、今回の公演から初めて舞台に立ったばかりだ。合唱の一人として混ざり、大勢のお客さんの前で歌うことができると毎日感動の連続である。

新米の身で舞台に立たせてくれたことだけでも充分なのに、更に神鳥を狙うなどと、痴がましい。そして恐れ多すぎる。

何とかメリージアの誤解を解こうと説得するが、彼女は黄金の瞳をつり上げたまま、こちらを睨みつけてくるばかりだ。そしてその場を収めたのは、リーベを庇ってくれたフォクノだった。

「なら、オーナーに言ってどっちが神鳥に相応しいか勝負するっていうのはどう？ それなら公平にどっちが神鳥に相応しいかわかるだろうよ」

フォクノのその言葉にメリージアは納得し去っていったが、変わりにリーベは全身から冷や汗が流れた。神鳥であるメリージアと勝負することもまた、恐れ多くてできるわけがない。

あわあわと慌てるリーベをよそに、神鳥を掛けての勝負の舞台は日々順当に整ってしまう。先輩達からは応援していると激励されたが、リーベは直前まで逃げ出したい思いでいっぱいだった。

リーベは神鳥など望んではいないし、美しいメリージアこそ神鳥に相応しいと心から思っていたのもある。どうして彼女はリーベが神鳥を狙っていると誤解してしまったのか、さっぱり検討もつかないくらいだった。

そして勝負が始まる直前フォクノに泣きつくと、彼女はこういった。

「別に勝とうが負けようが、どっちでもいいじゃん。リーベはただ、いつもみたいに歌えばいいだけだよ」

勝ち負けは関係ない。いつも通り歌えばいい。その言葉にリーベの心は漸く落ち着きを取り戻す。

そうだ、勝負だなんだと考えるから怖くってしまうのだ。ただ特殊な舞台で、いつも通り歌うだけと考えれば、別段怖いことなどなにもない。

そしてリーベはその舞台で課題曲を独り熱唱する。観客席側からはリーベの姿が見えない特殊な舞台の上、いつものようにのびのびと歌ってみた。

勝つつもりなど全くなかったリーベであったが、なんと全員一致でリーベの勝利という結果に終わる。

この結果に一番驚いたのはきっとリーベであろう。負けたいと思って歌ったわけでもなかったが、まさかメリージアに勝てるだなんて微塵も思っていなかったのだ。

「……！ フォクノ・サラサ……！ 雑用ごときがわたくしに意見をするつもり？ リーベ共々、忌々しい娘ね……！」

メリージアの声のトーンが明らかに低くなり、苛立ちが混じる。フォクノがリーベの眼前にいるとはいえ、彼女の敵意はリーベにも向けられているのだとすぐにわかった。思わずフォクノの背中の中で小さく縮こまる。

「その雑用がいることで、歌手は歌うことだけに集中できていることをお忘れなく。下の人間を見下していると、いつか足元掬われるよ」

「口の聞き方が相変わらずなってませんこと……！ このわたくしを誰だと思って」

「優雅な暮らしなんてしたことがないもので。お金持ちの人への言葉遣いなんて、学んだことないんだよ。悪いね、コントクト商家のお嬢様」

コントクト商家とは、今から一年程前にフォーリエストに勢力を伸ばしてきた、大手の商家のことである。

フォーリエストは大国リファラムド王国に属する、豊かな自然に恵まれた、長閑な田舎街だ。それ故に、数年前から王都に住まう貴族達の保養地として利用されてきた。カーテュアリーミュージアムが建設されたのも、その時期である。空いた時間を持て余す貴族のため、充実した余暇を過ごしてもらうために、カーテュアリーミュージアムは建てられた。

それでも利用者の大半はフォーリエストの住民達だ。元々娯楽が少なかったこの地に出来た、音楽を楽しめるミュージアム。入場料は決して安くはないが、一般市民でも手が出ないほど高額なわけでもない。たまの休暇に家族で訪れるフォーリエストの市民は多く、今でも賑わいを見せている。貴族がフォーリエストに滞在する期間は限られているのだから、彼らの為だけに公演しては採算が合わないのだ。だからカーテュアリーミュージアムで演奏される曲目は、誰でも楽しめるような明るい曲調のものが大半を占める。

しかし一年程前にコントクト商家がやってくると、少し事情が変わってしまった。彼らは率先してフォーリエストの開発を進め、貴族の為の保有地を増やし始めたのである。貴族がフォーリエストを訪れる機会は増えに増え、最近ではしっとりとした、上品な曲調の歌を増やすようになっていた。

今はまだ貴族よりも市民の方が客の数は勝ってはいるが、更に開発が進めばもっと貴族の客は増える一方だろう。それは同時に、一般市民がミュージアムを利用できなくなる可能性を秘めていた。

それ故に、フォーリエスト住民は開発を推し進めていくコントクト商家を、快く思っていない者が多い。リーベも、できるだけ多くの人に歌を楽しんで欲しいと思っているため、特定の者達だけしか音楽を楽しめなくなるのは嫌だなあと思っていたりもする。

「本当に口の減らない……っ！」

メリージアは、息を詰まらせると、勢いよく踵を返し、憤りを露にししながら、バン、と衣装室の扉を開けた。そして閉めることなくドスドスと足音を立てながら去っていく。

「リーベ、大丈夫？」

メリージアの姿が見えなくなった直後、先輩達がリーベの周りに集まって心配そうに顔を覗き込んでくる。

「あ、はい……大丈夫、です」

「全く……漸くリーベの意気を浮上させたっていうのに、余計なことしかしてくれないお嬢様だ」

「フォ、フォクノ……！」

面倒くさそうに頭を掻きながら呟くフォクノに、思わずリーベは慌てた。呟くと言っても潜めるには音量が大きすぎる。メリージアに聞こえてしまっていたら、彼女はまた怒るかもしれない。しかしフォクノはもう近くにはいないから大丈夫だと、カラカラと笑った。

「でもフォクノの言ってることも本当よねえ。楽都のサーレーンでも神鳥をやったからって、誰に対しても高圧的だし」

「そうそう。でも、実力も確かなのも腹立つわ。前々神鳥の姉さんに向かって実力がある方が神鳥に相応しいとか言ってさ。まあ、同じ理由でリーベに神鳥をとられたときはスカっとしたけど」

「ほんとほんと。だから本当にリーベには感謝してるわ。あいつから神鳥を勝ち取ってくれたんだもの」

誰に対しても上から目線なメリージアではあるが、彼女の細い喉から放たれる歌声もまた素晴らしいの一言である。艶やかな声音に溢れる声量。音楽の聖地である楽都サーレーンでも神鳥を勤めていたという言葉に、偽りなしの実力だ。

そんな彼女のことを、リーベはこっそり憧れたりしているのだが、メリージアからは嫌われているようで悲しい。舞台上で転ぶことがなくなれば、少くくは認めてくれるだろうか。

「リーベ、あんたは実力で神鳥をお嬢様から勝ち取ったんだ。だからもっと胸を張りな。そこは自信持つべきなんだからね」

「う、うん……」

正直なところ、今でもリーベは自分なんかよりも、メリージアの方が神鳥に相応しいと思っている。見た目も美しく、誇りを持って堂々と歌う彼女の姿はリーベの理想通りの神鳥そのものだ。それに何より、彼女はステージ上で転んだりはしない。

「そうね、フォクノの言うとおりによ。リーベはむしろあのお嬢様を少しは見習うべきね。あそこまで傲岸不遜になられたら嫌だけど」

「堂々としてるリーベなんて全然想像できないけどね」

思えば、リーベはいつも転びやしないかとビクビク怯えるばかりで、おどおどしている。メリージアが輝いて見えるのは、彼女はいつも堂々と前を向いているからだだろう。

(転ばないようにになったら……わたしも、メリージアさんみたいになれるかな)

彼女のような素敵な神鳥になる。リーベは胸の前でぐっと両手を握り締めた。

「わたし、今から転ばない練習してくる！」

善は急げだ。今までの練習もきちんと身につけているのだから、もっと練習して絶対に転ばないようになりたい。いや、ならなければ。

リーベは先輩達に向かって軽く頭を下げてから、バタバタと衣装室を後にした。

「よし、これで完全に浮上したな」

「今日のところは大丈夫ね。あ、フォクノも焼き菓子食べる？ 落ち込みやすいリーベの軌道修正、いつもご苦労様」

「あ、食べる食べる。ありがと、姉さんたち。リーベとはちっさい頃から一緒だから、今に始まったことじゃないし、大変なことでもないよ」

リーベが去った後の衣装室で交わされた言葉を、リーベが知る術はない。

憎い。憎い。憎らしい。

メリージアは大きく足音を立てながら、廊下を早足で歩いていく。すれ違う雑用達がこちらをぎょっとした目で見ると、今のメリージアにそんなものは映らなかった。

(あんな小娘に……あんな田舎臭い小娘に神鳥の座を奪われるだなんて……！)

自身の楽屋の扉を勢いよく開くと、中でおしゃべりにでも興じていたのか、家から連れてきた侍女達が、驚いたような顔をこちらに向ける。特にそのことを追求するでもなく、専用の己の椅子にドカリと座ると、彼女達は慌ててメリージアの髪を梳かし始めた。

「メ、メリージアお嬢様、失礼いたしますね」

「お、お嬢様、お飲み物は何か召し上がりますか？」

「ち、父君様からの差し入れもございますよ。とっても美味しそうなフルーツです」

「……紅茶を淹れなさい。淹れたて以外は認めないわ。フルーツは結構よ。今は何も食べたくはないの」

「は、はい。かしこまりました」

一人が湯を取りに行くべく楽屋を出て行くのを横目で見つつ、残りの侍女にマッサージを促す。一人は肩を、もう一人は足を念入りに揉んでいく。

(全く……マッサージさせる相手もわざわざ家から連れてこないといけないなんて、これだから田舎のミュージアムは)

以前メリージアが所属していたのは、ここリファラムド王国内でも有数の楽都と呼ばれるセーレーンの一流のミュージアムだ。歌い手はもちろん、歌い手一人一人を丁寧にケアする人間も、数多く在席していた。喉が渴いたと言う前に飲み物を用意し、差し入れのフルーツは食べ易くカットされ、マッサージ専用のスタッフまで揃っている。

なのにこのカーテュアリーミュージアムときたら、最高の歌い手である神鳥にすら、公演後の労いをしてくれる専門のスタッフが存在しない。

雑用は無駄に多くいるくせに、彼らがすることといたら会場の掃除や、設備や楽器の点検などと、どうでもいいことばかりだ。

それをわざわざ進言したにも関わらず、責任者であるオーナーのユナフィアから返ってきたのは、そんなことをするための費用はない、の言葉だけ。今まで必要としていなかったのだから、これからも必要ないと。更には、そんなに必要ならば自分で用意してくれとのたまう始末。

そもそも、メリージアがこんな片田舎の街に来るはめになったのは、父の仕事の都合である。更なる利益を得るべく、未だ発展途上なフォーリエストに目をつけ、家族揃ってやってきた。

本当ならば、こんな田舎臭いミュージアムなどこちらから願い下げではあるが、フォーリエストにあるミュージアムは、このカーテュアリーミュージアムただ一つ。メリージアの高貴なる歌声を披露できる場所は、ここしかないのだ。他にミュージアムが存在しない以上、責任者の言葉を呑むしかない。

(やっぱりわたくしが最も輝けるのは楽都しかないわ……！ いつになったら戻れるのかしら)

一人でフォーリエストに行くのは寂しいと父に言われてしまったら、ついて行かないわけにもいかず、楽都を離れたのは半ば仕方なくだ。決して好んで来たわけではない。

(洗練されたわたくしの歌よりも、田舎娘の歌の方がいいだなんて、この街の人間は耳まで田舎臭いのため嫌になる。そうでなければ、わたくしがあんな小娘なんかには負けるものですか……！)

沸々と苛立ちが湧き上がり、自然と手に力が籠ってギリリと握り締める。当時の記憶が甦った。

メリージアがフォーリエストにやってきたばかりの日、彼女が真っ先に向かったのは唯一のミュージアムだ。こんな片田舎の神鳥よりも、楽都で神鳥をしていたメリージアの方が高い実力の持ち主だということは、自明の理。だからこそメリージアは言ったのだ、実力がある方が神鳥をするべきだと。

しかしここで神鳥をしていた娘はとてつもなく頑固で、神鳥を譲るつもりはないと言ってきた。誰がどう見てもメリージアよりも劣っているにも関わらず。メリージアと彼女の口論は平行線で、終わりが見えなかった。

そこでユナフィアは二人を勝負させることにした。一般で審査員を公募し、姿を現さず歌声だけでどちらがよかったかを比べてもらう。数の多い方が勝ちという極めて単純明快な勝負方法だ。

そして当然ながら、メリージアは圧勝した。結果が判明したときの悔しそうに顔を歪ませる彼女の顔は、実に見物だったことをよく覚えている。初めから大人しくメリージアに神鳥を譲っていれば、そんな屈辱は受けなかったものを。

後日、彼女がミュージアムを辞したと聞いたときも、特に感慨は抱かなかった。

神鳥を見事に勝ち取ったメリージアは、多少とは言えない不備に不満はあれど、大勢の観客の喝采を受けて満足していた。田舎者が多いと聞いていたため、マナーの心配をしていたのだが、そこは杞憂に終わる。

状況が変わってしまったのは、数ヶ月前。一人の少女が新しく入団したときのこと。

見た目はどこにでもいるような、ちっぽけな娘だった。背は低いし、髪と目も地味な黒色。おまけに動きが鈍くとろくさいときた。はっきり言って、見とめる価値もない小娘としか思えず、視界に納めるといことはしなかった。どうしてこんな少女が入団試験に受かったのかなんて、考えもせず。

基本、入団したばかりの歌手は、日々発声練習に精を出すもの。舞台に立てるのは十分な実力を身につけてからだ。なのに、その少女は入団して日が浅いにも関わらず、もう舞台に立つということを耳にした。

舞台に立つと言っても、大勢が一斉に歌う合唱に参加するだけだ。少し素質のある人間ならば、それくらいは別に珍しくはないし、何よりここは田舎のミュージアムだ。多少レベルが低くとも充分と見なされた可能性もある。

だから、このときもまたメリージアは、少女のことに見向きもしなかった。

そして事態は今から大体一ヶ月程前に遡る。いつものように公演を終え、リラックスしようと、楽屋へ向かう最中のことだった。

「――よね！」

「うんうん、あたしもそう思うわ。リハーサルでも、あたしあの子の歌に思わず聞き惚れちゃったし」

ある楽屋から聞こえてくる歌手達の他愛ない世間話。特に興味も沸かず、そのまま楽屋を素通りしようとしたそのときだった。

「このミュージアムで一番歌が上手いのは、やっぱりリーベよ。あの子が神鳥をやるべきじゃないかしら」

「今度ユナフィアオーナーに言ってみる？ あの子を採用したのオーナーなんだし、素質はオーナーもわかってるはずだもの」

「そうよね。一番歌が上手い人が神鳥だもの、リーベが神鳥をするべきだわ」

聞き捨てならない言葉が聞こえたのは。

(誰が神鳥をするべき、ですって……？ わたくし以外に神鳥に最も相応しい者なんて、いるわけがないわ！)

メリージアは身体を翻し、話し声が聞こえた楽屋に乗り込んだ。彼女達はメリージアの姿を見るなり顔を顰めさせるが、今はそんなことを気にしている場合ではない。

「誰？ わたくしの神鳥を虎視眈々と狙っているという愚か者は」

口ごもる彼女達から、メリージアの神鳥を脅かす存在の名を聞きだすと、メリージアはすぐさまその少女の元へ向かった。

リーベという名前の少女が、春先に入ったばかりの新人だと知ったのはこのときだ。

メリージアは彼女の大人しそうな外見にすっかり騙されてしまっていた。恐らく彼女は、入団してから虎視眈々と神鳥の座を狙っていたのだろう。田舎臭い小娘が何ともおこがましい限りだ。ここはメリージアが存在する限り、彼女が神鳥になるのは夢のまた夢であることを、強く自覚させねばならない。

彼女のいる控え室へとわざわざ赴いたとき、リーベはメリージアの姿を見るや否や、ポカンと大きく目と口を開けて驚きを露にする。唇に差し入れの焼き菓子のカスがついたその姿は、どう見ても間抜けだとしか思わなかったが、その姿に騙されてはならないと、メリージアは己に強く言い聞かせた。

「お前ね、わたくしの神鳥を狙う愚か者は」

「え……？」

「惚けても無駄よ。先ほどわたくしはこの耳で、しっかりと聞いたのだから」

強い口調で問い詰めると、彼女は困惑気に首をフルフルと横へ振った。だが、そんなことは信じない。それに、心なしか表情が青ざめているのは、凶星を差されたからに決まっている。

「わ、わたしはまだ新人ですし……その、神鳥なんてわたしに勤まるはずがない、ですし……とても恐れ多いです」

「そうよ。お前なんかには勤まるはずがないわ。このカーテュアリーミュージアムで神鳥が勤まるのはこのわたくし、メリージア・コントクトのみですもの」

「なんだよ、結論出てるじゃんか」

突然割り込んできたのは、スラリと背が高い少女だった。彼女がリーベの前に立つと、すっかり彼女の姿が隠れてしまうほどの。柔らかいブロンドの髪を短くまとめ、つり気味な碧の瞳は呆れが多分に含まれている。なかなか顔立ちが整った娘ではあるが、メリージアの美貌の前ではそれも霞むというもの。

「つーかさ、どこからそんな情報仕入れてきたか知らないけど、リーベが神鳥を狙うわけないじゃん。舞台の上で立っただけで毎回大満足してるヤツだよ、こいつは。あんたの聞き違いだろ？」

「……！ わたくしをあんた呼ばわりするなんて……！ わたくしはこの神鳥よ。それ相応の態度や言葉遣いというものがあるのではなくて!？」

「……あー、そりゃどうもスンマセン。こちとらろくな教育が受けられない孤児院で育ったもので。こんなしゃべり方しかできなくて申しわけないね、お嬢様」

長身の少女は全く悪びれた様子がなく、メリージアは憤りを募らせた。明らかに彼女はメリージアを舐めてかかっている。メリージアの神鳥の座を狙う娘も腹立たしいが、彼女の態度もまた苛立ちを覚える。

「えと……その……わたしが神鳥を狙ってないって、ど、どうしたら理解し、してくれますか？」

「リーベ、怖いなら下がってな」

「で、でも……！」

「白々しい。そうやってわたくしを騙そうとしてもそうはいかないわ」

「ああもう、これじゃあ平行線だ」

平行線も何も、メリージアの中でリーベが神鳥の座を狙っているというのは確定済みである。ブロンドの少女は眉間を寄せながら手を当てると、小さくそうだと呟いた。

「なら、オーナーに言ってどっちが神鳥に相応しいか勝負するっていうのはどう？ それなら公平にどっちが神鳥に相応しいかわかるだろうよ」

「フォ、フォクノ!？」

その言葉で思い出したのは、かつて前の神鳥から神鳥を勝ち取ったこと。今回もまた、圧倒的な力の差を見せ付けられれば、彼女がメリージアを差し置いて神鳥になろうという痴がましいことを思うこともなくなるはず。

「いいでしょう。その勝負、受けて立ちますわ。圧倒的な実力の差というものを見せてさしあげる」

「決まりだね。なら、お嬢様の方からオーナーに言ってもらっていい？ あたしら一応まだしたっばなんでね」

「フン、いいわ。挑戦を受けて立つのも上に立つ者の勤めですものね」

メリージアは二人に背を向け、オーナーのいるところへ向かった。リーベと正式に神鳥を掛けた勝負をするために。

思えばこれがいけなかった。メリージアに神鳥を掛けた勝負をさせることこそが、彼女達の策略だったのである。

勝負は、以前に行われた方法と全く同じ方法がとられた。先にメリージアが歌い、その後にリーベが歌う。

リーベの歌は、確かに素人離れしていた。小さな身体から発せられたとは思えないほどの声量に、滑らかな高音。神鳥の座を狙うだけの力量はあると、素直に思った。

だがそれだけだ。メリージアの方が高音に力強さがあるし、何より高貴な雰囲気は田舎臭い小娘には出せない。

今回もまた勝利を確信していたメリージアは、下された結果に驚愕することとなった。

審査員として招かれた市民達を選んだのは、リーベの歌の方だった。メリージアの歌を選んだ市民は一人もいない。以前行った勝負のときでさえ、ほんの数人かは前の神鳥の歌を選んだ者がいたにもかかわらず。「勝者、リーベ。よって、カーテュアリーミュージアムの神鳥はリーベに決まったわ」

「……！」

オーナーのその言葉に、メリージアは脳天を貫かれたような衝撃を受けた。メリージアはたった今から神鳥ではなくなる。楽都サーレーンでも神鳥を勤めていたメリージアの大事な神鳥が、隣にいる少女へと奪われてしまった。

「リーベすごおい！ まさか本当に勝っちゃうなんて！」

「おめでとう、リーベ！」

次々とリーベを祝福する声と喝采が会場を響かせる。しかし、メリージアの耳にそんなものは入らなかった。

(わたくしが、あの小娘に負けた……？ あんなただの田舎娘に、わたくしが……!?)

そんなこと、認められるわけがない。何故経歴のない素人同然の小娘に、ずっと神鳥を務めてきたメリージアが負けるのか。どう見てもおかしいではないか。

(そうよ……ここは田舎だったわ。集められた市民も、田舎者ばかり。洗練された高貴なわたくしの歌よりも、田舎臭いリーベの歌声を好む傾向にあるのよ。そうでなければ、わたくしがこんな小娘になど負けるものですか……！)

そしてハッと気づく。あのブロンドの娘は、このことに気づいていたのではないだろうか。フォーリエストの人間の耳は田舎染みていると。だからこそ、メリージアに勝負を持ちかけたのだ。メリージアから神鳥の座を奪うために。メリージアの美貌や才能を妬んでいる者は大勢いる。彼女がその一人だとしても、なんらおかしくはない。

「——この勝負は無効ですわ！」

メリージアは声を張り上げ、フォクノという少女に自分は嵌められたのだと力説した。歌い手に関しては実力主義を念頭に置いているユナフィアならば、きっとメリージアの言い分を理解してくれると信じて。「なんでリーベに負けたのがあたしのせいになるのさ。あのときは単にその場をどうにかしたかっただけだっつーに……勝とうが負けようが、リーベに損はないくらいの考えしかなかったよ」

煩わしげに頭をボリボリと搔きながら呟く彼女に、悪びれた様子は微塵もない。メリージアは更にそのことを指摘し、オーナーに勝敗の無効を訴え掛けるが、彼女の首は縦に振られなかった。

「お客様を侮辱するような人を神鳥に据えておくことはできないわ。それにもしあなたの言う通りだとしても、大事なのはただ上手いだけの歌ではなく、お客様を満足させられる歌、よ」

「……っ！」

侮辱も何も、本当のことではないかと告げるも、ユナフィアは決して勝敗の結果は変えないとの一点張りだった。何度も自分はフォクノに嵌められただけ、田舎者の客しかいなかったためだと力説しても、頑なに彼女はメリージアの言葉を跳ね除ける。それだけでなく、これを機に自分自身を見つめ直すといいと、よくわからないことを言い出す始末だ。

残ったのは、リーベに神鳥を奪われたという事実。

なんという屈辱だろうか。ここが気品ある貴族たちが集う楽都サーレーンだったならば、こんなことは起きなかっただろう。審査員として呼ばれた街の人間が皆田舎者だったせいで、メリージアの生きがいは完全に奪われてしまったのだ。

初めはカーテュアリーミュージアムを辞めようかとも思ったが、フォーリエストに他にミュージアムはなく、父の仕事もまだ当分は落ち着きそうにない。辞めてしまったら、スポットライトを浴びる機会が完全になくなってしまう。それだけは絶対に嫌だった。

神鳥として舞台に立てなくなってしまったメリージアが選んだのは、とりとは真逆の一番手である。開幕と同時に一人舞台を彩り、盛り上げる。苦渋の思いで決断した妥協点だ。

それに、メリージアは神鳥の座を諦めたわけではない。開幕時点でインパクトを残せば、観客に「何故彼女が神鳥ではないのだろうか」と思わせられるだろう。その疑問が広がれば田舎者の観客たちも、メリージアこそ神鳥に相応しいと思ひ直すはず。

そしてメリージアが神鳥を辞してから、初の公演が現在行われている。ことは順調に進んでいるだろう。何より、リーベは舞台上で転ぶなどという大失態を、一度ならず何度も繰り返し犯している。こんな小娘が神鳥に相応しいなど、一体誰が思うだろうか。

それなのにユナフィアの意向は全く変わっていなかった。昨日、これだけ失態が続いているのだから、リーベから神鳥を取り上げようとするだろうと期待して彼女の元へ訪れたのに、メリージアはまたしても全く取り合ってはもらえなかった。

彼女曰く、リーベの歌は転ぶという失態を犯してもプラスになるほど好評であると。今回の公演は今まで以上にチケットの売れ行きがよく、千秋楽まで既に完売済みな上に、立ち見席まで新たに設けたのだとか。

神鳥が変わったら、チケットの売上が伸びた。それはまさしく今の神鳥が前の神鳥よりも好評であることを意味していると、彼女は理不尽なことを告げる。

(あの娘がいなければ神鳥はわたくしのものだったのに……！)

田舎街の人間好みの歌を歌う少女の存在。彼女さえいなければ、メリージアの神鳥の座は揺るぎないものだった。彼女の存在こそが、メリージアから何より大切な神鳥の座を奪い去った。

(今に見ていなさい、リーベ。わたくしから神鳥を奪ったこと、後悔させてあげますわ……！)

金色の瞳に渦巻いているのは、薄暗い嫉妬の炎だった。

「フウ……大分暑くなったね」

リーベは雲一つない青空を見上げる。サンサンと注ぐ夏の日差しは強く、頬から顎にかけて汗がつたい落ちた。

「これから夏本番だから、もっと暑くなるだろうね……にしても、皆元気そうでよかったよ」

「うん。そうだね」

隣を歩くフォクノも、暑そうに手をパタパタと団扇替わりにしているが、その効果はほとんどなさそうだった。

昨日千秋楽を迎え、公演に一区切りがついた。そして今日は、次の公演に向けての練習が始まる前の、休息の日である。

リーベとフォクノは、フォーリエストにある孤児院出身だった。病気や不慮の事故など、親を失い独りになってしまう子供は決して少なくはなく、各街に最低一つは必ず設けられている。

住み込みでカーテュアリーミュージアムで働いている二人は、こうした偶の休日に孤児院を訪れていた。孤児院にいるのは、リーベ達よりも年少の子供たちばかりだ。適齢期になれば、仕事を探して出ていかなければならないため、必然的に小さな子供ばかりが孤児院に残る。たまに卒業した先輩たちが、リーベ達と同じように様子を見に来ていたため、二人もそれに習っていた。

「皆といっぱい歌って楽しかったなあ……ね、シロ」

リーベは顔を左に向け、左肩に止まっている小さな小鳥に話しかけた。すると小さくぴいと可愛らしい返事が返ってくる。

「シロも大分元気になったよね。拾ったときはボロボロで、一時はどうなることかと思ったけどさ」

フォクノがリーベの左肩に止まっている小鳥に向かって手を伸ばし、軽く指でそっと背を撫でる。

この小鳥は、リーベが神鳥になる少し前に、ミュージアムの近くでボロボロになっていたところをリーベが拾ったのだ。怪我の手当をし、食事のパンを分け与えて介抱しているうちに、小鳥は次第に回復していった。そして小鳥はリーベにとってもよく懐いてくれたため、リーベは完全にこの小鳥に情が移ってしまったのだ。

ユナフィアに許可をとり、フォクノと二人で面倒を見ている。今ではこうしてリーベの肩に乗って外出することも多くなった。

「うん……でも、雫られちゃった羽、全然生えてこないね……」

羽毛の色艶もよくなり、もう完全に回復したと思ってもよさそうではあるのに、何故か右の羽は拾ったときの肩羽しかない状態のまま、新たに生えてくる気配が全くない。左の羽は既に新しく羽毛が生え変わり、シロという名前の由来になった純白の色も相まって、とても綺麗だ。だからこそ、余計に片羽しかない状態のシロの様子が気になって仕方がない。

「こればかりはどうもねえ。鳥に詳しい知人もいないから聞きようがないし」

「悪い病気じゃないといいんだけど……」

「それは気にしても仕方がないんじゃない？ 今元気ならそれでいいじゃん。シロは頭がいいから、自分に何か異変を感じたら何らかの形で伝えてくれるよ、きっと」

フォクノがそういうと、シロはフォクノの手に乗り、小さな足を交互に動かしながら彼女の肩へと移動する。そしてどこか誇らしげにぴいと鳴いた。彼は人の言葉を理解しているような節がある。とても利口な鳥だった。

「それに、真っ白な片羽の鳥って神鳥みたいでかっこいいんじゃない？ ね、シロ」

「あはは……羽のある方向逆だけどね」

かつて天界の創造神の心を癒したと伝わっている『神鳥』は、純白の片羽の鳥である。羽がある方は右側とされていて、何気ないことだが全てのミュージアムがそれを忠実に守っている。リーベが身につける衣装も、右腕はたっぷりとした袖に覆われているが、左腕は肩から指先まで露出されているものであり、これが右の翼と存在しない左の翼を表現していた。

シロの翼があるのは左翼であり、ないのは右翼。つまり神鳥の翼とは正反対だ。

「そういうことよりも、わたしは片方しか翼がないから、自由に空が飛べないのが可哀想だなんて……」

「リーベ……」

片方しか翼のないシロは、当然というべきか空を自由に飛びまわることはできない。できることといえば、低い位置で跳ねるくらいか。本来ならば、翼を広げて空を飛び回れたらうに、今ではそれができない。それを一番齒がゆく思っているのは、きっとシロだろう。

——ピィ

「え？」

シロが小さく鳴いたかと思えば、片方しかない羽を大きく広げ、フォクノの肩からリーベの肩へと飛び移ってきた。再びリーベの肩へと戻ってきたシロを、目を大きく見開きながら見つめる。

「——心配するな、って言ってるんじゃない？」

「あ……」

フォクノに同意を示すかのように、シロは短くピ、と鳴いた。

「ごめんね、わたしが弱気になっちゃダメだよ。ありがとうシロ、励ましてくれて」

シロの方が大変だというのに、リーベのことを気遣ってくれている。これでは一生懸命生きているシロに申し訳がない。リーベはにっこりと微笑みながら、そっとシロの身体を撫でた。

「これからも、外に行くときはできる限りシロを連れてこっか。シロ一人じゃ踏み潰されないか心配だけど、こうして肩に乗せれば、いくらでも外を見せてあげられるし」

「うん、そうだね」

歌の練習で忙しいときは厳しいが、合間にある休日を、こうしてシロと一緒に外で過ごすのも悪くない。

「せっかくだし、今日は普段行かないようなところ行ってみない？ ——貴族街とかさ。お貴族様が構える別荘って庭とか綺麗って聞くし、見るだけなら楽しめそうじゃん。お貴族様も、遠目で観るくらいは許してくれるだろうよ」

「わ！ それいいね。わたし、一回行ってみたいなって思ってたんだ」

フォーリエストは緑豊かな自然に恵まれた土地だ。昔から王都の貴族が静養目的の別荘を建てていたが、最近はコンクト商家がそれを後押ししているため、貴族の邸は増えに増えた。一般市民が暮らしている一帯からは離れた区画に、貴族の邸が集中している貴族街がある。特別用もない限り、そこへ足へ踏み入れることはほとんどないが、一般市民が近づくことを別段禁止されてはいない。

(きっと綺麗なんだろうなあ……)

貴族のために用意された邸は、その目を楽ませるために整えられた広い庭があると聞いた。季節の花やフォーリエストでは見られない貴重な花など、色とりどりの花が使われていると。

フォクノと他愛ない話をしながら、貴族街の方へと歩みを進めていく。現在地からそう離れたところではなく、気づけばあっと今にたどり着いていた。

「うわあ……立派な建物がいっぱい……！」

「無駄に金がかかっている家はやっぱ違うわなー」

その区画からは、街の雰囲気さがらりと変わった。

素朴な家々が連なっていた街並みから、大きく豪華な家が点々と存在する街並みへと。家々の間から伸びる特に手入れがされていない木々が、等間隔に揃えられたものへと。

「そんじゃ行こっか」

「う、うん！」

リーベは少し気後れしながらも、貴族街へと一步を踏み出す。

「わー……」

見渡す限りに広がる家々や庭。リーベの目を特に惹いたのは、庭に咲いている花だ。赤白黄色だけでなく、可愛らしい桃色の花や、珍しい青や紫色をした花もある。

――ピィピィ！

「ん？ シロも楽しいの？ よかったね」

リーベの肩の上で元気よく鳴くシロを軽く撫でながら、リーベは別の場所へと移動していく。

とある庭に目を凝らせば、今度は池に浮かぶ花の姿を見かけた。あれは一体何という花なのだろう。

「ねえ、フォクノ。あの花なんて……」

振り返ったリーベは続けるはずだった言葉を飲み込んだ。

フォクノがいない。反対の方を振り返るが、そこにもまた彼女の姿はなかった。

「え、え……フォクノ？」

慌てて周辺を見回すが、フォクノはどこにも見当たらない。ポツポツと人が歩いているのは見えるが、その中にフォクノはいなかった。

「ど、どうしよう……はぐれちゃった……」

さあっと全身から血の気が引いていく。庭を観ることが楽しくて、つい夢中になってしまったが、フォクノとはいつはぐれてしまったのだろう。

――ピィピィ！

「あ……シロはもしかして、わたしがフォクノから離れちゃったのを知らせようとしてくれたの？」

――ピィ！

先ほどから元気よく鳴いているとしか思ってなかったリーベは、ごめんねと小さく謝りながら、シロの背中をそっと撫でた。シロの警告に初めから気づいていれば、こうしてフォクノとはぐれてしまうこともなかっただろうに。

「と、とりあえず、フォクノを探さなくっちゃ……！」

きっとフォクノもリーベがいないことに気づいて、探してくれているはず。そして多大な心配をかけてしまっているだろう。彼女は口調は軽いが、とても面倒見がよく根は真面目だ。見つかるまでずっと探し続けてくれるに違いない。

「フォ、フォクノー！ わたしはここだよー！ フォクノー！」

リーベは声を張り上げてその場を離れるが、近くにフォクノらしき人物の影はない。ならば人に訪ねてみようとして近くにいる人に声をかけようとするが、近づくと彼らは面倒臭そうな顔をしながら、ふいっとリーベから急ぎ足で離れてしまう。着ている服からして、貴族に仕える召使い達だろう。彼らは彼らで急ぎの仕事があるのかもしれない。

だが困った。迷ったところから進んだはいいが、フォクノの姿は一向に見つかる気配がない。一度貴族街を出てみようと思ったが、前後左右、整然と整えられた区画はどの道も同じようにしか見えず、方角がわからなかった。

(ど、どうしようどうしよう……！)

あわあわと慌てるリーベの頭は、どんどん混乱していく。気持ちばかりが焦り、目頭がじわりと熱くなってきた。そのときだった。

――ピィ。

「え、シロ……！ あ、だめ！」

突然シロが片羽を大きく広げたと思ったら、リーベの肩から飛び降りる。空へ舞い上がれはしないものの、地面へと着地するだけならばできるのだ。

人の往来が激しい場所ではないが、皆無なわけでもない。シロが踏み潰されてはいけないと、リーベはシロを捕まえようとするが、シロは颯爽とリーベの手を躲してしまう。

「あ！ 待って！」

それどころか、小さな二つの足を忙しく動かし、リーベから離れようとしていた。リーベは捕まえようと奮闘するが、伸ばす手は全て虚しく空ぶるばかり。

焦りながら追いかけて続けると、突然シロは方角を変更する。がさっと小さな音を立てて入っていったところは――とある貴族の敷地の中だった。リーベの身長と同じ高さの木々がたくさん植えられており、庭の様子が外から見えない造りになっている。

「シ、シロ！」

リーベは囲いの外から、中へと入ってしまったシロの様子を伺う。おいでとそっと腕を伸ばすが、シロはピィと小さく鳴くと、さらに奥へと行ってしまった。

(い、いつもなら乗ってくれるのに……！)

植え込みの隙間から焦り混じりに様子を伺っているリーベとは裏腹に、シロは楽しそうに飛び跳ねていた。

(フォクノともはぐれちゃったのに……どうしよう)

囲いの外からいくら手を伸ばしても、シロはこちらに見向きもしてくれない。一度手を戻して立ち上がり、周囲を見渡した。近くにフォクノがいるかもしれないという僅かな期待を込めて。しかし、案の定というべきか、やはりフォクノの姿はどこにもない。

(ど、どうしたら……あ)

キョロキョロと首を動かしていると、庭の裏口とでもいえる小さな扉がついていた。シロを捕まえてすぐに戻れば大丈夫、と己を言い聞かせながらとってを握る。が、鍵がかかっている開かなかった。リーベはへなへなとその場にしゃがみこむ。

(ううううう……どうすればいいの……)

肩を落としながら俯くと、ピィと可愛らしい鳴き声が聞こえてくる。顔を上げると、囲いの隙間からシロがリーベの様子を伺っていた。あの場所から離れたリーベのことを気にして、様子を見に来たのかもしれない。

「……シロ、その庭が気に入ったの？」

――ピィ！

元気に鳴いているシロの真意はわからないが、この場所をいたく気に入ったのは間違いないだろう。彼はリーベの様子を伺うことはしても、この場を離れようとはしない。

(確かに木とか瑞々しく感じるけど……)

今まで見てきた庭の木々や草花も、とても綺麗で美しかった。ここには花がついていない木々しかないにも関わらず、どこか生き生きとした、爽やかな雰囲気を感じる。

もしかしたら、生命力の息吹のようなものを、シロは感じているのかもしれない。あくまでリーベの勝手な想像のため、事実はわからないが。

(……動かずにじっとしてたら、フォクノは見つけてくれるかな?)

闇雲に慣れない貴族街を探し回るよりか、一箇所で大人しくしていた方が遭遇率は高いかもしれない。
(よーし、それなら……)

リーベはシロをじっと見つめた後、一度息を全て吐き出し、そして大きく吸い込んだ。

「――」

シロはリーベの歌を気に入ってくれている。気に入った場所にお気に入りの歌で満足させてあげられれば、リーベのところへと帰ってきてくれるかもしれない。確証はないが他にやることもないため、リーベはしゃがみこんだまま、しゃべる程度の音量で、軽快な歌を唄い始める。

時折シロが音頭をとるようにピィと鳴いた。まるで唄っているかのように合わせてくれるシロに気分が高揚したリーベは、楽しくなっているのを感じる。色濃く生い茂っている草木が影になって暑さが和らいで心地よくなっていたのもあるかもしれない。すっかり気分がよくなったリーベは、シロと共に唄い続ける。

わたしは今日も歌を唄う

全てに心をくたく偉大なあなたのために

あなたの心を癒したい

あなたの心をほぐしたい

わたしは唄うよ何度でも

わたしの歌であなたが幸せになってくれるのならば

それがわたしの最高の幸せ

幼い頃から繰り返し歌い続けていた童謡を口ずさむ。神のために歌を唄い続けたという神鳥の気持ちを表現してみた歌らしい。

この童謡は幼い頃からリーベがよく好んで歌っていた歌だ。神鳥が唄うのは神のため。ミュージアムで最高の歌い手を指す由来となった、神の幸せを願って唄い続けるという神鳥に、幼いリーベは憧れた。自分も、歌うことで誰かを幸せにすることができたなら、きっとリーベ自身も幸せな気持ちになるだろう。

だからこそ、ミュージアムに入団できたときはとても嬉しかった。自他共に認める鈍臭い自分が、入団試験に合格できるとは正直思ってはおらず、試験を受けることすら尻込みしていたのだ。

背中を押してくれたのはフォクノだった。リーベの「歌で誰かを幸せな気持ちにしたい」という思いを彼女は汲み取ってくれて、それをしたいならミュージアムに絶対入団するべきだと、強く勧めてくれた。そして裏方として自分もサポートするからと、一緒に試験を受けてくれたのだ。

結果としてリーベとフォクノは無事入団試験に合格した。リーベは歌い手として、フォクノは裏方として。

舞台の上に初めて立ったとき、たくさんのお客さんが会場にいるのを見て、リーベは圧倒された。緊張しながらも歌を唄い、歌い終わった後の観客からの盛大な拍手に、じわりと目頭が熱くなった。決して自分一人だけが歌ったわけではないのに、多くの人に受け入れてもらえたのだと、感動した。そして改めてミュージアムに入団することを勧めてくれたフォクノに感謝した。フォクノが勧めてくれなければ、リーベはきっと今頃ミュージアムに入団なんてしていなかっただろう。

――ピィ。

シロが楽しそうに鳴きながら、ぴょんぴょんと庭の中で跳ねている。リーベはまた別の歌を唄おうと、息を大きく吸い込んだ。

「――誰だ、そこにいるのは」

「！」

突如聞こえた低めの男性の声音に、リーベの身体がビクッと震えた。そのせいで息が喉に詰まり、ゲホ

ゲホとむせ返る。

「……」

姿を現した人物に、リーベは涙目のままさあっと顔が青ざめていくのを感じた。

若干のあどけなさを残した容貌に、どこか無機質な光の宿った琥珀色の瞳がリーベを見下ろしている。短く整えられた赤茶の髪が風に吹かれて揺れるが、無表情とも言える表情から、新たに言葉が飛び出す様子はない。

「す、すみません……その、わたし……」

あまり大きな声で歌わないように自制していたつもりだったが、それでも中の人たちに聞こえてしまっていたのだろう。きっと彼は五月蠅いと怒りに来たのだ。

（どうしようどうしようどうしよう！）

騒がしくしたことをどう謝るべきか混乱していると、不意に彼の視線がリーベから逸らされた。まるで地面を見ているかのような彼の視線の先にいたのは、いつの間にか彼の足元に移動していた、シロ。

――ピィ。

「……」

彼は徐にその場にしゃがみこむと、シロに向かって手を伸ばした。するとシロは、嬉しそうに小さく鳴き、彼の手にとちこんど飛び乗る。

（し、知らない人にシロが懐くなんて……！）

リーベは衝撃を受けた。シロは基本人懐こい小鳥ではあるが、流石に初めて会う人間に対しては警戒を顕にする。リーベやフォクノがこの人は大丈夫だよ、と言って初めて警戒を解くのだ。今まで一度だって、知らない人間の手に自分から飛び乗ったことはなかったのに。

「……お前か、歌を歌っていたのは」

「！ は、はい！」

リーベは肩を竦ませながら、ピシ、と固くなる。怒鳴られるのを覚悟して、両手をぎゅっと握り締めた。

「……ありがとう。草木がとても喜んでる」

「え……？」

彼の口から出たのは、まさかのお礼の言葉だった。五月蠅いと怒られるのを覚悟していたリーベは、ポカンと口を開けた。

「もしよければ、もう一度歌ってはくれないか。草木たちがそれを望んでいるんだ」

「え、えっと……」

そして歌を所望されるとも思わず、リーベは面食らう。頭が混乱していて、自分はどうすればいいのかがよくわからない。

――ピィ。

シロが少年の掌の上から、リーベに向かって小さく鳴いた。歌えばいいじゃん、とでも言ったのだろうか。だが、おかげで心が落ち着いてくる。

彼はリーベに歌って欲しいと伝えてくれた。どんな理由であれ、歌い手として歌を所望されるのはとても嬉しい。己の歌を気に入ってもらえたということなのだから。

「えっとじゃあ……リクエストは、ありますか？」

「いや……歌には詳しくない。だからどんな歌でも構わない」

「あ、はい……わかりました」

どんな歌でもいいというのならば、もう一度神鳥の童謡を歌ってみようか。

どきどきと、舞台に立つときのような緊張が走る。それは決して不快なものではない。人に己の歌を聞

いてもらえるのだという、歓喜の印。リーベは彼に向かって軽く一礼した後、胸に手を当て息を大きく吸い込んだ。

「わたしは今日も歌を唄う――」

――ピィピィ。

リーベが歌いだすと、シロもまたそれに合わせて唄うように鳴いた。一人と一羽の合奏は、曲の長さも相まってすぐに終わりへと近づいていく。そして最後の一節を歌い、曲は終わった。

ふうと軽く息を吐いた後顔を上げると、琥珀色の瞳とぱっちり目が合う。彼は何も言うでもなく、拍手するでもなく、ただ一心にリーベを見つめていた。

「ご、ご静聴、ありがとうございました！」

真っ直ぐ見つめられて恥ずかしくなったリーベは、深々と頭を下げることでそれを回避する。胸が先ほどとは別の意味でときどきと高鳴っていた。今まで男性にまっすぐ見つめられた経験など、リーベにはない。

元々男性を苦手としているのもある。昔から鈍臭かったリーベは、孤児院の男の子たちから詰られることも多かったのだ。フォクノと仲良くなってからは、言われる回数は減ったが、植えつけられた苦手意識は今でも直ることがない。

「……そこで待っていてもらえるか」

「え……？」

顔をあげられずにいると、突然少年が一言言い残してその場を後にした。一緒にシロも連れて行ってしまったため、ポツンとリーベだけが残される。

(な、なんだったんだろう……)

歌い終わって拍手や歓声のようなものをあげるでもなく、かといって不満の声をあげるでもない。

(ま、満足してもらえたのかな……?)

今更になって、その部分が気になった。確かに文句は言われなかったが、逆に満足したとも彼は言っていない。

一度考えると深みにはまりやすいリーベは、途端に不安が胸中に広がる。童謡はあまり好きではなかったとか、もっと別の歌がよかったとか。もしくはリーベの歌自体が気に入らなかったとか。考え出すと際限なく悪い方向へと思考が沈んでいく。そしてこの場にリーベ以外がいらない以上、その思考を止めてくれる人もまたいなかった。

(ど、どうしよう……シロ、あの人に乗ったままだし……！)

今すぐ逃げだしたい衝動に駆られたが、彼はシロをつれたまま、奥へと行ってしまった。シロを置いて自分だけ逃げ出すわけにはいかない。

(どうしようどうしようどうしよ……！)

「待たせた」

「うわぁ！」

思考に耽っていると、突然声をかけられてリーベは悲鳴をあげた。心臓がバクバクと鳴り響いている。

「……驚かせたか」

「す、すいません……！ ち、ちょっと考え事してまして……！」

いつの間にか彼が戻ってきたと思ったら、鍵のかかっていた裏口の扉を開けて、リーベの背後に立っていた。全く気づかなかった。

間近に立つ彼の背は、とても高かった。すらりとした細身の身体に、長い手足。シロは彼が奥に行っている際に移動したのか、手の上から肩へと移っている。そして変わりに彼の手にあったのは、おしゃれな花柄の、それほど大きくはない長方形の箱だった。

「これで礼になるかわからないが、受け取ってくれ」

「ふえ……？」

小さな箱を差し出され、リーベはそっとその中を覗き――黒の瞳を大きく見開いて輝かせる。

「や、焼き菓子！」

その箱の中には、こんがりといい色に焼けた焼き菓子が幾つも入っていた。

「こ、これ、貰っていいんですか!？」

「そのために持ってきた。気に入るかはわからないが」

そこまで言われてようやく、彼は歌のお礼として焼き菓子を自分にくれようとしているのだと理解する。こうしてお礼をくれるということは、歌を気に入ってくれたということだろうか。無表情気味の表情は、一体何を考えているのかがわかりにくい。

「そ、それじゃあいただきます……」

リーベはそっと箱の中の焼き菓子に手を伸ばす。一口大の大きさである焼き菓子を、パクリと口の中へと収めた。

「――！」

さくさくとした触感、広がる控えめな甘さ。バターの香りが鼻腔をくすぐる。シンプルではあるが、素朴な味わい。とても美味しい焼き菓子だ。

「美味しい……！ とっても美味しいです！」

「そうか。ならよかった」

リーベは箱からもう一つ焼き菓子を掴んで口へと運ぶ。幸せな甘さが口いっぱいに広がった。

「この焼き菓子、どこで売ってるんですか？」

こんなに美味しい焼き菓子なのだ、きっと有名なお店の一品なのだろう。できるならば、自分でも買ってみたいと思った。

「……」

しかし彼はリーベから視線を外し、押し黙る。リーベは首を傾げながら三つ目の焼き菓子をもぐもぐと咀嚼していると、彼は徐に口を開いた。

「これは店で買ったものじゃない――俺が作った」

「ええ!？」

リーベは四つ目を口に運ぼうとしていた手を止める。

丸い形はどれも全く同じ大きさで、美味しいだけではなく見た目も綺麗だ。だからこそ店で買ったものだとばかり思ったのだが、まさか目の前の彼による手作りだなんて。

「すごい！ すごいです！ こんなに綺麗で美味しい焼き菓子が作れるなんて……！」

リーベも昔、孤児院で焼き菓子を作ったことがある。だが、生来不器用なせいで形は不揃いでバラバラなうえに、真っ黒に焦がしてしまった。

製作途中も、砂糖を入れすぎてしまったり、混ぜるのに時間がかかったりと、失敗ばかりだった。材料を全て無駄にしまい、とてもいたたまれない気持ちになったのを覚えている。

「こんなに美味しい焼き菓子が作れるなんて――あ、あの、名前を伺っても……？」

彼の名前を呼ぼうとして、ふとお互い名乗っていないことを思い出した。それは彼も失念していたのだろう、琥珀色の瞳を一度見開き、耳触りのいい低い声が名前を紡ぐ。

「ケルトだ」

「ケルトさん……わたしはリーベです」

名乗ってくれたケルトに返すように、リーベもまた己の名前を告げる。そして改めてリーベはケルトに

訊ねた。

「ケルトさんはパティシエさんなんですか？」

「いや。俺は庭師だ」

「ええ!？」

まさかの返答に、リーベは驚愕を隠せない。こんなに美味しい焼き菓子が作れるのだから、てっきりお抱えのパティシエだとばかり思ったのに。

それに彼の着ている服も、白いブラウスに紺色のベストという、小奇麗なもの。そこから庭師を連想するなんてできるだろうか。

「あ、でも、庭師さんだから草木が喜んでいるとか、わかったんですね」

ケルトがリーベに歌ってほしいと言ったのは、ここに植えられている植物が望んでいるからと。庭師だったからこそ、草木の気持ちがわかるのかもしれない。

「ここの植物が生き生きとしてるのは、ケルトさんが手入れをしているからなんですね！ お仕事ができ、焼き菓子も作れるなんてすごいです！」

庭師なのに美味しい焼き菓子を作れることもさながら、木々の一つ一つが生命力に満ちている。庭師としての才能もあり、手先も器用なのだろう。歌うことしか取り柄のないリーベとは、比べるべくもない。

ふとケルトが再びリーベから僅かに視線を逸らした。

「……主がこの邸を訪れるより前に、庭を整えていた。その仕事は既に終わったため、来るべき主や仲間達と何かつまめるものを用意しようと作っていた。それがこれだ」

「そ、そうだったんですか……って、それをわたしが貰ってよかったんですか!？」

口へと運ぶタイミングを逃した四つ目を手にしながら、リーベは慌てた。既に三つは胃袋の中だ。返すことなどできない。

「問題ない。まだ厨房に大量に残っている。気に入ったのなら、もう少しばかり持ってきても構わないが」

ケルトの淡々とした言葉に、リーベは慌てるのをやめた。考えれば、人にあげてはまずいものを、こうしてくれたりはしないだろう。リーベは手にした焼き菓子をパクリと口に入れる。

――ピィ。

ずっとケルトの肩の上で大人しくしていたシロが、小さく鳴いた。ケルトはシロの方を見遣った後、リーベの肩に向けて手を伸ばしてくる。シロはケルトの腕を小さな足で歩きながら、リーベの肩へと移った。

「あ、おかえり、シロ」

――ピィ。

ただいま、と言わんばかりに、シロはリーベの頬にすりすり擦り寄ってくる。やっと戻ってきてくれたことが嬉しくなって、リーベはそっとシロの背中を撫でた。

「……そろそろ戻った方がいい。きっとはぐれた友人がリーベを探している」

「……！ そ、そうだった！ フォクノ！」

リーベは今まではぐれてしまったフォクノを探していたのだった。はぐれたことに気づいてから、既に相当な時間が経っている。きっと心配しているだろう。

「……残りは箱ごと持っていくといい」

「え、でもこの箱高いものじゃ……？」

焼き菓子を入れている箱は、陶器で出来た、とても綺麗な花柄が描かれている。小さいながらもしっかりとした淵のつくりは、素人目に見ても職人が丹精込めて作った高級な一品だとわかる。焼き菓子だけならともかく、こんな高そうな箱までもらうわけにはいかない。

「主からの賜り物の一つだが、今まで特に使うことがなかった。だから別に構わない」

「えと……その……」

いくら使わないからと言われても、高価なものをいただくのは気が引ける。ケルトは箱をリーベに差し出したまま、まっすぐこちらを見ていた。受け取らないということは、彼の気持ちを無下にしてしまうということになる。それもまた嫌だ。

(あ、そうだ！)

リーベはふとあることを思いついた。

「そのっ……！ わたし、この箱洗って返しに来ます！ い、いただく変わりにお借りします！ そ、それではダメ……ですか？」

これならばケルトの気持ちを無下にすることもなく、リーベも気持ちよく受け取れる。若干尻つぼみになりながらも、リーベは恐る恐るケルトの返答を待った。

「……リーベがそれでいいなら、構わない」

「あ、ありがとうございます！」

ケルトから了承を得ると、リーベはケルトの手から焼き菓子の入った箱を受け取る。底についていた蓋を外して口を塞ぐと、思わず笑みが溢れた。きっとフォクノもケルトが作ってくれた焼き菓子を気に入るだろう。

「あの道をまっすぐ進んでいけば、貴族街から出ることができる」

「本当ですか!？ 何から何まで、ありがとうございます……」

はぐれてしまったフォクノと合流するならば、貴族街の入口で待っていた方が確実に会えるだろう。フォクノも一度戻っているかもしれない。

「気にするな」

ふとケルトの顔を見上げると、無機質だった琥珀色の双眸に穏やかな光が宿っているのを感じた。心なしか、口元も僅かにつり上がっている。今彼は、微笑んでいるのだろうか。

「それではケルトさん、また！」

「ああ」

リーベは片手を大きく振りながら踵を返した。足取りは軽く弾んでいる。きっとケルトの微笑みを見ることができたからだろう。

彼は怖い人ではない、優しい人だ。草木の心を理解し、何より初対面であるのにシロが懐いたのだ。悪い人であるはずがない。

「ふふ……シロ、また一緒にケルトさんに会いに行こうね」

――ピィ！

手に持っている小さな箱。これを返しに行くときが、今から楽しみだった。わくわくと胸が弾む。
(あれ……でもどうしてケルトさん、わたしがフォクノとはぐれちゃったってわかったんだろう……?)

おまけに貴族街を抜ける道まで教えてくれた。リーベは一言も友人とはぐれてしまったなどと、口にはいないにも関わらず。

(あうう……もしかして口にする必要がなくても迷子に見られちゃったのかなあ……だったら恥ずかしいよう……)

迷子であることに変わりはないが、一般的に大人の仲間入りである十六にもなって迷子になってしまうなど、呆れられてはいないだろうか。

(こ、今度は絶対迷わないようにしなきゃ……！)

次はシロの案内がなくてもケルトのところへ行けるように、リーベはほぼ一本道を、注意深く観察しながら歩き続けた。

不思議な少女と出会った。一見すると、気弱そうな少女にしか見えなかったのに、小さな唇から紡がれる歌声は耳に心地よく、また心をととても穏やかにしてくれる。

この日は夕方頃に到着する予定である主や仲間達のため、大量に焼き菓子を作り置きし終わった後のことだった。

(……庭が騒がしい)

庭から聞こえる、草木たちの騒ぎ声。喧嘩をしているのかと思えば、そうではない。一言でいうなら「はしゃいでいる」だろうか。わあわあと楽しげな声が聞こえてくる。

しかしよくよく聞いてみれば、その声とするのはとある一角の方だけだった。他の場所にある草木は、特に普段と変わりがない。

(何かあったのか……?)

騒がしくしている草木達の方へと向かうと、よりそれが顕著になった。

『あ、ケルト！ ケルトもこっちおいでよ！』

『早く早く！』

ケルトの存在に気づいた木々が、明るい調子でケルトを誘う。本当に、一体何が起きているのだろう。

「――」

足を奥へと踏み入れて行くと、明らかに草木たちとは違う、人間の声が聞こえてきた。普通にしゃべっているのではない。これは、旋律を奏でているのだろうか。

『キャー！ もう一曲、もう一曲！』

『素敵な歌声だなあ……』

どうやら、草木たちが騒いでいる原因は、この調（しらべ）にあるらしい。耳を劈くような甲高さはなく、心地よく響く高音。刻まれる旋律に、気づけばケルトも耳を澄まして聞き入っていることに気づいた。歌や音楽といったものに、今まで興味も関心もなかったというのに。

(これが……歌か)

ピタリと歌声が聞こえなくなってから、ケルトは止まっていた足を再び動かし、歌声が聞こえた方へと移動する。歌を歌っていたらしき人物の影は、あっさりと発見することができた。

「――誰だ、そこにいるのは」

いくら草木たちを喜ばせてくれた歌い手だとしても、庭の中への不法侵入を許すことはできない。しかし、歌い手の姿がはっきりと視界に収まると、その心配はどうやら無用だった。その人間がいたのは柵の外側で、裏口に設置された扉近くにいたものの、しゃがみこんだその体勢では、どう考えても庭の中へと侵入することはできない。

そこにいた人間は、ケルトよりも年下と思われる少女だった。襟首で切り揃えられた黒髪に、同じ色の大きく丸い瞳。その瞳を見遣ると、少女はビクリと肩を震わせる。おまけに白い肌が徐々に青ざめていった。誰がどう見ても、怯えているとしか思えない。

「す、すみません……その、わたし……」

ビクビクと、一体何に対して怯えているのかよくわからない。彼女は庭の中へと入ったわけではないのだから、別に叱られる理由などないだろうに。

『やあ！ 君がここの庭師さん？』

「……」

少女とはうって変わり、底抜けに明るい声が下方から聞こえてくる。視線を向ければ、そこにいたのは一羽の白い小鳥だった。しかし普通の鳥とは違い、左の羽しかなく、右の羽は肩羽から先がない。これでは自由に空を飛ぶことなどできやしないだろう。

徐に手を伸ばすと、小鳥はちゃんとケルトの手に飛び乗ってくる。

『僕はシロ！ よろしくね！ この子はリーベっていうんだけど、見てのとおり臆病なんだ。歌は抜群に上手いのよね！』

シロと名乗った小鳥は、主人であろう少女のことを教えてくれる。成程、臆病だからこうも怯えているのか。

「……お前か、歌を歌っていたのは」

シロの言葉からその情報を得てはいたが、正直なところこの小さな少女が本当に歌を歌っていたのか疑問に思ったために、改めてケルトは少女、リーベに問うてみた。

「！ は、はい！」

彼女はビクリと震えながらも、しっかりと返事をした。本人がそうだとやったのだから、これで確定だろう。ならば――

「……ありがとう。草木がとても喜んでる」

礼を言うのが筋というもの。草木たちの声が聞こえているのはケルトだけなのだ。彼女に彼らの声を聞く術はない。今も『もう一曲！』と騒いでいる草木達の気持ちを伝えられるのも、ケルトだけだ。

「もしよければ、もう一度歌ってはくれないか。草木たちがそれを望んでいるんだ」

草木たちは、彼女にもう一度歌ってほしいとねだっている。正直に言えば喧しいくらいだ。彼女にまた歌ってもらえば、少しは大人しくなるかもしれない。

彼女は初めは戸惑っていたが、シロが促すように鳴くと、何かリクエストはあるかと訪ねてくる。歌の知識は全くないため、何でも構わないとケルトは告げた。

リーベは軽くこちらに一礼すると、胸に手を当て大きく息を吸い込んだ。

「――」

それは先ほど庭先で聞こえてきた唄と全く同じもの。どんな題名なのかはわからないが、歌声が心に染み込んでいくのがわかる。周りの草木も、先ほどまで騒がしかったにも関わらず、彼女が歌い始めた途端シンと静まり返った。

そして歌はあっさりと終わりを告げてしまう。元々短い歌だったのだろう。少し長めのものを歌ってもらえばよかったかもしれないと、今更なことを思った。そしてケルトは歌い終わった少女を見据える。

(こんな小さな身体をしているのに、よく大きな声量が出るものだな……)

歌い終わった後の少女は、やはりどう見てもただの華奢な少女にしか見えなかった。豊かな声量と音域は、その小さな唇から紡がれたもの。それが不思議に思えて、ケルトは暫く彼女をじっと見つめていた。

「ご、ご静聴、ありがとうございました！」

彼女が突然勢いよく頭を下げた。そこではと思った。彼女に歌ってくれと依頼をした以上、何か謝礼となるものを渡さなければならないと。

(金銭的なもの……あの方から幾つか賜ったが、それでいいだろうか)

働いている報酬として、ケルトは金品を幾つかもらってはいるが、使う機会など全くなく、そのほとんどはしまわれたままだ。そこから礼になりそうなものを見繕えばいいだろう。

「……そこで待っていてもらえるか」

リーベに言い置いてから、邸の方へと戻る。

『どこへ行くの？』

掌の上に乗っているシロが、不思議そうな顔をしていた。そんな彼に、リーベに謝礼となりそうなものを邸に取りに行くのだと伝える。

『それなら、甘いものがいいよ。リーベは甘いお菓子が大好きなんだ』

「甘いもの……？ 俺が作った焼き菓子なら、たくさんあるが……」

『ならそれをあげてよ。リーベ、きっと喜ぶよ！』

謝礼がそんなもので本当にいいのだろうかと思ったが、シロはしきりに焼き菓子を推奨する。草木たちも喜んでいたし、ケルト自身も不思議な心地よさに包まれたため、できれば喜ばれるものを渡したい。

そこで、主から賜った小箱の中に焼き菓子をいれようと思いつく。ケルトに使い道はないが、花柄の入った小さな箱は、女性に好まれるかもしれない。

作業を妨害しないためか、シロは手から腕を伝って肩へと移動した。人に慣れているだけでなく、彼はとても賢い小鳥のようだ。

焼き菓子を持って戻り、裏口の扉を開ける。間近で見たリーベは、やはり小さかった。ケルトよりも頭一つ分は背が低い。

彼女に向かって箱に入った焼き菓子を差し出すと、彼女は表情に喜色を浮かべた。シロの言うとおりに、甘いものが好きらしい。主や仲間にも美味しいと褒められたことがあるから、味は元々悪くはないと思っている。だが、店で買ったものと思われるとは思わなかった。彼女は、ケルトの作った焼き菓子をとても気に入ってくれたらしい。

「こんなに美味しい焼き菓子が作れるなんて――あ、あの、名前を伺っても……？」

ケルトはシロから彼女の名前を聞いていたため、こちらが名乗っていないことをすっかり失念してしまっていた。

「ケルトだ」

「ケルトさん……わたしはリーベです」

短く己の名を告げると、彼女もまた自身の名を告げる。あえて知っているとは告げなかった。

『僕、そろそろリーベのところに戻るね。リーベの友達がリーベを探してるんだ。実は僕たち道に迷っちゃってさ』

リーベの元へ戻るというシロのため、彼女の肩先に向かって手を伸ばす。

帰ろうとする彼女に箱ごと残りの焼き菓子を差し出すが、彼女はそこで初めて難色を示した。焼き菓子は遠慮することなくパクパクと食べていたのに、箱を受け取ろうとしない。彼女はうんうんと唸った結果、借りて洗って返しにくるという結論を下した。こちらとしても彼女が納得すればそれでいいため、異論はない。

「それではケルトさん、また！」

「ああ」

大きく手を振りながら返っていくリーベを見送り、ケルトは裏口から庭へと戻った。

『珍しい、ケルト笑ってた』

『ほんとだ。貴重だね、うん』

「……笑ってた？」

草木たちに問い返すと、皆揃って『ケルト、笑ってた』と返してくる。草木たちは嘘をつかない。そんな嘘をついたとしても意味もない。

つまり、自分は本当に笑っていたのだろう。気づかぬうちに表情に出ていたのかと、己の頬に手を触れる。

「また……か」

彼女は箱を返すために、再びここまでやってくる。そのことを思うと、口元が自然に緩むのを感じた。

『あ、また笑った！』

『ケルトが笑った！ あの子すごいね！』

草木たちが嬉しそうに騒ぎ出した。確かに自分はあまり表情に変化がないと言われているが、こうも騒ぐほどのことだろうか。思わず憮然とした気持ちになる。草木の声がケルト以外の人間の耳には届かないことが唯一の救いか。こんな騒がしい声を主に聴かせるわけにはいかない。

邸へと戻ると、主がいつ到着してもいいようにポットを温め始める。湯を沸かすのは来てからでも遅くはないだろう。

ケルトは屋敷の中を見回る。主が到着するにはまだ時間があるため、それまでに不手際がないかの最終確認をするためだ。手拔かりがある邸に滞在させるなど、主に申し訳ない。

念入りに確認をしたが、不手際なところはどこにもなかった。これで安心していつでも主を受け入れることができる。

再び庭へと足を運ぶと、空は朱色に染まりつつあった。

『ケルト！ 来たよ！』

『きたきた！ 主様がきた！』

「！」

草木たちのざわめきを耳にした直後、ケルトは邸の正面に向かって走っていた。草木たちの野次はもう耳には入らず、一心不乱に走る。

ケルトの視線の先に、炎の様に鮮やかな紅が映った。こちらに気づいて向けられる眼差しもまた同じ色。なのに宿る光はとても穏やかで温かく、熱すぎるといことがない。

「サフィラス様！」

「やあ、ケルト」

彼の名を呼ぶと、主であるサフィラスは相好を崩し、赤い瞳を細めながらケルトの名を呼んでくれる。

「特に変わったことはなかったかい？」

主の問いかけに、ケルトは脳裏にリーベの姿がよぎる。しかし心の中で頭を振る。彼女との邂逅は、サフィラスにとって益になることでも損になることでもない。わざわざ報告する必要もないだろう。彼女にあげた焼き菓子も、大した量ではないのだから。

「いいえ、ありません」

「そうか。ならいいんだ」

ケルトは外と庭を隔てる門扉を開け、サフィラスを邸へと迎え入れた。

「お疲れ様です」

「お疲れさま」

すれ違った裏方の青年に挨拶を交わしたユナフィアは、手にある資料に目を通しながら事務所の扉を開けた。

備え付けのテーブルの上には、数十枚を超える紙が無造作に散らばっており、床にも数枚散乱していた。ふと窓の方を見ればがらりと開いていて、風が書類を飛ばしてしまったのだと口元を歪める。軽く嘆息したのち、散らばっている紙を集めた。

これは一昨日まで行っていた公演でかかった経費などを纏めたもの。そして次の公演でかかるであろう費用を算出したものも混ざっている。

今回の公演は今までにないほど盛況した。理由は考えるべくもない、新たに神鳥となったリーベの歌を聞くために、チケットは売れに売れた。新たな神鳥の噂を聞きつけた人々のおかげで初日から満席御礼となり、千秋楽まで全てのチケットを捌くのに時間はかからなかった。もっと多くの客に披露すべく、新たに立ち見席まで設けたほどだ。そしてその立ち見席もまた、全て完売してしまった。

(リーベが神鳥になったら売上は伸びると思っていただけ……想像以上だったわ)

入団試験を受けに来たリーベの歌を聞いたときから、彼女から天性の素質を感じていた。彼女はいずれ確実に神鳥になると。

だからといって彼女を即神鳥にするのは早計すぎる。リーベは素晴らしい歌声の持ち主ではあるが、いきなり独りで舞台に立つような度胸はないどころか、彼女には臆病な一面がある。

それにまず、メリージアがそんなことを許すはずがない。プライドの高い彼女が自分以外の神鳥の存在を許すことなどありえないだろう。彼女は実力は確かなのだが性格に難があり、幾度も頭を悩まされた。

まず、やってきた当初から自身が神鳥を務めると言って聞かなかった。いくら楽都で神鳥をしていたとはいえ、来たばかりの彼女は所謂「余所者」。突然やってきた余所者が神鳥をすると主張する。ミュージアムの仲間達が彼女に対して悪感情を抱いてしまうのは自明の理だ。

そして神鳥になったらなっただで今度は、こちらが想像もつかないようなことを要求してくる。やれ自分専属のマッサージ師はいないのか。身の回りの世話をする者はどこだ。こんな狭い部屋で気持ちよく練習などできない。

彼女がかつて在籍していたミュージアムがどんな所だったのかは知らないが、神鳥一人をちやほやする為の人員を割く余裕など、カーテュアリーミュージアムには存在しない。それ以前に、そんなことをしていたら経費がかかる一方で経営が成り立たなくなる。

ただでさえメリージアに団員達はいい感情を抱いてはいないのに、彼らに彼女の世話をさせるのは気が引けた。だからそんな人員が欲しいのならば、実家から連れてくるといいと提示するに止めた。もし彼女がそれに腹を立てて辞めたとしても、まだ公演を行う前のことであったため、ミュージアム側にダメージはない。前の神鳥を勤めていた子も辞めてしまったが、新たに別の神鳥を選出するだけだ。

結局メリージアはこちらが提示した言葉を呑んだ。しかし練習に顔を出しもしなければ、団員達と親睦を深めようとするつもりもない。一応家で練習をしているようではあるが、衣装合わせで姿を現したときは、ほぼ毎回衣装係の者と口論が勃発する。やれ、この飾りが気に食わない。やれ、もっと華美にはできないのか、などなど。

確かにメリージアの歌は独特な艶やかな響きがあり、聞くものを魅了する。だが、こうも他の団員達と

不仲であると、運営に支障が生じるだろう。否、既に彼女との争いは頻繁に発生しており、軽視できない問題となっている。

そんな状態だからこそ、団員達がメリージアに変わる神鳥としてリーベを推すようになるのも、半ば必然的なことだった。

リーベが他の歌手と共に舞台に立つ練習に加わるようになってから、ほぼ毎日のように誰かしらが、ユナフィアの元へとやってくる。そして皆同じことを言った。

「リーベを神鳥にしたらどうでしょう！」

憎らしいが実力は確かなメリージア。そしてそんな彼女に変わる神鳥となれる素質を持った少女の存在が、団員達の目にどう映ったのか。

メリージアが本当に口だけの人間だったならば、カーテュアリーミュージアムの神鳥は以前と変わらぬままのはず。もしくは、彼女が自身の才能を鼻にかけることなく、謙虚で慎ましかであったならば、団員達も反感を覚えたりはしない。

本音を言えば、ユナフィアもリーベに神鳥をして欲しいと願っていた。だが、リーベはまだ入団したばかりの新米である。どんなに歌が上手くとも、経験が全くないリーベにとって神鳥は荷が重過ぎるだろう。

いずれリーベに神鳥を渡すことはほぼ決定事項ではあるが、それは当分先のことだと言ってユナフィアは団員達を諭した。完全に不満を消すことはできないが、少し冷静になれば、彼らもリーベに神鳥はまだ早いと気づくはず。

しかしある日、ある人物がとんでもないことを言い出した。

「オーナー！ リーベという小娘と勝負させてくださいませ！ あの生意気な小娘に、神鳥はわたくししかいないということを思い知らせなければなりません！」

突然私室に乗り込んできたメリージアが、突飛なことを言い出した。ぐらりと揺れる頭を押さえながら、興奮しているメリージアを落ち着かせて詳しい事情を聞く。

私情を一切抜いて要約すると、メリージアは団員の会話を聞いてリーベが神鳥を狙っていると勘違いをしてリーベに詰め寄り、そして丁度傍にいたフォクノが、ならば神鳥を賭けて勝負すればいいと提案してきた、ということだった。

リーベとメリージア、勝負して勝つのはどちらかと言われれば、ユナフィアはリーベと断言する。これでも多くの歌手を見てきたのだ。どちらの歌手が客の心を掴むのかは明らかだった。

(……でも、公演中に神鳥が変わるのはよくないわね。それに、リーベにももっと舞台に慣れてもらわなければ困るし)

メリージアが聞いたら憤慨しそうなことを考えながら、彼女の申し出にどう応えようかと頭を巡らせる。

「……いいでしょう。貴女が言うのであれば、以前行った方法と同じ手法で勝負してもらいましょう。ただし、今は大事な公演中よ。そちらに専念してくれないと困るわ。勝負の場を設けるのは公演を全て終えてから。それでいいかしら」

「――ええ、それで結構ですわ」

メリージアから同意を得た後、広報担当と相談し、公演が終了した翌日に審査員の募集をかける。以前にも行った為か反応がよく、あっという間に公募した人数に到達した。

そして迎えた当日。結果は予想以上だった。

リーベが勝つだろうと予測はしていたが、まさか公募した一般審査員全員がリーベの歌を選ぶとは思っていなかったのだ。前の争いでも、メリージアを選ばなかった審査員が数名いたにも関わらず。

(才能があると思っていたけど……これほどまでとは)

ユナフィアを含めた団員達は、メリージアにいい感情を持っていないこともあって、二人の歌を客観的に

比べることができないでいた。わざわざ審査員を公募して判定を行ったのは、それも理由に含まれている。気に食わないからという理由でメリージアを神鳥から降ろすのは、絶対にしてはいけないことであると。

だがこうして、街の人たちからもリーベの歌声が望まれていることが判明した。だから臆することなく宣言することができる。

「勝者、リーベ。よって、カーテュアリーミュージアムの神鳥はリーベに決まったわ」

ユナフィアの言葉に、会場全体がワッと歓声をあげた。大きな拍手も聞こえてくる。公募して集まってくれた審査員の人々。そしてカーテュアリーミュージアムの団員達。この場にいる者達が、揃ってリーベの勝利を祝福していた。

ただ一人を除いて。

「――この勝負は無効ですわ！」

切り裂くような鋭い声音が、歓声を打ち消す。苛立ちが募った黄金の瞳が、まっすぐユナフィアへと向けられる。

「わたくしは嵌められたのです！ そのフォクノという背の高い金髪の娘に！ わたくしから神鳥を奪うためにこの女は、審査員として選ばれる人々がリーベの歌を好むと知っていて、わざとわたくしとリーベを勝負させる方向へと持っていったのですわ！ 高貴なわたくしの歌を、フォーリエストの田舎者である住民が理解するはずがないと！」

騒ぎ出したメリージアに、客席がざわめいた。それは決していいものではなく、むしろよくないざわめきだ。

ユナフィアは頭を抱えたくなるのを寸で堪えた。何故観客の前でそんなことを大声で言うのか。彼女の言葉はリーベ達はもちろんのこと、今ここに集まっている審査員の街の人々をも侮辱している。

「……、……………」

げんなりと頭を搔くフォクノが何かをぼやいている。大きい声量ではないためユナフィアの耳にははっきり届かないが、メリージアの耳にはしっかり届いてしまったようだ。メリージアがふるふると震えながら拳を握りしめている。

「綿密にわたくしから神鳥を奪う計画を立てていたくせに、なんて態度……！ これでお分かりになったでしょう、オーナー！ 全てはこの女の策略なのですわ！」

メリージアが敗れた場合、あっさりと引くことはないだろうとは思っていた。だが、彼女も実力の確かな歌手の一人であることに変わりはない。だから最終的には敗北を、リーベの歌を認めるだろうと思っていた。潔く負けを認めることも、矜持を保つことに必要なのだから。

なのに彼女は、その敗因を周囲の者に押し付けようとしている。それが自身の価値を下落させていることに、全く気づいていない。

(……今まで、彼女を負かせられた人がいなかったのね)

彼女の傲慢な態度は、自分より上の存在などいないという驕りからくるものだったのだろう。だから彼女は、自身の敗北を受け入れようとしない。いや、受け入れることができないのだ。

「――神鳥はリーベ。これはもう決まったことだわ」

メリージアからしたら、無慈悲な言葉だろう。だが、もう彼女に神鳥をさせるわけにはいかなかった。

「お客様を侮辱するような人を神鳥に据えておくことはできないわ。それにもしあなたの言う通りだとしても、大事なのはただ上手いだけの歌ではなく、お客様を満足させられる歌、よ」

ミュージアムで一番大切なのは、公演を楽しみにしてくれる観客だ。観客を楽しませる為に存在するのがミュージアムだ。だというのに観客を田舎者扱いするようであるならば、最早メリージアに神鳥でいる資格はない。それがわからない様であるなら尚更だ。

しかし神鳥がリーベに決まった後も大変だった。想像通り、リーベは神鳥になったことを嬉しいと思うより重圧を感じ、毎日のように自分には無理だと深く落ち込む。その都度フォクノや他の歌手達がフォローに回った。初めは励ますのに四苦八苦したものだが、リーベは落ち込みやすい分立ち直りも早いことがわかった。特に焼き菓子のような甘いものを出せば、一発で機嫌が浮上する。必死で励ましていた歌手達も、今ではリーベをからかって遊ぶくらいの余裕ができるほど、慣れたものとなった。

そして神鳥ではなくなったメリージアは、今度は前座を務めると言い出した。勝手な言い分ではあるが、彼女に合唱をさせる方が無理があるため、それを了承する。実際、メリージアの歌唱力は高く、前座を任せることに関して不都合はない。

しかし、大変なことはこれで終わりではなかった。

公演後、貴族の使いと思われる輩が、ユナフィアを訪ねてきた。何でも、リーベの歌を気に入ったため、彼女を自分の専属の歌手としたいと。

当然のごとく、丁重にお断りをさせてもらった。リーベほどの歌手を、そう易々と手放すわけがない。それにリーベ自身も、頷くことはないだろう。貴族の元へ行くということは、故郷であるフォーリエストを離れるということだ。幼馴染にして親友のフォクノや、今では歌手の先達たちにも可愛がられている。それと臆病な性格も相俟って、フォーリエストを離れようとするとは思えない。

そして公演期間中、ほぼ毎日のようにそれぞれ別の貴族の使いがやってきては、断るのが日課になってしまった。多いときでは三人ほど、少なくとも最低一人は交渉にやってくる。

リーベの歌唱力が高いからこそその弊害といえよう。しかし、だからといって毎日のように相手をしなければならぬユナフィアはげんがりとしていた。貴族を敵に回すのは避けなければならない、言動にはとても気を遣う。それにユナフィアにはそれ以外にも仕事があるのだ。必然的に時間をとられてしまうことにおいて、苛立ちを禁じ得なかった。

「あ、オーナー。ここにいましたか」

風で飛ばされた資料を全て纏め終え、再び飛ばされないよう窓を閉めていると、団員の一人が事務室に顔を出す。

「どうしたの？」

「えーっと……大変言いにくいことではあるのですが」

言いづらそうに口籠る団員に、ユナフィアはまたかと嘆息した。つまりはまた、リーベに対して交渉がしたいと。

「……そのお客様は今どこに？」

「お、応接室へと案内してあります」

「わかった。すぐいくわ」

煩わしいことは、早いうちに終わらせるに限る。ユナフィアは足早に応接室へと向かった。

「お待たせして申し訳ありません。失礼いたします」

「いえ。お忙しいところをお邪魔してしまったのですから、お気になさらず」

ユナフィアは応接室の扉を開いた後、目を大きく見開いた。

応接室で待っていたのは二人。一人はまるで炎のような、鮮やかな紅い髪をもった二十代手前の若い青年。男性なのに白くきめ細やかな肌と、整った端正な顔立ちに、穏やかな色が宿った髪と同じ色をした瞳。少し長めの紅い髪が、襟首の両側から垂れている。

そして彼の後ろにいるのは大空より少し濃い色をした、珍しい青い髪をした女性だった。長いであろう青い髪を、シニヨンにして纏めている。年頃は青年と同じくらいであろう。彼女もまた、白い面立ちの美しい造作の持ち主だった。菫色の瞳を縁取る睫毛は長く、小さな唇には愛嬌がある。

(恋人同士……いえ、控えているということは主人と侍女かしら)

美しい男女に、恋仲であるという邪推をするが、だったら彼女がいる位置は後ろではなく隣だろう。心の中で邪推を打ち消し、ユナフィアは笑みを浮かべた。

「わたしがこのミュージアムの責任者、ユナフィア・カーテュアリーと申します」

「私はイグニマス・サフィラ。彼女は侍女のラルリエ・シルバーです」

やはり主従であったと思うと同時に、ユナフィアは珍しいと疑問に思う。彼の持つ雰囲気や佇まいからしてどこかの貴族の青年であろう。通常このような交渉事を貴族が自ら行うことはなく、使者を寄越すのが一般的だ。実際、主様が直接乗り込んできたことは一度もない。

(面倒なことにならないければいいけれど……)

ユナフィアがもう少し若ければ、イグニマスと名乗った青年の美しい容貌に見惚れたかもしれないが、生憎彼の美貌に心を動かされることはない。もう色恋に心をときめかせる年齢ではないことと、ユナフィアの言葉一つでミュージアムの命運が左右されるという責任感から、心に浮かぶのは早く彼らに帰ってもらいたいという願いだけだった。

「どうぞ、そちらのソファにおかけください。——シルバーさんもどうぞ」

「いえ、わたしは立ったままで結構です。お気遣い感謝いたします」

ラルリエと呼ばれた青髪の女性は、ソファに腰掛けるイグニマスの後ろへと控える。彼女は主と年が近いにも関わらず、分別をわきまえているようだった。逆にそうでなければ、連れてはこないだろう。彼の仕草に見惚れているようでは、仕事にならない。

「……ご用件は、我がミュージアムが誇る神鳥リーベのことでよろしいでしょうか」

ユナフィアは単刀直入に本題を切り出した。それ以外に相手の目的は見えないのだから、さっさと済ませるべく余計な世間話をするつもりはない。

「はい。その通りです。カーテュアリーミュージアムの神鳥リーベは、至高の歌声を持つという噂を耳にしました。ですが、そのときには既に公演のチケットは全て完売済みです……」

公演が終わった直後に彼がやってきた理由を理解する。リーベのことを聞いたのが公演途中ならば、それは既にチケットが完売した頃だ。フォーリエストまで来たはいいが、チケットを手に入れられなかったという貴族の客は、決して彼だけではないだろう。

「差し出がましい願いだと承知で申し上げます。一目でもいいので、リーベさんにお目通りはかなわないでしょうか」

礼儀正しい青年の申し出に、ユナフィアは少し目を丸くする。リーベを直接雇いたいという者はおれど、一目だけでいいから会いたいと願う者はいなかった。あくまで彼らが望んでいるのはリーベの『歌』であり、彼女の見目に興味を持つことはない。

だからこそ、一目見るだけでいいという彼の申し出に違和感を覚える。リーベには会っただけでは意味がない。それとも、会えば歌ってくれるだろうと安く考えているのだろうか。

本日は公演明けということで、歌い手や裏方達には休暇を言い渡しており、現在リーベはフォクノと共に、数ヶ月前まで暮らしていた孤児院の様子を見るために外出している。だから彼の要望に応えることはできないわけだが、もしもリーベが外出していなくとも、ユナフィアは彼の願いを叶えるつもりは毛頭なかった。

「……申し訳ありませんが、そのご希望に応えることはできません。我らが神鳥の歌を聞きたいと願うお客様は、あなた様以外にも大勢いらっしゃいます。もしイグニマス様にこのことを了承したならば、他のお客様も是非自分もと彼女に会いたがるでしょう。その度に彼女を会わせていたら練習時間を割くことになり、次の公演に支障が出てしまうかもしれません」

今回初めて立ち見席を設けたが、これはあくまでフォーリエストの地域住民に向けたもの。実際、売ったのは全て一般市民であり、貴族の人間やその使いが立ち見席のチケットを購入したという話は聞いていない。リーベの歌は聞きたいが、それまでずっと立ちっぱなしというのは、高貴な人間が二の足を踏むには充分すぎる。

だからこそ、是が非でもリーベの歌を聞きたいと願う貴族はこれからも増えるだろう。今後イグニラスと同じように、公演前にも関わらず練習風景を見るだけでもいいと押しかけてくる輩も現れるかもしれない。そして一度それを許してしまえば、貴族だけでなく一般市民も見学がしたいと、押しかけられる可能性もある。

たった一度でも例外を作るわけにはいかなかった。こちらが提示するサービスは、あくまで『公演』という形のみであると示さなければならない。

「どうしても無理でしょうか」

「ええ。公平をきすためでございます。どうかご了承くださいませ」

ユナフィアは深々と頭を下げた。これ以上は何を言っても自分は意見を曲げる気はないという意味を込めて。

「……今日のところは引き上げることにします。時間を割いていただき、ありがとうございました」

イグニラスがソファから立ち上がったため、ユナフィアもまた立ち上がり、彼のために扉を開けた。

「お次は是非公演を見にいらっしゃってください。――そこのあなた、お客様を外へとお連れして」

「あ、はい」

丁度通りかかったスタッフに話しかけ、彼は見目のいい二人の男女に緊張しつつも、こちらですと丁寧に案内を始めた。イグニラスとララリエは、去り際にユナフィアに向かって軽く会釈する。

(今回は聞き分けのいい人でよかったわ……)

二人の姿が見えなくなってから、ユナフィアは大きく息を吐く。今まで交渉をしてきた使いの者達の大半は、こちらが断りを入れても是非にと、どうしてもとなかなか引かない者ばかりだった。その度どんな交渉内容でも、こちらは受けることはないと平行線を辿り、相手が根負けして折れるのを待つしかない。それは精神的な面において、かなり消耗する。

(……ちょっと待って。彼、立ち去る前に確か今日のところは、って……まさか)

そして、ユナフィアの次は公演を――の言葉に頷いていない。嫌な予感にぶるっと身体が身震いした。

(か、考えすぎよね。さあ、頭を切り替えていかなければ。わたしにはまだ仕事があるのだから)

ユナフィアは応接室を後にし、書類の整理をすべく事務室へと向かう。今日はこれ以上の来客がないことを願った。

リーベは陶器で出来た花柄の小さな箱を、しっかりと胸に抱きながら以前通った道を辿る。これは絶対に落として割ってしまうわけにはいかない。例え一度はリーベにくれようとしたものでも、返すと約束したのだから。

あの後ケルトの言う通りに道を進み、貴族街の入口に到着した。暫くそこで大人しくしていると、フォクノがとても慌てた様子でやってくる。

「見つけた！ リーベ！」

「フォクノ！」

リーベを心配して走り回っていたのだろう、フォクノの呼吸は乱れ、半袖の先から伸びている腕は、汗できらめいていた。

「全く、心配させるなよ。探し回ったじゃないか」

「あうう……ごめんね、フォクノ」

フォクノは軽くこちらを睨みながら、額を軽く小突いてくる。

「――なんにせよ、合流できて何より。もしかしたら人攫いにでもあったかと勘ぐっちゃったけど、杞憂で済んでよかったよ」

ポンと頭にフォクノの手が乗せられ、碧の瞳が穏やかに細められた。リーベはもう一度ごめんと謝罪を口にする。

「もう謝らなくていいよ。リーベが無事ならそれでいい。それじゃあ帰ろうか」

「うん」

リーベはフォクノの隣に並んで帰路を行く。ミュージアムまでの道中、リーベはフォクノとはぐれていたときに会った、ケルトのことを話した。

シロが突然リーベから離れ、彼が仕える家の庭に入ってしまったこと、そこで歌を歌っていたら草木が気に入っていたからと歌を所望されたこと。そして美味しい手作りの焼き菓子をもたらしたことを。

「……草木が喜んでた？ 変なこという奴だね」

「へ、変じゃないよ……！ 庭師さんだから、植物の気持ちがわかるんだよ、きっと」

にべもないことをいうフォクノに、リーベは慌ててケルトをフォローする。

「そ、それにシロもすぐケルトさんに懐いてたし……ね、シロ」

――ピィ！

「……シロが？」

フォクノは碧の瞳を見開きながらリーベの肩にいるシロを見やる。彼女は不思議そうに顎に指を添えた。

「うん。だからケルトさんはとても優しい人だよ」

植物の気持ちがわかり、初対面のリーベに対して親切にしてくれた。人見知り故に初めは表情に乏しいケルトのことを怖いと思ってしまったが、今ではそんなことは微塵も思っていない。

「今度のお休みのときに、この箱返しに行くの」

胸にしっかりと抱かれた花柄の陶器。ミュージアムに帰って残りを食べるのが今からとても楽しみである。

「……一人で行くつもり？」

「え……そうだけど？」

フォクノが碧の瞳を窄めながら、じっとこちらを見据えてくる。今日は公演が昨日終わったばかりなた

め、同じ日に休暇となったが、練習が始まってしまうとそれは難しくなる。歌い手であるリーベと裏方のフォクノでは仕事内容が全く違うため、休暇もずれてしまうのだ。

「……迷うなよ？」

「お、覚えてきたもん！」

今度は一人でも迷わないよう、しっかり周りを確認しながら貴族街の入口へと戻った。だから大丈夫、とぐっと拳を握ると、ピィとシロがフォクノの方を向きながら鳴く。

「――シロがついてるなら、大丈夫か」

「そんなにわたし、信用ないの……？」

どこか釈然としないものを感じたが、その日は無事帰路につき、休日を終えた。

次の日から、次の公演に向けての練習が始まる。次の公演でリーベが歌うのは既存のものらしく、すぐにその歌の練習が始まった。

ミュージアムで披露する楽曲は、遠い昔に神々に捧げるために創られた既存の楽曲を歌うこともあれば、作曲家が創ったオリジナルのものを歌うこともある。ただ、その場合は一曲書き下ろすにも時間がかかることもあって、練習開始日に完成していないこともあるのだとか。既存の物でも書き下ろされた物でも、リーベにとっては新たな歌を覚えられることが楽しみで仕方が無い。

そしてほどよく歌ったあとは、甘いものが欲しくなるもの。ケルトに貰った焼き菓子は、練習初日で全てなくなってしまった。フォクノや先輩たちも彼の焼き菓子が気に入り、皆で食べたなら当然あつという間だろう。

焼き菓子を入れていた器を念入りに洗い、そして本日休暇となったリーベは肩にシロを乗せ、ケルトのいる貴族街へと向かっている。

「あ、シロ、見えてきたよ！」

貴族街へと続くアーチが見えてきた。この間頭に叩き込んできた道順を思いだし、ケルトのいる邸への道を歩む。ここまで来てしまえば、あとはもう少しだ。

「ついた！」

――ピィ！

生命力に溢れた木々が生い茂った庭先。迷うことなく辿り着いた目的地に、リーベは内心ぐっと拳を握った。

「ケルトさんいるかな……？」

囲いの外側から、隙間を覗き込むが木々が邪魔していて奥が見えない。ふと、ここからの位置では庭の中が見えないようになってることを、今更のように思い出す。

(ど、どうしよう……ケルトさん、どうやって呼ぼう……)

道に迷わないこと、借りた箱を落とさないことばかりに気を使っていたために、ついた後、どうやってケルトを呼ぶかまでは考えていなかった。

――ピィ！

シロが片羽を広げてリーベの肩から飛び降りる。庭の石垣に着地すると、まるで自分が彼のことを呼んでくると言わんばかりに一声鳴き、庭の中へと入っていく。

(あ、そっか。片羽の鳥なんて滅多にいないから、シロのこと覚えてるよね)

ケルトがシロに気づけば、主人であるリーベの存在にも気づいてくれるだろう。結局シロ頼みになってしまった感は否めないが、これでケルトに会えると、リーベはドキドキと胸が高鳴った。

暫くすると、肩にシロを乗せた赤茶色の髪を持った青年が現れる。見間違いようのない、ケルトだ。

「ケルトさん！」

「リーベ」

ケルトの名を呼ぶと、彼もまたリーベの名前を呼んでくれる。どこか眠た気な琥珀色の瞳に穏やかな光が宿った。

「こんにちは！ これ、返しに来ました！」

隔てる柵の隙間から、箱をケルトに差し出す。ケルトは徐にこちらに手を伸ばし、箱を受け取ってくれた。

(よし、無事に箱を渡せた！あとは……)

そこまで考えて、リーベはあることに気づく。彼から借りた箱は無事に返した。ならばもう、ここに用などないのではないか。

(ここに来る理由が、もう、ない……)

この場所には、ちょっとした観光目的で来た際に迷い込んでしまっただけであり、フォクノと逸れなければケルトと出会うこともなかった。いわば偶然の出会いだ。本来ならば、あの時点でリーベが再び貴族街を訪れる理由はなくなっていた。今日のことは、リーベが箱をもらうのが気が引けたために、申し出たからに過ぎない。だからケルトと会うのも、これが最後となる。

(なんでだろう……わたし、ケルトさんに会えなくなるのが、とっても残念に思ってる……)

彼と出会ったのは数日前が初めてで、深い親交があったわけでもない。それなのにもう会えないことを残念に思う理由が、よくわからなかった。

(ケルトさんは優しい人だから、かな。シロが警戒心抱かなかった初めての人だし)

明確な答えが出ない感情を持って余しながらも、己の中でそれらしい理由をつける。

顔をケルトの方へ向けると、琥珀色の双眸と視線ががちあった。

「……リーベ」

「は、はい！」

突然ケルトに名を呼ばれ、リーベはピッと背筋を伸ばした。

「すまないが……また何か歌ってはもらえないか。……煩くてかなわない」

「へ？」

最後の方は急激に声のトーンが落ちてしまったため、上手く聞き取れない。それでも彼にまた歌を所望されたのだ、ということは理解できる。

「も、もちろんいいですよ！ わたしは歌い手ですから」

歌ってほしいと言われて喜ばない歌い手なんていない。歌を気に入ってもらえることは、歌い手にとって最も誇らしいことであろう。

リーベはまず軽くあー、と発声を行い声の調子を整える。今日は何を歌おうかと考えながら、ふと頭によぎった歌を口ずさんだ。

「――」

この間歌ったものとはまた別の、幼い頃からよく歌っていた童謡。昔から歌うことが好きだったリーベは、孤児院の先生から童謡を習い、暇さえあればそればかり歌っていた。そんなある日、数多くの童謡が詰まった一冊の本を、孤児院の先生はリーベに与えてくれた。先生はミュージアムで歌われるような声楽的なものを教えられないことをすまなそうにしていたが、リーベはたくさん歌を知ることができて十分満足だった。

ミュージアムに所属してからは公演で披露するクラシック系の曲ばかり歌っているが、たまには馴染んだ童謡も歌いたくなる。

それに今現在練習中の歌をミュージアムの外で歌うことはできない。公演として披露するまで、その内

容は秘密にしなければならないのだ。これはミュージアムに入団した際にオーナーから注意事項として聞かされたもの。これが守れないようであるなら、歌手失格である。

リーベは思いつくままに歌い続ける。一曲だけにとどまらず、二つ目三つ目と続けた。

数曲熱唱した後、リーベは流石に歌いすぎたと我に帰る。特に曲数など指定されてはいないが、少し好き勝手に歌いすぎたかもしれない。

「え、えっと……い、以上でいいでしょう、か？」

恐る恐るケルトの様子を伺うと、じっとこちらを見つめたままの琥珀色の双眸と目が合う。リーベと視線があっても、彼は全く微動だにしない。もしかして、リーベが歌っている間中ずっと見つめられていたのだろうか。

(そ、そんなの恥ずかしすぎるよ……！)

心の中で大絶叫をあげたら、リーベはあたふたとケルトから視線を逸らす。

「……ありがとう。どうやら草木たちも満足したようだ」

「あ、はい」

ケルトからの反応に、リーベはほっと安堵する。どうやら彼は歌が長いとは思わなかったようだ。それだけでもリーベの心を軽くするには十分である。

「……何かほしいものはあるか？ また歌ってもらったのだから、相応の対価を支払う。気兼ねなく言ってくれ」

「え？」

リーベはパチリと目を丸くした。確かにまた彼の望み通りに歌ったわけだが、報酬を期待していたわけでない。そして困惑する。何か欲しいものがあるかと聞かれても、咄嗟に思いつくものなどなかった。

(あ、そうだ)

どう返そうかと悩んでいると、ふとあることを思いつく。リーベは顔を上げた。

「それなら、ケルトさんの作った焼き菓子をください。とても美味しかったので、また食べたいです」

更に、友人や先輩達もまた美味しいと言っていたことを告げる。高いものは気が引けるが、彼の作った美味しい焼き菓子ならば、是非もう一度食べてみたい。

「……そんなものでいいのか？」

「はい！」

ケルトは琥珀色の双眸を少し丸くしながらも、リーベが強く頷くと少し待っていてくれと言い残して、庭の奥へと姿を消した。

(今日もまたたくさん作ってあったのかな？ 楽しみだなあ……)

口の中いっぱい広がったしっとりとした甘さに思いを寄せる。またケルトの作った焼き菓子を持って帰れば、フォクノや先輩たちも喜ぶだろう。きっとあつという間になくなってしまいうに違いない。

「待たせた」

思考に耽っていると、ケルトが戻ってきた。その手に持っているのは、リーベが返した陶器で出来た花柄の小箱。裏口の扉を開け、ケルトが庭から出てくると、小箱ごと差し出される。

「わああ……！」

今回の焼き菓子は、チョコレートの生地とバニラの生地が混ざりあったマーブル状のもの。キラキラとリーベの漆黒の瞳が輝いた。見るだけでも、とても美味しそうである。

「また、箱ごと持っていくといい」

「え……？」

思わずそれでは返しに来た意味がないのではと言いそうになり、リーベは寸で言葉を飲み込んだ。そ

れはあまりにも失礼すぎる。

(ま、また返しにすれば――)

そこまで思っはつとする。またこの箱を返しにくる。つまり、この場所へ来る理由がうまれた。それはケルトとこうして会うことができることを意味している。

「……それじゃあ、またこの箱お借りしますね」

これが最後ではない。また会える。そのことがただ嬉しくて、リーベはケルトから箱を受け取った。

草木の手入れをしていると、突然ある方角からワッと歓声上がる。そちらに目を向けると、あることに気づいた。とても綺麗な歌声の持ち主であるリーベという少女が、以前訪れた方角であると。

(返しにくると言っていたが……今日きたのか)

そちらの方へ足を運ぶと、その予感的中した。

『こっち！　ここだよケルト！』

「……シロ」

片方しかない羽を大きく広げながら、自身の存在をアピールする白い小鳥。己の翼で空を舞えない彼が、独りでこの庭までたどり着くなどできるはずがなく、それは彼女の来訪を意味していた。

彼に手を差し伸べれば、シロはケルトの手に飛び乗り、腕を伝って肩へとやってくる。

(……今ここにいるのは俺一人だけ。ならば問題はないか)

勤務中ではあるが、手入れもほぼ終わっているような状態であるし、何より主は現在留守だ。現在手は十分空いている。

シロを肩に乗せたまま、木々が騒いでいる方へ足を運んでいくと、案の定そこに彼女がいた。

「ケルトさん！」

「リーベ」

漆黒の瞳がキラキラと輝いている。そして彼女の手には花柄の小箱。宣言通り、返しにきたらしい。

「こんにちは！　これ、返しに来ました！」

隔てている柵の間隙を利用して、リーベはこちらに箱を差し出してくる。ケルトも腕を伸ばしてそれを受け取った。

『ケルトー！　お嬢ちゃんにまた歌ってって頼んでよ！』

『また歌が聞きたいよ！』

(……煩い)

ずっと聞こえてくる、木々たちの「歌って」コール。もしもこのままリーベを帰したら、今度はきっとブーイングの嵐だ。聞き流せばいいのだろうが、外に出る度に不満をぶちまけられるのは、正直避けたい。草木たちの『声』がダイレクトに聞こえるケルトにとって、草木の機嫌を損ねることはあまりしたくはなかった。

(また頼むしかないな……)

リーベに歌を歌ってもらおう。これしかない。

(リーベに歌ってもらいたいのもわからなくはないが……また歌ってくれるだろうか)

彼女の歌は本当に素晴らしかった。芸術に一切興味のないケルトでさえ、また聞けるのならば聞いてみたいと思えるほど。明るい曲を好む植物が、リーベの歌を気に入らないわけがない。

しかし今回、彼女はこの箱を返しに来ただけなのだ。これから用事があるからと、断られる可能性もある。それでも聞くだけ聞かなければ、草木たちはきっと納得しない。

リーベの黒い双眸と視線が合う。リーベと彼女の名前を呼んでから、本題を切り出した。

「すまないが……また何か歌ってはもらえないか」

煩くてかなわない、とボソリと最後につけたしながら軽く目を伏せた。彼女に面倒をかけてしまうことに、やはり申し訳なさがたってしまう。やはり突然だったせいで、彼女の口からへ？ と啞然とした声が聞こえてきた。

「も、もちろんいいですよ！ わたしは歌手ですから」

しかし、少ししてからリーベから快諾を得る。弾んだ声音からは決して面倒だなどという鬱屈したものは感じない。

(歌手……ということは、ミュージアムに勤めているのか。通りで)

ミュージアムは、歌や楽器を使った演奏を披露する場所だ。その歌手ならば、人を楽しませる為の歌を歌うのだろう。彼女の歌がとても耳に心地良いのはそれが理由か。

リーベはあーと軽く発声をして、喉の調子を整えている。草木たちがワー！ と歓声をあげた。

「――」

それも、リーベが歌い出せばシンと静まり返る。聞き逃さないよう、聴力器官を澄ましているのだろう。そういうケルトも、歌っているリーベに視線が釘付けになる。

彼女は一曲だけではなく、複数の曲を歌ってくれた。全く歌を知らないケルトには、何と呼ばれる歌なのかはわからないものばかりだったが、自然と耳に馴染んでとけていく。もっと彼女の歌を聴きたい。聴いていたい。

だが、夢心地な時間はあっという間に過ぎていく。先日よりも明らかに長時間歌ってくれたはずなのに、気づけばリーベの歌は終わっていた。

「え、えっと……い、以上でいいでしょう、か？」

不安げな色を帯びた漆黒の瞳と目が会う。本音を言うならば、彼女にもっと歌っていてもらいたい。しかし表情から察するに、この後用事があるのかもしれない。ならば、これ以上彼女の時間を割くわけにはいかないだろう。

「……ありがとう。どうやら草木たちも満足したようだ」

それに、草木たちは上機嫌でリーベにやいやい謝辞を述べている。彼らが満足したのならば、これ以上望むものではないだろう。

「……何かほしいものはあるか？ また歌ってもらったのだから、相応の対価を支払う。気兼ねなく言ってくれ」

そして歌ってくれた礼を彼女にしなければならぬだろう。しかし前回ケルトが選んだ彼女への報酬は、今手元にある。リーベへ差し出すものなのだから、彼女が喜ばなければ意味がない。だから、今回はケルトが決めるのではなくリーベが求めるものを礼にすればいいだろう。

リーベは初め困惑気にしていたが、暫くして思いついたのか、明るい表情でケルトを見上げた。

「それなら、ケルトさんの作った焼き菓子をお願いします。とても美味しかったので、また食べたいです」

今度はこちらが困惑する方だった。確かに彼女はケルトの作った焼き菓子を美味しそうに食べてはいたが、まさか『礼』としてそれを指定されるとは全くの想定外だ。焼き菓子はあくまでおまけ程度のつもりで渡したものであったのに。

「……そんなものでいいのか？」

「はい！」

元気よく返事をするリーベの漆黒の瞳は、キラキラと輝いている。

焼き菓子ならある。主のために作ったものが。主や仲間達は甘いものを好むために、常に多めに用意していた。今日もまた、出かけた主が帰ってきた時のために用意は万全である。

リーベに少し待っていてほしいと告げて、ケルトは邸へと戻る。甘い香りの残るキッチンへ赴き、先ほ

ど作ったばかりのマーブル状の焼き菓子を見据えた。

「これにするか……」

『なら、リーベが返した箱に入れるといいよ！』

今まで黙っていたシロが元気な声をあげた。そういえば、彼をリーベに返すのを忘れていたことを今更のように思い出す。

この箱に焼き菓子を入れろと進言されても、前回この箱はもらえないと断られている。しかし、手頃な入れ物になるようなものをケルトは他に持っていなかった。キッチンの棚になれば入れ物に使えるようなものは幾つかあるが、この場にあるものは邸の備品であり、ケルトの判断でリーベにあげてしまっていたものではない。

「……仕方がないか」

逡巡の後、ケルトはシロの言う通りにこの箱を入れ物として使うことを選択する。小箱の蓋を開け、その中に焼き菓子を入れるだけ詰め込んでいく。

焼き菓子を詰め込んだ箱を持って庭へと戻った。裏口の扉を開け、リーベに箱ごと差し出す。

「わああ……！」

リーベが胸の前で手を合わせながら、瞳を輝かせる。これもどうやら気に入ってもらえたらしい。内心ほっと安堵する。

「また、箱ごと持っていくといい」

焼き菓子は喜ばれても、入れ物である箱まで受け取ってくれるかはわからなかった。なんせ、一度は断られたものを『借りる』という名目で返しにきた代物なのだから。

「え……？」

やはりというべきか、リーベは困惑げな表情を浮かべる。自分が返したものをまた持ってこられたら、誰しも困惑するのは当然か。

(……別の入れ物を探すべきだったか)

今更なことを思いながらも、それでもやはりケルトの私物の中に入れ物となりそうなものは、この箱しか思いつかない。

その事情を口にしようとしたところ、リーベが箱に手を伸ばした。

「……それじゃあ、またこの箱お借りしますね」

そして焼き菓子の入った箱はリーベの手へと移っていく。

リーベは、この箱を借りると言った。つまり数日後、返しに来てくれるのだろう。また彼女はここへやってくる。会うことができる。

「……ああ、待ってる」

彼女にまた会える。その事実を嬉しく思う自分を不思議に思ったが、全く不快ではなかった。

「ふふふ……」

リーベは花柄の小箱をじっと見つめた。明日は待ちに待った休日。ケルトに会いに行く日だ。

以前ならば、休日は部屋でのんびりしていることも多々あったが、ここ最近シロを連れて必ず外へと出かけている。もちろん、ケルトに会いに行くために。

「楽しみだね、シロ」

――ピィ。

リーベの言葉に同意するかのように、シロが明るい声で鳴いた。彼もまたケルトに懐いており、いつもケルトを呼びに行く係りを率先してやってくれる。

ケルトと出会ってから、既に数週間が経過していた。リーベは休日になると借りた箱を返しに行き、ケルトに頼まれて歌を歌って、そしてお礼として焼き菓子の入った箱を借りる。そして次の休日に箱を返しに行き――ということを繰り返していた。

「ふー、いい湯だった」

「フォクノ」

肩にタオルをかけたフォクノが、部屋の扉を開けて入ってくる。眩いブロンドの髪が湿っていて艶を放っていた。

カーテュアリーミュージアムは、団員を住み込ませてくれる宿舎がある。正式に入団した際に希望すれば誰でも入居は可能だ。無論、タダではなく給金から生活費が天引きされるのだが、孤児院で育ったリーベやフォクノにとって、住いを提供してくれるだけで十分ありがたいことだった。

「ちゃんと髪の毛乾かしなよ？ 風邪ひいちゃう」

「わーかってるって」

宿舎で風呂と食堂は共同であり、時間がきっかりと決められている。特に風呂は男女別に一つずつあるものの、あまり広いとは言えず、日毎職分で時間が決められていた。今日はリーベ達歌手が先で、その後に演奏家が続ぎ、最後にフォクノ達裏方の者が入るという時間割である。

「その箱……そういや明日歌手は休みだっけ」

「うん。だからまたシロと二人で行くの」

――ピィ。

フォクノは肩に掛けていたタオルで無造作に髪をわしゃわしゃと拭く。綺麗な色の髪をしているのに、彼女は自分の容姿にあまり頓着していないのが、少々勿体なく思う。

「何度も行ってる場所だから迷うことはないだろうけど……暗くなる前にはちゃんと帰ってきなよ。最近物騒な話よく聞くだろ？」

「えっと……最近何回か発生してる人攫い、だっけ」

「そうそれ」

フォクノがテーブルの椅子を引いて、そこにどかりと座る。髪を拭いていたタオルを、再び肩へとかけた。

「浮浪者がある日突然いなくなるーっていうのなら一年くらい前からちょくちょくあったけど、最近は夜に一人で出歩いた奴が帰ってこなくなるってのが、頻繁にあるんだってさ」

その話ならば、リーベもユナフィアから歌手の先輩たちと共に聞かされている。行方不明になってしまった人は、誰も戻ってはいないらしい。フォーリエストの治安を守る自警団は『人攫い事件』として捜査

を始めているのだと。そのため、夜は絶対一人で出歩かないことを強く念押しされた。

それがなくとも、リーベは真っ暗な夜は怖くて一人で外を出歩きたいとは思わない。日が暮れる前にも帰路につくのはそれが理由だ。真っ赤な夕焼けは綺麗だと思うが、その後にやってくる暗闇はリーベにとって恐怖の対象でしかない。

「必ず暗くなる前には戻るから」

「そうしてそうして。なんせリーベは、カーテュアリーミュージアムの神鳥サマなんだから。――あと少ししたら公演が始まるんだ。リーベの歌を楽しみにしてるお客さんが大勢いるってこと、忘れるなよ？」

「――うん」

合唱団の一人としてではなく、初めて神鳥として舞台に立ったときのことはまだ鮮明に記憶に残っている。

なんとリーベは、緊張からか出だしから転んでしまった。すぐに慌てて立ち上がり、スポットライトの当たっている中央に立って、ずきずきとした痛みを堪える。

そのとき視界に映った大勢の観客に、リーベは圧倒された。大多数の視線が、リーベたった一人に集まっている。それだけでなく、静まっていた客席からざわめきが始まった。

――あんな子が神鳥？

――おい、さっき転んだぞ。大丈夫なのか？

リーベの耳に届く、不審の言葉。出だしから転んでしまったことで、観客に不安を与えてしまったのだろう。

(ど、どうしようどうしよう……！)

頭の中がぐるぐると混迷を極め、体が強ばる。逃げ出したくなる気持ちが湧き上がり、更には神鳥となってしまった己自身を恨んだ。

助けを求めるように舞台袖の方を見遣ると、そこには無言でリーベを見つめているフォクノとユナフィアの二人の姿がある。二人と視線が合うと、彼女たちはとにかく歌え、と言ったような気がした。

(そ、そうだ、歌わないと……！)

リーベが今ここに立っているのは歌うためだ。歌うために、舞台に立っている。それは大勢での合唱でも、独りでのソロでも変わらない。

両手を胸にあてながら、大きく息を吸い込んだ。

「――」

とにかく、歌おう。この日のために練習を重ねてきたではないか。フォクノにも、先輩達にも、ユナフィアにも、これならお客様にも喜んでもらえるまで。今リーベがすべきことは、心を込めて歌を歌うこと。

歌い続けていくうちに、不安に縛られていた心が解れていくのを感じた。ああそうだ、歌えばいい。リーベは多くの人に歌うことを望まれて、この舞台へ立っているのだから。

(わたしの歌声、皆に届いて……！)

その一心でリーベは声をさらに張り上げる。胸に当てていた両手を大きく前へと広げ、思う存分歌い上げた。

そして全ての歌を歌い上げたリーベを待っていたのは、溢れんばかりの拍手だった。観客が立ち上がりながら、両手を大きく叩いてくれている。

(喜んで……くれたんだ！)

大きな拍手に胸がいっぱいになったリーベは、目頭から熱い雫が溢れそうになるのを堪えながら、観客に向かって頭を下げる。

結局その後も足がもつれて転んでしまったのだが、リーベは神鳥として最高の歌を観客に披露することができたのだと思った。

以前から続けていた舞台上で転ばない特訓も順調だ。日々、舞台上で履くようなヒールの高いものを履いて足を慣らしている。初めのうちは毎日何度も転んで青アザを作っていたけれど、最近は転ぶ回数自体が減っているうえに、一度も転ばなかった日もある。この調子ならば、次の公演では転ぶという失態を犯すこともなくなるかもしれない。

「わたしの歌を楽しみにしてくれてるお客さん、たくさんいるんだよね。うん、これからもがんばらなきゃ」
「おーおー、気合入ってるじゃん」

フォクノが楽しそうに口の端を釣り上げる。そして座っていた椅子から立ち上がってリーベの頭に手を伸ばし、わしゃわしゃと掻き回された。

「わっ……！ フォクノ！ 髪の毛ボサボサになっちゃう！」

漸く乾いてきた髪をボサボサにされ、リーベは悲鳴をあげる。手を退けたフォクノを恨みがましい目で睨むが、彼女は全く意に返さずケラケラと笑った。

「明日の焼き菓子の土産、楽しみにしてるから。本当に店で売ってるのと同じくらい美味しいよね、ケルトさんとやらが作った焼き菓子」

「うん、そうだよ」

歌った後にくれる焼き菓子は、日毎に違う。この間は胡桃が入ったもので、その前はココアパウダーを混ぜ込んだもの。紅茶の香りがするものなど、同じものをもらったことはないが、その全てがとても美味しかった。ケルトの焼き菓子は持って帰ったその日に全てなくなってしまう。リーベだけでなくフォクノやミュージアムの先輩たちも、ケルトの焼き菓子を楽しみにしていた。

「本当に庭師なの？ パティシエじゃなくて」

「う、うん。ケルトさん本人がそう言ってたよ……」

ケルトから直接聞いているリーベも、改めて尋ねられると自信をもって彼は庭師だと返すことができない。それだけ彼の作る焼き菓子は美味しく、かつ見た目もいい。

「なんで庭師に落ち着いてるんだろうね。店でも構えりゃ、きっと人気でるだろうに」

「あ、そうだね」

ケルトがもしも菓子屋を開くことになったら、リーベは常連になる自信がある。休日になったら、欠かさず買いに走るだろう。

「フォーリエスト唯一のミュージアムで神鳥を務めるお嬢さんお気に入りの店！ って、宣伝文句も完璧だね」

「フォクノ……本当に店を出すわけじゃないんだから」

それにもしケルトが店を出したとしても、リーベが宣伝に使われるなんて恥ずかしすぎる。それにもっと真面目なことを宣伝文句にすべきだろう。

そのときふと、あることを思いだした。

「……そういえば、ケルトさん『神鳥』のこと知らなかったみたい」

「は？ 意味を知らないって……あたし達みたいな孤児院育ちの子供でも、ミュージアムで最高の歌手のことを示す言葉って知ってるような、有名な単語じゃんか」

「えっと……正確にいうと、神鳥って呼ばれる語源の方を知ってて、ミュージアムでとりを務める一っていう方を知らなかったんだって」

ケルトと顔を合わせる回数を重ねるにつれ、歌うだけでなく会話に花を咲かせるようにもなった。ケルトは口数が少ないため、ほとんどリーベが己のことを話してばかりではあるが。

その中で、リーベは以前ケルトに自分は神鳥を勤めていると勇気を出して告げたことがある。ミュージアム関係者以外に己が神鳥だと告げるのは始めてで、口に出すまで何度も口籠もってしまった。堂々と「わたしは神鳥です」と言える自信は、まだ身につけていない。

「神……鳥？ リーベが？」

ケルトは大きく目を見開く。誰がどう見ても驚愕の眼差しを向けられて、ああ、やはり自分は神鳥に見えないんだなあ心の中で激しく落ち込んだ。

「や、やっぱりそうは見えないですよ……歌だけならそれなりだと思うんですけど、わたしあんまり衣装映えしない顔だし……十六に見えないってよく言われるし……」

俯きながらボソボソと後ろ向きなことを呟く。リーベはメリージアに比べて、華やかさに欠けることを密かに気にしていた。愛らしくも美しく整った顔立ちに、豪華な銀の巻き毛。自信に満ちた黄金の瞳。神鳥の衣装を纏ったメリージアは、王都の貴族の令嬢にも負けないくらい美しく華やかだった。

それに比べてリーベの髪と瞳は地味な黒。舞台に立つときは化粧を施されるとしても、メリージアのような華やかさはそこにはない。衣装係の尽力もあって決して地味ではないのだが、リーベの理想である『華やかな神鳥』とは程遠い。

「……神鳥には、二つの意味があるのか？」

「え？」

「『神鳥』は、創造神のために唄い続けた歌の女神だと主から聞いたのだが」

「ええ!？」

今度はリーベがぎょっとする番だった。

一般的に『神鳥』と聞かれたら、それはミュージアムの歌い手のことを指す。そして由来となった『神鳥』のことは、実はあまり知られていないことの方が多い。創造神への信仰は完全に失われてしまっているため、神についての知識を得る機会はほぼないせいだ。リーベは孤児院の先生から神鳥の唄を習ったときに聞いたため知っていたが、先輩たちについては入団してから聞いたという者がほとんどだろう。そして神鳥以外の神のことは、やはり全くの知識がない。

「……聞けば聞くほど不思議な奴だね、そのケルトって人。普通逆じゃん」

「あはは……」

「それに神鳥さまって女神だったんだ。知らなかったよ」

「あ、それはわたしも初耳だった」

リーベが神鳥について知ってるのは、創造神の心を楽しませるために歌を捧げ続けた至高の歌声を持つ鳥、だということ。性別についてはケルトに言われるまで知らなかったし、神鳥のことを教えてくれた先生も、性別については言及していなかったように思う。ミュージアムの神鳥を勤めている者の大半は女性らしいが、男性の神鳥もいないわけではないとも聞いている。

「ケルトさん、ご主人様から聞いたって言ってたから、ケルトさんのご主人様がきっと神話とかに詳しいんじゃないかな」

「ああ、なるほど」

ケルトの主人がどんな人物かはわからないが、神話に興味があって詳しく知っているならば、リーベの知らない神々のことも聞いているかもしれない。

「明日ケルトさんに神様のこととか、聞いてみようかな……」

「いいんじゃない？ あ、ついでに店を出すことも勧めておいてよ。もし出すならあたしや姉さん達も買いに行くからって」

「……りょーかい」

きりっと真顔で親指を立てるフォクノに、リーベは脱力するのを堪えながら了承の意を示した。

ごたごたと無造作に雑多なものが放り込まれた箱を両手で持ちながら、廊下を歩き続ける。これらは全て、いらないと判断されたゴミばかり。それらを一気に全て捨てるために、こうして一つの箱へと詰め込んだ。

「フォ、フォクノそれ重くない!? 大丈夫!?!」

「へーきへーき。あたし、力には自信あるし」

同僚の友人がフォクノが抱えている箱を見て心配そうな顔をする。そんな彼女に向かってフォクノはからからと笑ってみせた。見た目は確かに重そうに見えるが、中身は布や紙など軽いものばかりで、実際そこまで重くはないのだ。

ゴミ捨て場までたどり着き、箱をひっくり返してバサバサと中身を捨てる。よし、と心の中でつぶやいてから、持っていた箱を潰して最後に放り込む。

「ゴミ捨て完了」

手をパンパンと払うと、くるりと踵を返す。仕事はまだたくさん残っているのだから、こんなところに長居は無用である。

(今頃リーベはケルトさんとやらの所か。うーん、臆病で人見知りするあいつにも、ついに春が来てしまったかあ)

しみじみとそんなことを思いながら、フォクノは腕を組みながら来た道に戻った。

リーベは昔から全く性格が変わっていない。家事を頑張って手伝うのはいいが、お皿を割ってしまったり、何も無いところで転んで花瓶の水をぶちまけてしまったり。その度にごめんなさいごめんなさいと、リーベは泣きそうな顔で謝り続ける。孤児院の仲間や先生も手馴れたもので、リーベのドジは日常茶飯事であった。それでも同じ年頃の少年たちから厳しい言葉を受けたこともあって、リーベは失敗することを非常に恐れている。

そのときのトラウマからか、特にリーベは男性に対して苦手意識を持っていた。年少の男の子に対しては普通なのに対し、同年代以上の男性に対しては見るからに尻込みしている。かつて現場を見つけては「男なら詰るんじゃないかと深い度量を見せな」と庇ったことは一度や二度のことではない。口が達者であったフォクノに叶う男はおらず、次第にリーベを詰る者はいなくなった。ドジに慣れていったのもあるだろう。

そんなリーベだからこそ、今まで色恋沙汰に無縁だった。フォクノみたいに興味がないわけでもないだろうが、どの男性に対しても一歩引いた状態では『恋』などできるはずもない。

そんな折に出会ったケルトという男性。リーベが彼の話をするときは、明らかに目がキラキラと輝き、そして頬を薄っすらと赤く染めている。その時点でフォクノはリーベがケルトという男性に惹かれていると気づいたが、本人はまだ気づいていないようだった。

そしてそれを知っているのもフォクノだけ。リーベは他の団員達にケルトのことを「植物の気持ちかわかる、優しくしてお菓子作りが得意な人」と説明したため、彼のことを女性だと思い込んでいるのだ。

かくいうフォクノも、リーベから初めてケルトのことを聞いたときはちょっと変わった女性だと思っていた。しかし、彼の元に訪れるリーベから詳しい事情を聞くにつれて違和感を感じ、そして直接リーベに訪ねて漸く判明したのである。人見知りである上に男性を苦手としている面もまた、きっとケルトの性別を誤らせる原因となっていたのだと思っている。

そしてフォクノはあえてそれを言及することはしていない。変につついてしまったら、リーベは彼の元へと羞恥で行かなくなる可能性がある。ケルトの作る焼き菓子を楽しみにしているのは、リーベだけではないのだ。あれが食べられなくなるのは正直惜しい。

それにリーベは、その感情を悟られないようにすることなど、できはしない。自覚したら最後、ミュージ

アムの団員全てに恋情が知れ渡り、毎日のようにからかわれるに決まっている。

いずれバレる日が来るのに変わりはないが、その日をわざわざ早めてしまう必要はないだろう。それまでは、リーベの恋路を温かく見守ろうとフォクノは決めていた。

(さーて、今日の焼き菓子はどうかなあ)

リーベが貰ってくるであろう、焼き菓子にフォクノは思いをはせる。フォクノもリーベと同じく甘いものが好きだ。孤児院にいたときには滅多に食べることができなかったため、差し入れとして歌手の先達から分けて貰えたときには、リーベと共に感動したのを覚えている。それだけでも、ミュージアムに入団してよかったと思えるほどに。

(今日の楽しみのために、精一杯働かないと――お?)

作業場に戻ろうとする途中、向かいに目に見えてわかりやすいほど影を背負った女性が歩いてくる。彼女の珍しい姿に、思わず目を丸くした。

「お疲れさまです、オーナー。……でもって、何かありました？」

フォクノはすれ違おうとしたところで、ユナフィアに挨拶を交わす。ユナフィアは声をかけて漸くフォクノの存在に気づいたようで、俯けていた顔をあげた。

「フォクノ……何かあったというより、これから起こるとでも言うべきね……」

「はい？」

虚ろな瞳で視線を横に逸らしながら呟くユナフィアに、フォクノは疑問符を浮かべた。彼女は女だてらにミュージアムを運営しているだけあって、常に背筋をピンと伸ばし、堂々とした威厳を持っている。それなのに今のユナフィアには覇気がなく、よろよろとどこか弱っているように見えた。

「大丈夫ですか？ 体調がよくないなら、休んだらどうでしょう」

「ありがとう……でもこれは体調不良が原因ではないのよ……」

体調不良のせいではないとなると、一体何が原因なのだろう。不思議に思っていると、ユナフィアがポツリポツリと語り始めた。

「最近、リーベに会わせてほしいって言うお客様が来るのよ……しかも毎日同じ人」

「へ？ リーベに会わせてほしいって？」

初めは訝しんだフォクノだったが、すぐに納得した。つまり、リーベに会って歌を聞かせてもらおうと狙っているのだろう。お人好しのリーベのことだから、頼まれたらあっさり了承するに違いない。

「まあ確かに、リーベに会ったら確実に歌ってもらえますからねえ……。そんなにしつこいなら、断るのやめてみたらどうです？」

「……例外を作るわけにはいかないわ。一人のお客様にそれを許したら、他のお客様が黙ってはいないでしょうね。そうなって困るのは、結果的にリーベよ」

「成る程……」

ユナフィアの様子がおかしい理由が漸く理解できた。ここ暫くリーベに会わせてほしいと願う客に対し、頭を悩ませていると。

確かに一人を例外的に認めたら、他の客も自分もと押しかけてくる可能性は充分ある。リーベと親しい付き合いのない者は、ミュージアムの公演でしか歌を聴ける機会がないのだ。その話がもしも漏れてしまったら、不公平だと思ってしまうのは仕方のないことだろう。

「何度も……何度もお客様には公平をきすために会わせられないって言ってるのに……！ 毎日『心変わりはありませんか？』ってやってくるのよ……！ もう、信じられない……」

「うわあ……」

げんなりとしているユナフィアの様子からして、同じようなやりとりが何度も何度も繰り返されている

のだろう。毎日そんな調子でやってこられたら、誰だって嫌になるに決まっている。

「今日もきっと来るでしょうね……。だからって邪険にすることもできないし……」

「えーと……ご愁傷様です……？」

遠い目を向けるユナフィアに、フォクノはポリポリと頬を搔いた。所詮裏方の雑用でしかないフォクノに、彼女の苦心をどうこうすることなどできはしない。せいぜい、こうして愚痴を聞くことぐらいだ。

「……ごめんなさい、愚痴ってしまったわね」

「いえいえ。あたしじゃそれぐらいしかできませんし。オーナーにはいつも世話になってますから、それくらいはどうってことないです」

ミュージアムで起こる問題のしわ寄せは、全てユナフィアの細い肩にのしかかる。彼女は常にミュージアム全体のことを考えて働いてくれているのだから、所属している団員は、彼女の助けになるならば進んで行動するだろう。それだけユナフィアはミュージアムの責任者として慕われてもいるのだ。

「愚痴りたくなったらいつでもどうぞ。溜め込むばかりはよくないですし」

「……ありがとう。そうね、吐き出さなくなったらまたお願いしようかしら」

ユナフィアが微笑を浮かべる。無理やり作ったような表情ではないところからして、少しは彼女の気を緩めることはできたのだろう。フォクノは軽く頭を下げ、ユナフィアの隣を通り過ぎた。

(オーナーも大変だなあ……。でもって、ケルトさんとやらは贅沢だねえ。リーベの歌を独り占めしてるんだもんな)

他の客が彼の存在を知ったら、きっと憤慨するのではないだろうか。チケット代を払うことなく、好きなだけリーベの歌が聴けるなんて羨ましいと。

(……うん、オーナーの頭痛の種を増やすのはよくないよね。ケルトさんのことは、これからも黙っておいた方がよさそうだ)

リーベが休日ケルトの元へ通っていることを、ユナフィアは知らない。と、いうより伝えていない。公序良俗に反しなければ特に行動を制限されることはないが、外出する場合は何か問題が起きたときのために、どこへ行くのだと伝える義務はある。が、それは別にオーナーでなくとも構わない。きちんと説明ができるのならば、他の団員に伝えるだけでもいいのだ。

フォクノは、リーベが今ケルトの所へ行っていることを知っている。だからリーベは外出時の義務を果たしているので問題ない。

もしもこのことがユナフィアに知られたら、きっといい顔をされないだろう。ケルトの存在が知られば、当然自分もと願う者は出てくる。そしてそれを対処しなければならないのは、ユナフィアだ。

(歌は上手いわりに特に目立つ容姿じゃないから、街中歩いててもリーベが神鳥だって気づく人いないしね。黙ってても大丈夫でしょうよ)

実際リーベが神鳥になってから何度も一人で外出しているにも関わらず、彼女の口から道中知らない人に声をかけられたと騒いでいるのを聞いたことがない。メリージアのように派手な見た目をしていればパッと見ただけでわかるだろうが、リーベは良くも悪くも見た目は地味だ。それに普段化粧はしていないため、余計に分かり難いだろう。

歌を歌わなければ、リーベを神鳥だと認識するのは難しい。そしてリーベが歌を歌うのは、人通りが少ない貴族街の一角である。騒ぎになる可能性は極めて低いだろうとフォクノは考えている。

(まあバレたとしても……そんなときゃケルトさんとやらが男だって事実を話せば、先輩や姉さん達も味方になってくれるだろうし)

なんだかんだで、リーベは先達の歌い手達から可愛がられている。入団したときは歌の才能をやっかまれはしないかとヒヤヒヤしたが、歌以外においては鈍臭いリーベに、歌い手達は嫉妬よりも親しみを覚え

たようだ。リーベのことをからかうことはあれど、本当に存在を憎らしいと思っているのはメリージアくらいだろう。だからこそ、リーベに春が来たことを知ったなら応援してくれるに違いない。その分からかわれる頻度もあがるのだろうが。

(さあて、仕事仕事)

いろいろ考え事をしているうちに作業場へと辿り着いていたフォクノは、両腕をぐっと上に上げて軽く伸びをしてから扉を開いた。

甘い匂いが充満している。

彼女が定期的に訪れる日には、こうしていつもより少し多めに菓子を作るようにしていた。元々大量に作ってはいるのだが、仲間の一人が極度の甘党で、彼が大半を平らげてしまう。そしてリーベに焼き菓子を分け与えた日は、いつもより量が少ないと駄々をこねるのだ。

彼がどれだけ不満を抱こうが気にしたことはないが、もっと作れと強請られるのはかなり鬱陶しい。主にまで窘められる酷さだ。

そのため、ケルトは彼女の分を別に作ることにした。これは別段彼のためなどではなく、歌を歌ってくれる彼女のため。そして主の手を煩わせないようにするためのもの。休日に訪れていると言っていた彼女に、次の休日を聞いてあらかじめ準備をしておくようになった。

彼女、リーベと出会ってから大分日が流れた。リーベはケルトが渡した花柄の陶器の箱を手に、シロと名付けた真っ白な小鳥を肩に乗せて昼を過ぎたあたりにやってくる。

リーベがやってくるたびに歌を歌ってほしいとせがんでくる木々のために、彼女に歌ってほしいと伝え、そしてその礼として彼女が持ってきた箱に焼き菓子を詰めてリーベに渡す。

既に数回同じことを繰り返していた。なのにそれを滑稽だとは思わず、むしろリーベが訪ねてくる日を楽しみにしている自分がある。焼きたての焼き菓子をテーブルの上に置くと、目をキラキラと光らせるリーベの姿が脳裏を過ぎった。

(喜んでくれるだろうか……)

まずいものを作っているつもりは毛頭ないが、味の好みは人それぞれである。気に入るか否か。同じものを差し出すのは気が引けたため、できるだけ以前作ったものとは別のものを作るよう心がけてはいるが、そろそろレパートリーも尽きてきそうだ。今度は、リーベにどんなものがあるかを聞いてみた方がいいかもしれない。

(そろそろか……)

外を見ると、日が高い所から少し降りた位置へと移動していた。リーベが訪ねてくる時間帯。ケルトは庭へ続く扉を開き、わいわいとしゃべっている草木の様子を伺う。

『来たー！ リーベ来たー！』

『やったあ！ あの子来たよケルト！』

ワッと騒ぎ出した木々のおかげで、リーベが来訪したことはすぐにわかる。そちらへと向かうと、緑の中から場違いな真っ白な色が飛び出してきた。これもまた、いつも通りの光景。

『ケルトやっほー！』

「シロ……」

リーベの相棒である彼は、こうしてリーベより先にケルトに姿を見せに来る。彼がこうしてここに来ずとも、木々が騒ぐおかげでリーベが来たと知ることはできるのだが、シロはそれを知っていてもなおやってくるのをやめない。ケルトは屈んでシロに向かって手を伸ばすと、彼はケルトの手に飛び乗り、腕を伝って肩へと移動する。

一度言ってやめなかったのはシロの方だ。だからケルトはそれ以降は何も言うことなく、こうしていつものように肩に乗せた。リーベは人見知りだと言っていたが、そうは思えないほど人懐こいシロは、肩の上がほぼ定位置となっている。

「ケルトさん！」

柵の外側にいる、襟首で切り揃えられた黒髪と同じ色の瞳を持つ少女が、ケルトの姿を視界に収めると嬉しそうに破顔する。

ケルトは口元が緩むのを感じた。最近彼女の存在そのものが、ケルトの心を和ませてくれる。

『歌って歌ってー！』

『また歌が聞きたーい！』

しかし周りから響く歌を望む声の数々が、そんな気分をすぐに台無しにしてしまう。毎度毎度リーベに歌を頼んでいるのだから、いい加減静かにしているということにはできないのだろうか。

「これ、どうぞ」

「ありがとう」

リーベから柵越しに箱を受け取る。これもまた毎度のことだ。キッチンに置いた焼き菓子に思いを馳せる。今日もまたリーベが喜んでくれたらいい。

「今度のも、とっても美味しかったです！ また貰ったその日に全部なくなっちゃいました」

「そうか」

「はい！ ケルトさんの作る焼き菓子は、ミュージアムの皆にも大好評です！」

リーベは両拳をぐっと握り締めながら、こちらを見上げてくる。流石に彼女の同僚にまで気は配れないが、前回の焼き菓子もまた満足してもらえたようだ。

「それでその、フォクノ……わたしの友達が、こんなに美味しい焼き菓子が作れるなら、お店を出せばいいのって言ってました」

「店？」

「はい！ 焼き菓子のお店です！ もしもお店を出すなら買いに行くのにねって。わたしも、たくさん買っちゃおうと思います」

「……」

まさかそんなことを聞かれるとは思わず、ケルトは押し黙った。

確かに主も仲間たちも、ケルトの作る菓子を美味しいと褒めてくれる。リーベもまた、そうだ。そして彼女の同僚にも喜ばれているらしい。

そこまで考えてから、ケルトは首を横へと振った。店を出すということは、利益を求めなければならなくなる。ケルトはそんなことは望んでいない。

「いや……店は出さない。俺は、主や仲間たちが……リーベが喜んでくれるならば、それでいい」

「……！」

動植物の声が聞こえるからという理由でケルトは庭師になったわけだが、庭師の仕事はあまり多くはない。ゼロから庭を作るのならまだしも、既に作られている庭を草木の声に応えながら整えるだけなのだ。そのため、他にも役立つようなことを探してたどり着いたのが焼き菓子作りである。

ただ彼らに少しでも喜んでもらえたらと始めたはいいが、当然最初からうまくいっていたわけではなく、何度も失敗を繰り返していた。その経過を経て成功したものを食べてもらい、美味しいと言ってもらったときはとても心が温かくなったのを覚えている。

それに、店を持ってしまったら主の傍にいられなくなってしまいうだろう。それでは意味がない。主から受けた恩義に少しでも報いたくて始めたことなのだから、本末転倒になってしまう。

ふとリーベを見やると、彼女は朱に染まった頬に手を当てながら俯いていた。

「……どうかしたのか？」

「な、何でもありません！」

リーベはぶんぶんと勢いよく首を横へと振った。少し心配になったが、彼女が何でもないという以上、ケ

ルトからこれ以上聞き出すことはしない方がいいだろう。

「今日も……また、頼んでもいいか？」

「は、はい！ もちろんです！」

リーベに歌を頼むと、周りの木々がワッと湧いた。リーベに気づかれないよう嘆息する。毎度毎度のことだというのに、木々たちが騒がなくなる傾向は未だになかった。

「――」

胸に手を当て、リーベが大きく息を吸い込む。そして小さな唇から発せられる旋律に耳を澄ました。

リーベは様々な歌を知っている。こうして会うようになってから何度も歌ってくれているが、彼女が同じ歌を歌ったのは、一番最初の唄だけ。全く歌を知らないケルトからしたら、どうしたらそんなにたくさんの歌を覚えきれののだろうかと思議でならない。

今日もまた数曲、彼女は歌い続けてくれた。彼女がよく歌う『童謡』と呼ばれる歌は、あまり音程の強弱がなく、明るい曲調なものばかりだ。子供の頃に貰った童謡の本で覚えたのがほとんどらしく、歌詞の内容も確かに子供っぽいと思われるところがいくつかある。だがそのおかげか、歌を全く知らないケルトでも歌詞の内容が頭に入りやすいと思った。子供用の歌ということは、歌いやすくできているのかもしれない。(一番初めに歌ってくれた……あれも童謡だろうか)

初めて聞かせてくれた歌だからか、数日が経過したにも関わらず、あの歌が一番印象深く残っている。主から神鳥について聞いたばかりだったからかもしれない。喜ばせるために歌を唄い続けるという神鳥。まるで目の前の少女を示しているかのようだった。

事実、リーベはミュージアムで神鳥をしているらしい。これはミュージアムでとりを務める者に与えられる称号のようなものらしく、リーベ自身は恐れ多いと言っていたが、ケルトはむしろ相応しいと思っている。彼女の歌は、草木を喜ばせてくれる、素晴らしい歌だ。正しくあの歌の通りの神鳥だと言える。

リーベの歌が止んだ。彼女はこちらを見上げて軽くペコリとお辞儀をする。ワア！ と喜びの歓声をあげる草木たちの声からして、今日もまた満足したようだ。

「ありがとう、リーベ。草木たちも喜んでいる」

「い、いえ！ こちらこそ……」

礼を言えば、リーベはふにやりとはにかんだ。最近は歌だけでなく、リーベのこんな笑顔を見るのも楽しみの一つとなっている。

「あ、あの、ケルトさん。少しお聞きしたいことがあるんですけど、いいですか？」

「何だ？」

「えっとその……前に神鳥のお話、しましたよね」

「ああ……」

リーベが神鳥だと名乗ったときには驚愕した。彼女もまた自分と同じ(・・)なのかと。しかしそれは勘違いだった。ケルトはリーベに聞くまで、ミュージアムでとりを務める者の称号を神鳥というのだと、知らなかったのだ。

「ケルトさん、神鳥のことをご主人様から聞いたって言ってましたけど、神話に詳しい方なんですか？」

「……」

ケルトは少し戸惑った。リーベに何と返せばいいのかがわからなくて。

結論から言えば、主は神話に詳しいと言えるだろう。しかし何故詳しいのかと聞かれたら、本当のことをぼかさずに伝えられる自信がない。

「詳しい……といえば、詳しい、と思う……」

曖昧な返答になってしまったが、それを聞いたリーベは瞳を輝かせた。

「わあ、すごいですね！ わたし神鳥以外の神様のこと、全然知らないんです。えっとそれで、もしよければなんですけど、他の神様についてケルトさんが知っていたら、教えてほしいなあ……って」

リーベの口から出た言葉に、ケルトは内心安堵した。これならば、彼女の問いに答えることができる。了承の返事をしてから、どこから話そうかと知識を整理した。

「……まず、人間は一口に『神』というが、神と呼ばれる者は大勢いる。大抵は全てを創りだしたとされる、創造神クリエルトのことを差すのだろうが、かつて天界で暮らしていた人々を総称して『神』と呼んだ」
「天界？」

「神々が暮らしていた世界のことだ。人間が暮らしているこの世界の話は『下界』と言うらしい」

おー、とリーベが感嘆の声を漏らす。ケルトは頭の中を整理しながら、言葉を繋いだ。

「神には人知を超えた力がそれぞれ備わっている。その力を持って下界に恵みをもたらしたり、反対に災厄を降らせたりもしたようだ」

「わあ……やっぱり神様ってすごいんですね……！」

漆黒の瞳が好奇心を隠すことなく、キラキラと光っている。無垢な瞳に口の端が緩むのを感じながら、ケルトは続けた。

「神々の中でも、力の大小の差が存在する。創造神は別格として、突出した力を持った神は『神将』と呼ばれた。――特に自然界の源である四大元素、火・水・風・地の力を統括する四人の神々の力は他の追随を許さず、『四神将』と呼ばれていたらしい」

神の話をするに当たって、決して外すことのできない存在がいる。彼の話を話すとすると、身が引き締まるのを感じた。

「火を統べるのは、火神将イグニウス。燃え盛る業火とは打って変わって、とても穏やかな気性の持ち主だ。だが、四神将の中の纏め役でもあるため、責任感はとても強い」

そして彼の話を話したならば、彼らのこともまた話すべきだろう。

「水を統べるのは、水神将アクアリア。四神将の中で唯一の女神だ。彼女はいつでも冷静で、客観的に物事を見ることを得意としている。風を統べるのは、風神将ゼファイル。風と同じく掴みどころのない性格をしている」

二人の神将のことを説明した後、ケルトはひと呼吸置いた。最後にもう一人説明すべき神が残っている。しかし、リーベにどう説明したものか。

「……地を統べるのは、地神将グラディオオン。植物を自在に操る力を持ち……人間以外の動植物の声も聞くことができる」

「わあ、すごいですね！」

リーベは瞳を光らせながら、ケルトの肩に止まっているシロの方をじっと見やった。

「動物の声が聞こえるってことは、シロとおしゃべりができるってことですよ！ いいなあ、わたしもシロとお話してみたい」

『僕もリーベとお話したいよー』

『わたしもリーベとお話してみたい！』

『あたしも！』

『僕も僕も！』

(煩い……)

シロがリーベに返事をする、それに呼応して木々達が自分も騒ぎ出す。

動植物は決して嘘はつかず、素直な気持ちに触れるのはいい。だが、こうも騒がれたら煩わしくなるというものだ。何事にも限度がある。

「ケルトさん、どうかしました？」

「いや……」

突然黙ってしまったせいか、リーベが不思議そうに首を傾げた。純粋な気持ちでシロと話したいと願う彼女の思いに、横槍をいれたくはない。

「……戻って焼き菓子をとってくる。待っていてくれ」

「あ、はい！」

リーベに踵を返し、屋敷へと足を伸ばした。キッチンへと戻り、リーベのために作った焼き菓子を箱の中へと詰めていく。

『今日の焼き菓子もキレイだね！』

「……ありがとう」

シロに作った焼き菓子をほめられて、指先で軽く体を撫でた。彼は草木たちと違い、遠慮なく叫び続けることがない、とても利口な鳥だ。恐らく片羽しかない故に、賢くならねば今まで生きていけなかったのだろう。現在の飼い主であるリーベと出会えたことは、シロにとって一番の幸福なことに違いない。良好な関係を築いている二人の様子を見ればすぐにわかる。

詰め終えた箱を持ち、キッチンを後にする。これを渡したら、リーベはまた微笑んでくれるだろうか。早くキラキラと輝く漆黒の瞳を見てみたい。

少し早足になりながらリーベの元へと戻り、裏口の扉を開けた。

「わあ！ 今日美味しそうです！」

思った通り、リーベは漆黒の瞳をキラキラ光らせながら、顔を綻ばせる。

「喜んでくれたなら、嬉しい」

「はい、ありがとうございます」

背が低い故に見上げる形になりながら笑顔を見せるリーベに、ケルトは常々思っていたことがある。(……頭を撫でてもいいだろうか)

リーベが笑みを見せてくれるとき、決まって彼女に触れてみたいという衝動が沸き起こる。今までそんな思いが沸き起こったことなどなくて戸惑っていたケルトは、いつもその衝動を押し込めていた。

それに、出会って日の浅い人間に触れられるのはいい気分ではないだろう。しかし今は、リーベと出会ってそれなりに日が過ぎた。頭を撫でるくらいなら、彼女も許してくれるだろうか。

徐に、リーベの方へと手を伸ばした。いつも向かう肩先ではなく、彼女の頭部へと。そして後少しで触れられるというところで、ケルトの視界にあるものが映る。

リーベの頭に置こうとした手が、真っ赤に染まっていた。この赤は何だと逡巡したのち、全身に悪寒が迸る。これは――血だ。

「ケ、ケルトさん……？」

気づけば伸ばしていた手を凝視していた。その手の平も甲も、どこも赤く染まってはいない。だが、そのことに安堵することはできなかった。

「だ、大丈夫ですか？ 顔色が悪いですよ……」

「……大丈夫だ」

箱を持ってあわあわと慌てるリーベ。これは決して体調不良ではないが、事実をそのまま彼女に言える勇気などなかった。

「……今日は、日を浴びすぎたのかもしれない」

「あ、今日も暑い日ですよ！ 庭師さんですから、外にいる時間が多くなってしまうんですね」

「……ああ」

若干の罪悪感を感じながらも、体調不良と誤解してくれたことを利用する。素直な彼女はきっとこれで信じてだろう。ずきりと痛む胸のことは、気にする必要はない。

「水分補給は大事ですよ！ わたしもよく先輩達に、夏は気をつけないとと言われますから！」

「……そうだな」

ケルトはリーベの頭へ伸ばす予定だった手を、彼女の肩先へと動かす。

最早手馴れたといわんばかりに、シロが腕を伝ってリーベの肩へと移動した。

『……ケルト大丈夫？』

「……」

シロにまで心配されてしまい、ケルトは軽く頷くに止める。決して体調が悪いわけではない。だが、気づいてしまった事実が、ケルトの全身に重くのしかかる。

(どうしてこの手で彼女に触れようなどと思ってしまったんだ、俺は……)

リーベに気づかれないよう、掌を握り締める。この汚れた手が、真っ白な笑顔を浮かべる彼女に触れていいわけがない。

思えば、リーベとケルトでは生きている世界が全く違う。心に響く唄を歌える彼女は、きっと周囲の人間からも愛されているだろう。どうして今まで気づかなかったのか。

(……もう、リーベとは会わない方がいいのかもしれない)

元々はシロが偶々庭に入り込んだことによる、偶然の邂逅。それがなければ、決して会うこともなかっただろう。ケルトがフォーリエストにやってきたのは、主の用事のためだ。用が済んだ時点で、フォーリエストに留まる理由はなくなってしまう。早かれ遅かれ、いずれこうして会うことが叶わなくなるならば、今のうちにそれを告げた方がいいかもしれない。

「ケルトさん……えっと、お大事にしてくださいね」

「ああ……」

「――また、次のお休みの日に来ますから！」

「――っ」

いつもと同じようにまたと告げる彼女に、二の句が繋げない。もうここへは来てはいけないと、リーベに告げなければならないのに。口がまるで鉛のように動かなくなる。

(……恐らくまだ時間は……ある)

主はなかなか目的を達成できないでいた。毎日とある場所に通っているようだが、中々相手が折れる様子がないらしい。迷惑がられているのは百も承知だが、こちらにも理由があるのだから引くわけにもいかないと、苦笑していた姿を思い出す。

主が目的を達成するためには、相手の了承を得られなければならない。だが、話を聞く限り無理を押し通そうとしているのは主の方なのだ。何の落ち度もない相手側に話を通すのは、とても難しいことだろう。

(……いつかは会えなくなるのなら……今だけでも)

先ほどとはうって変わってしまった考えに自嘲しながらも、ケルトはゆっくりと口を開いた。鉛のように動かなかったのが嘘のように、口が動く。

「ああ……待ってる」

ケルトは心配そうにこちらを振り返りながら来た道に戻るリーベを、姿が見えなくなるまで見守っていた。

ガタゴトと馬車が揺れる。さりとして大きくはない、数人が乗れる程度の籠の中には、二人の人間が座っていた。

ララリエは揺れる車内に身を委ねながら、眼前に座る青年の姿を見遣る。

格子から外の様子を見ている彼の真紅の眼差しは、目に見えて上機嫌だということがわかる。それなりに長い月日を共にしていることもあるが、一番の理由は漸く目的の一つを達成することができそうだからだろう。

「本当によかったですね、サフィラス（・・・・）様」

「そうだね、ララ。これであちらさんにも、これ以上の負担をかけなくて済むよ」

軽く肩を竦めながら、彼は苦笑を浮かべる。

「できれば出自を明かすことなく、どこかの貴族の御曹司で通したかったんだけどね……」

「……それは仕方がないでしょう。彼女はミュージアムの責任者です。口にしていた通り、一度でも例外を作ってしまうと、公平ではなくなってしまいますから……」

「ああ、それは私も理解してるよ。だから本当に彼女にはすまないことをしたと思ってる。だからこそ、こちらも結局は身分を明かすしかなかったのだからね」

今まで自分達は、カーテュアリーミュージアムのオーナー・ユナフィアに、神鳥と会わせてもらえないかと直談判を繰り返していた。そして今日に至るまで、その度に断られ続けていたのである。

一度例外を作ってしまうと、他の貴族は黙ってはいないだろう。彼女の言い分はもっともで、こちらとしても納得ができるもの。

しかしだからといって引くわけにはいかなかった。こちらは決して、彼女の唄が目的でこんな軽率なことをしているわけではない。確固とした理由が別にある。

貴族に対して例外を作ってしまうと、他の貴族が黙ってはいない。それならば、その貴族が黙っているような相手であれば、どうか。

「できることなら、今日のうちに会っておきたかったです……」

「それは仕方がないさ。彼女は丁度留守にできてしまっていたのだから。明日は確実に会うことができるから、それで十分だとも」

「……そうですね」

ララリエは、未だ会えない神鳥の姿を頭に思い描く。

流れる噂を聞いた限りでは、小柄な少女なのだそう。襟首までのまっすぐな黒髪と黒目を持ち、小さな唇から紡がれる声音は至高のもの。

「……噂通りの少女であれば、『彼女』に間違いないと思います」

「私もそう思う。まあ、かつての私（・・・・）も『彼女』のことは一度だけ見たきりだから、自信はないのだけどね」

「それを言ってしまうと、わたしも同じですよサフィラス様」

「あはは、確かに」

サフィラスは手を顎にあてながら、クスクスと笑う。たったそれだけの仕草だというのに優雅な気品に溢れているのは、幼い頃からそういった教育を受け続けた成果だろうか。

それとも――

「おっと、おしゃべりをしている間についたようだ」

気づけば馬車はピタリと停止し、身体を揺らさなくなった。

ラリエはサフィラスよりも先に馬車を降り、主が降りるのを待つ。彼が地面へ両足をついたのを確認してから、馬車の運転手にチップを握らせた。

「あれ、ケルトがいないな……」

サフィラスの言葉にラリエは門の外から中を伺うが、いつもならまっすぐこちらへやってくる赤茶色の髪をした弟分の姿が、そこにはない。

例え馬車が見えずとも、サフィラスの帰還を知る術を持つ彼が、出迎えにやってこないのは初めてのことだった。思わず首を横に傾ける。

「とりあえず、扉を開けますね」

「ああ、よろしく」

鍵を取り出し、扉を開く。鈍い音が響くが、やはりケルトが来る気配はなかった。

「ケルト……いったいどうしたのでしょうか」

「心配だね。様子を見に行こう」

「ええ」

ケルトはサフィラスを、兄のように慕っている。本人にそれを言ったら、大変恐れ多いと引け目に感じてしまうだろうから口にしたことはないが。そんなケルトだからこそ、サフィラスの出迎えを今まで欠かしたことはなく、彼自身に何か起きた可能性が高い。

ケルトは仕事を終えたら、基本的に外にいる。庭に植えてあるたくさんの木々や草花の話し相手をするために。本人は草木のことをとても煩いと言っているが、それならば外に出ずに屋敷の中へ籠っていればいいだけの話。それをしないということは、なんだかんだ言いながらも、楽しげに声をかけてくれる植物達に愛情を感じているからだろう。

感情が表情に出にくいため分かり辛いかもしれないが、ケルトはとても優しい心の持ち主だ。サフィラスもきっと同意してくれる。

「ケルト！」

探し始めてから、そう時間はかからずにケルトを発見した。テラスに備え付けられた椅子に背中を丸めながら腰掛けている。俯かれた顔から表情は見えない。

「……！ サフィラス、様……」

サフィラスがケルトの名前を呼ぶと、ケルトは徐に顔を上げた。若干血の気がなく、青白い顔が、サフィラスを見てさらに青ざめ、勢いよく椅子から立ち上がる。

「も、申し訳ありません……出迎えもせず……！」

「それはいいんだ、ケルト。でも一体どうしたんだい？ 少し顔色がよくないよ」

「それは……」

ケルトが言い辛そうに顔を歪める。確実になにか（・・・）があったのだろう。しかし、重そうな口を開いたケルトの言葉は以外なものだった。

「……恐らく、長時間外にいたために、体調を悪くしたのだと……」

「え？」

確かに今の季節は夏であり、日差しは日増しに強くなるばかりだ。長時間外で作業をしていたら、体調が悪くなるのもわかる。

だが、ケルトはほぼ毎日のように日差しの中にいるのだ。自己管理はできているはずであるし、今更だとしか思えない。

「原因は一先ず置いておいて……大丈夫なのかい？ 辛かったら、部屋で休んでいてくれて構わないよ」

「いえ……そこまでは……」

「――いえ、駄目よ。体調不良なら、しっかり休まないよ」

空いた間からして、ケルトは理由を隠したがつている。こんなことは初めてだった。それならば、無理やり聞き出すようなことはしない方がいいだろう。自室で一人、考える時間を持たせた方がいいかもしれない。

「後の仕事はわたしがするわ。だからケルトは部屋で休んでて」

「しかし――」

「ララの言うとおりでだよ、ケルト。部屋で休んでいた方がいい。君がいつも私のために頑張ってくれているのは知っているから、今日くらいゆっくりしてもかまわないさ」

サフィラスもララリエと同じことを思ったのだろう、同調してくれる。頑なな彼も、サフィラスの言葉には弱く、口元を歪ませた。

「……貴方が、そういうのであれば」

「うん。ゆっくり休んでいるといいよ」

ケルトは正直な子であるから、こうして頷かせてしまえば、部屋の中で大人しくしていてくれるだろう。その間に、じっくり考えて答えを見つけてほしいと思う。

「それでは……失礼いたします」

「ええ、お休みなさい、ケルト」

「あ、ケルト。ちょっと待って。報告したいことがあるんだ。いいかな」

「？ 報告……ですか？」

部屋に向かおうとしたケルトをサフィラスは一度呼び止めた。『彼女』の件で進展があったのだから、確かにケルトもそれを知っておくべきだろう。それに、報告は早い方がいい。

「今日、漸く事態が好転したんだ。明日、目的の彼女にやっと会えるよ」

「――！」

ケルトは琥珀色の双眸を驚愕に染める。その表情は、とても事態の好転を喜んでいるものではない。ララリエは思わず眉を顰めた。もしや、彼が何か思い悩んでいることと何か関係があるのだろうか。

「ケルト……？」

「す、すみません……目的を達成することができそうで、よかったです。それでは……失礼します」

サフィラスに軽く一礼をしてから、ケルトは屋敷の中へと入っていく。

「ケルト……本当にどうしてしまったのでしょうか」

「わからないな……こんなことは初めてだ。でも」

サフィラスは屋敷の方をまっすぐ見つめた。紅蓮の瞳に宿るのは、温かな光。

「いい兆候ではあるのだと思う。人に言えない悩みを持つなんて、普通の人間なら当たり前のことじゃないか。だから私達は急かさず焦らず、ケルトを見守っていこう」

「……そうですね」

サフィラスの元へと来たばかりのケルトの姿が脳裏によぎる。あのときの彼の琥珀色の瞳には何も映ってはいなかった。人間らしさからかけ離れたその瞳に、戦慄したのを今でも覚えている。

まだ表情に乏しいところはあるが、今ではケルトも大分人間味が増してきたと思っている。人に話すことのできない悩みと、彼はどう向き合うのか。これはきっとケルトをさらに成長させてくれるための一端を担ってくれるだろう。

「……それでは、わたしは夕食をお作りいたしますね」

「うん、頼んだ」

ララリエはキッチンへと赴く。テーブルの上に、ケルトが作ったであろう作り置きされた焼き菓子が目に留まり、思わず手を伸ばした。さくっとした食感と控えめな甘さが口の中に広がる。

「……こんな美味しい焼き菓子が作れる子なんだもの、大丈夫よね」

彼がサフィラスや自分達のために、美味しい焼き菓子を作ろうと努力していたのを知っている。試行錯誤を繰り返し、今では手放しで美味しいと褒められるレベルにまで成長した。

「……わたしもケルトに負けてられないわ」

袖をまくり、拳をぎゅっと握って気合いをいれた。

用意されていたグラスに手を伸ばし、こくこくとゆっくりと水を飲み干していく。窓を全開にして風通りをよくしているとはいえ、額から頬を伝い落ちる汗の量は多く、いかに室内であろうと、水分の補給は決して疎かにしてはいけない。

「今日の全体の練習はここまで。各自休息をとった後は個人レッスンに励んで。明日からは舞台での練習よ。本番まで気を抜かずにいきましょう」

「はい！」

ユナフィアの言葉に、リーベは先輩達と共に強く頷いた。

次の公演の時期が迫ってきている。グラスの水を全部飲み干したリーベは、空になったグラスを専用の場所へと置き、自分のタオルを手にして汗を拭う。今日は一段と暑く、部屋の中でもとても蒸し暑い。汗をかいているのはリーベだけではなく、同じ歌い手の先輩達もまた、タオルで顔を拭いたり、手で顔を扇いだりしていた。

(ケルトさん、大丈夫かなあ……)

リーベは昨日、調子の悪そうだったケルトのことを思い出す。彼は強い日差しの中、外にすぎたせいと言っていた。今日は昨日よりも日差しが強い。そんな中で仕事をしていたら、また彼は体調を悪くしてしまうのではないだろうか。

(うーん、心配だなあ……)

「リーベ、おーいリーベ」

「うわあ！」

いつの間にか、リーベの前にフォクノが立っていた。まるで風呂上りのように首からタオルを下げている。彼女もまた、暑さに参っているのだろう。

「やっと気づいたか。全く、暑いからってぼーっとしてんなよ。水、ちゃんと飲んだ？」

「う、うん……飲んだよ。あと、わたしに何か用？」

「おっと、そうだった。ユナフィアオーナーがさ、ここに残っていてくれって」

「ここって……練習場に？」

「だね。説明は後でしてくれるらしいから、そのとき聞いてくれ」

今日の全体練習は終わった。後は個人で心残りのある箇所を徹底的に練習する時間として設けられている。勿論一人でやる必要はなく、舞台上で共に合唱をする者同士で合わせるのもよし、もしくは音程がしっかりととれているか、お互い確認し合うもよしだ。

バラバラと、練習場にいた歌い手達が散らばっていく。フォクノを含めた裏方の者達も、他の雑事をこなすべく奔走する。暫くたつと、リーベとユナフィアだけがポツリと練習場に残された。

「悪いわね、リーベ。休憩中だというのに」

「い、いえ……。それより、ご用件は何でしょうか」

こうしてユナフィアに呼び出されるのは、以前メリージアと神鳥を賭けた勝負をすると決まったとき以来だろうか。今回はユナフィアに呼び出される用件について、全く心当たりがない。

次の舞台への練習は、自分でも順調だと思っている。最近はずんだ拍子に備品を壊すという粗相もしてはいない。

不思議そうに首を傾げるリーベに、ユナフィアは何とも気まずげな顔をした。

「実はね……あなたに是非会いたいというお客様が、いらっしゃっているの」

「え……？」

思ってもいない言葉に、リーベは言葉が生まれなかった。わざわざ会いたいとは一体どういうことなのか。リーベに是非会いたいと思わせる要素など、一体どこにあるというのか。

「前回の公演で、あなたの評判が広く伝わったらしいの。そんな貴女に一度でいいから会ってみたいところ最近しつ……熱心に頼まれてしまって」

初めは断っていたらしいが、ついに断れないところまで来てしまったのだという。そしてたった一度だけ、二度は決してないという念書を書いた上で許可をしてしまったと。

「そ、そそその方っても、もしかして……き、貴族の方ではない……ですよね？」

「……残念ながら、その貴族の方よ」

「……！」

ボン！ とリーベの頭が爆発した。一般の人ならともかく、貴族と会った経験などリーベにはない。そんなリーベが貴族と会ったら、緊張で身体はがちがちになり、ろくなことも話せず、確実に相手をはっきりさせてしまう。神鳥の評判はそのままミュージアムの評判だ。その失態が原因でカーテュアリーミュージアムに悪い噂が流れてしまったら――

「落ち着きなさい、リーベ。お客様には、このことは決して口外しないと約束していただいているから。それにあちらさんにも、リーベが緊張して取り乱すだろうということは前もって伝えてあるわ。だからあなたの行動のせいでミュージアムの評判が下がる、なんてことにはならないから、安心して」

「オーナー……」

諭すようになだめられ、リーベは少し落ち着きを取り戻す。

「それと、わたしも同伴するから。流石に一人で会えとは言わないわ」

「……！ そ、それなら、なんとか……」

ユナフィアが傍についてくれるなら、それだけで十分安心できる。彼女はとても頼りになる女性だ。「お客様は応接室にお待たせしているわ。早めに済ましてしましましょう。あちらさんも、貴女の練習時間を削ることは本意ではないとおっしゃっていたから」

「そ、そうですね……！」

休憩が終わり次第、個人練習が始まる。普段の練習を怠っているわけではないが、できる限り練習時間は削りたくはない。公演までの日にちは確実に迫っており、時間は限られている。大変なことは、さっさと済ませてしまうべきだろう。

リーベはユナフィアに連れられて、応接室へと赴く。基本、ミュージアムを訪ねる客の相手はユナフィアが勤めるため、歌い手であるリーベが応接室を利用することはまずない。

コンコンと応接室の扉をユナフィアがノックをし、部屋の中からどうぞと女性の促す声が聞こえてきた。リーベはドキドキと高鳴る心臓を少しでも押さえるべく、胸に手を当てる。

「失礼します。我がミュージアムが誇る神鳥、リーベをお連れしました」

「し、失礼します！」

扉を開け、優雅に一礼するユナフィアに続き、リーベもペコリと頭を下げながら声をあげる。明らかに緊張で強張った声であったが、そこを気にする余裕はリーベにはない。

「君がリーベさんか。会いたかったよ」

「……！」

ソファから立ち上がり、入室したリーベを待っていたのは、柔らかな笑みを浮かべる美しい青年だった。まず目がいくのが、男性にしては少し長めの鮮やかな真紅の髪。まるで燃え盛る炎に包まれているかのようだ。そしてそんな真紅の髪の下にある肌は、女性であるリーベが羨ましくなるほど白く肌理細かい。細められた瞳を縁取る睫毛も長く、『美しい』としか言い様がない完璧な美青年だった。リーベは思わずポカリと口を開いたまま、固まってしまう。

「初めまして。私の名前はイグニマス・サフィラ。そして彼女は侍女のララリエ・シルバー。あなたに会えて嬉しく思うよ、リーベさん」

彼の後ろには珍しい青色の髪をした女性が控えていた。先ほど返事をしたのは彼女だろう。

しかしリーベに彼女にまで気を回す余裕はなく、また別のことが気になって思わず口に出したのは、
「イ、イグニマス……様？」

彼の名前だった。聞き覚えのある名前に、リーベは思わず目を瞬かせる。イグニマスとは、火神将と呼ばれる偉大な神の名前ではなかっただろうか。昨日ケルトから聞いたばかりであるから、覚え違いはないだろう。

「？　どうかしたかい？」

「！　す、すみません……そ、その……イ、イグニマス様のお名前って……神様から拝借されたのになって……」

彼の名前が気になってしまったせいで、彼のことをじろじろと見つめてしまったのだろう。しどろもどろになりながらも、慌ててリーベは謝罪する。

「――ああ、そうだよ。私の名前は火神将・イグニマスからとったものなんだ。神話に詳しいだなんて博識だね。ここ近年、神話なんて知らない人の方が大半を占めているというのに」

「え、あ、あの……その……」

リーベがその名前を知っていたのは、ケルトから聞いたばかりだからだ。それよりも前にイグニマスの名前を聞いたとしても、何とも思わなかっただろう。

「その、わたし……昨日……えっと、知り合いの人から神話について聞いたばかりで……。わ、わたしが詳しいわけじゃなくて……その……」

何と説明すればいいのか、不安と混乱で頭の中がごちゃごちゃなことになってしまい、上手く言葉が纏まらない。

「そうか、君のご友人が博識な方なんだね」

「そ、そう……ですね……」

イグニマスの言葉に、リーベはどこか腑に落ちない違和感を覚えた。どうもケルトに対して『友達』だという感覚がない。かといって、他にいい言葉も思いつかない。

(わたしとケルトさんって、人から見たらどういう関係なんだろう……)

ふと、そんなことが気になった。今まで一度も気にしたことなどなかったというのに。

(端から見たら、わたしケルトさんにお菓子をねだってるように見えちゃうのかな……ああでも、ケルトさんのお菓子美味しいからそう思われちゃっても仕方ないよね……)

一応菓子は歌を歌った対価として貰っているのではあるが、第三者から見たら、菓子を貰いにケルトのところへ赴いているように見えるだろう。

卑しく見えてしまうのは嫌だが、かといって菓子も目当てであることに否定はできないため、反論もできない。

「――うん、こうして会うことができて本当によかった。ありがとうございます、ユナフィア殿」

「――いえ」

リーベの隣に控えていたユナフィアが、短い言葉と同時に軽く頭を下げる。

「リーベさんの大事な休憩時間をこれ以上削ってしまうのは忍びないので、約束通り、そろそろ失礼させてもらうよ」

「え？ あ、え？」

しごく、あっさりとした様子でそう切り出したイグニアスに、リーベは思わずあっけにとられた。

わずかに言葉を交えたただけだというのに、彼は満足したのだろうか。それともリーベが想像以上にちっぽけな存在すぎて、もういいと判断されてしまったのか。

「無理を言ってしまうで大変申し訳なかった。でも、ありがとう。おかげで目的を達成することができた」
「……いえ、満足いただけたのならそれで十分です」

しかしイグニアスの浮かべる穏やかな笑みから、不満げな様子は微塵も感じない。思わず彼をまじまじと見つめていると、真紅の瞳と視線ががちあう。すると彼はリーベに向かってニコリと微笑んだ。

「ああ、最後に一つだけいいかな？」

「は、はい！」

ピシリと背筋が伸びる。一体何を聞かれるのだろうか、緊張が全身に走った。

「リーベさん、君は自分が今、幸せだと思うかい？」

「え？」

全く予想もつかないことを聞かれ、リーベは目を丸くする。

困惑しながらイグニアスを見上げるが、優しげな瞳は返事を待っているかのようにこちらを見おろしていた。

(わたしが今幸せかってこと……？ えっと……)

慌てて頭の中で自分の置かれている環境を整理してみた。何だかんだ言いつつも面倒見のいい親友のフォクノがいて、からかわれつつも可愛がってくれる歌い手の先輩達にいつも気にかけてくれる団員の人たち。そして幼い頃から夢見ていた舞台。――考えるまでもなかった。

「はい、わたしは幸せです。ずっと憧れだった舞台上で歌うことができ、ミュージアムの人たちにはよくしてもらって。とても幸せです」

思えばリーベは、様々なことに怯えることはあっても、自分が不幸だと思ったことは一度もない。両親がいないことも孤児院では当たり前のことであつたし、フォクノを筆頭に孤児院の仲間や面倒を見てくれる先生達がいたおかげで、寂しいと思うことはなかった。

「――そうか。それはよかった」

リーベの答えに満足したのか、イグニアスは微笑を浮かべた。整った容姿も相俟って、まるで一枚の絵画のようだと頭の隅で思う。

「それでは行こうか、ララリエ」

「はい」

イグニアスはそれを最後に、今度こそ応接室を後にする。リーベとユニフィアだけがその場に残された。

「……歌が目的ではないと言ったのは本当のようだったけれど……一体何がしたかったのかしら」

「そ、そうですね」

あの会話の中に、何か重要なことがあったとは思えない。疑問符を浮かべるばかりだ。

「でも、何事もなく終わらせることができ何よりだわ。ありがとう、リーベ。もう戻ってくれて構わないわ。休憩時間中に悪かったわね」

「い、いえ！」

イグニラスと交わした言葉は本当に少ない。故に時間もそこまで経ってはいない。

リーベはどこか腑に落ちなさを感じながらも、ユナフィアに一礼した後応接室を後にした。

小柄な身体。襟首で切りそろえられた黒髪。質素なベージュのワンピース。そこだけを見れば、彼女はどこにでもいるような、ごく普通の少女だった。だが、髪と同じ色をした丸い瞳を見たとき、確信する。

「やはり彼女でしたね、サフィラス様」

「ああ、そうだね」

ララリエの言葉に、サフィラスは頷いた。彼女も同じく、サフィラスと同じものを感じ取ったのだろう。あの短い会話だけでも十分なほどに。

「頼み込んだ甲斐があって本当によかった。できれば歌も聞いてみたかったと思うけど、存在を確認できただけで十分な収穫だったよ」

「ええ——記憶はないようですが」

「——そうだね」

彼女にかつての記憶がないことは、イグニラスという名前に対する反応でわかった。初めはもしやと思ったが、つい最近そのことを知ったばかりと言ったリーベの言葉に、嘘偽りはないだろう。

「それにもし記憶を保持していたのなら——彼女は『神鳥』として舞台に立ってはいなかったかもしれない」

「——そうですね。もしそうだったら、こうして彼女の存在を確認することもできなかったかもしれませんね」

かつての記憶があったならば、彼女は現代に伝わっている神鳥のことをどう思うだろうか。本当の役割は知られず、ただ、名前だけが広まっている現代。

「でも、彼女はとても楽しくやっているようで安心しました。オーナーさんも彼女を深く理解しているようでしたし、きっと可愛がられているのでしょうね」

「ああ、それは私も思った。迫害や差別を受けていないようで何よりだよ。——やはり、生まれ育った場所で暮らすのが一番いいと思うからね」

最後に投げた、今幸せかという問いかけ。もしも彼女が人間的ではない、不当な扱いを受けていたのなら、自身が持つ権限を持って彼女を保護しようと思っていた。しかし幸せですと言ったリーベの表情は明るく、心からの言葉だとわかる。近くにユナフィアがいたから遠慮していたのではない。これならば、彼女を連れ出す必要はないだろう。リーベは、彼女自身が望んであの場所にいるのだから。

「さて、フォーリエストへ来た目的の一つは達成したわけだけど……彼の方はどうなったかな」

「昨日、もうすぐ探りを入れられるところまで来たと言っておりましたから、こちらも近いうちに解決すると思われます」

「そうか。それなら、次の公演を何の煩いもなく見ることができそうだね」

サフィラス達とは別のことを追っているもう一人の仲間の姿を頭に描く。きっと彼ならば上手くやってくれるだろう。

馬の嘶きが聞こえてきた。ララリエが手配した馬車が到着したのを知らせるもの。ララリエと共に停止している馬車の元へ向かい、籠の中へと乗り込んだ。

(よし、準備完了……！)

焼き菓子を入れてもらっている箱を抱えながら、リーベはケルトの元へと向かうべく、部屋から出た。もちろん、シロも一緒に。

今日は公演が始まる前の、最後の休日である。明日から二日間最終調整を行い、そして三日後初日を迎えるのだ。

歌手にとって、公演前の最後の息抜きとなっている。が、フォクノのような裏方を務める者達にとっては、むしろここからが忙しくなるようで、今日も朝早くから起きて仕事に向かっていた。

一応フォクノはリーベが今日休みであることを知っているため、リーベがケルトの所へ行くということも把握している。忙しそうな彼女に申し訳なさが募るものの、今日を逃せば暫くケルトに会えないこともあり、リーベはいそいそと支度を整えた。

部屋を出れば、同じ歌手の先輩同士が、談笑している姿をちらほら見かける。会釈をすれば、彼らもまたリーベに軽く手を振ってくれた。歌手の先輩達にからかわれることは多々あれど、普段は気のいい人たちである。

廊下を移動して玄関口までやってくると、突然大人しかったシロがピピピと騒いだ。

「シロ？ どうしー」

「あら。誰かと思えばリーベさんじゃありませんの」

リーベの言葉を遮った冷やかな声に、リーベはピシリと身体が固まるのを感じた。

少し離れた先にいるのは、豪華な銀糸の巻き毛と黄金の瞳を持つ華美な美しい女性。メリージアだ。全身に緊張が走ったのがわかる。

「メ、メリージアさん……こ、こんにちは……」

「挨拶は結構。そこをどいてくださる？ 通行の邪魔よ」

「は、はい！ すいません！」

リーベはすぐさま隅へと寄った。玄関先の廊下は広く、リーベが隅に寄らずともメリージアの通行の妨げになどならない、という事実はリーベの頭からスッポリと抜けている。一人でメリージアと会話をする勇氣など、リーベにはなかった。

メリージアに頭を下げていると次第に足音が小さくなり、メリージアがリーベの前を通り過ぎたのだとわかった。ふうと小さく安堵した後、そそくさと外へと向かう。

(な、何も言われなくてよかったあ……！)

彼女と対面する際は、いつも何かとあれがなってない、これがなってないという指摘される。そしてそれは正しくその通りなため、リーベはごめんなさいと謝るしかできない。今日もまた粗を指摘されたらどうしようと思ったが、何も言われなかった。ケルトの所に行く前に何か言われてしまったら、激しく気落ちした状態で会うことになってしまっただろう。

――ピィ？

シロが小さな首を傾げながら、リーベを見上げている。大丈夫かと聞いているのかもしれない。リーベはシロの身体をそっと撫でながら軽く笑った。今日はただ擦れ違っただけだ。だから大丈夫。

(やっぱり本番で転ばないようにしないと、認めてくれないよね……)

メリージアは家で練習をしているらしく、普段顔を合わせるといことはない。そこに少し安心しているところもあるが、そうやって怖がってばかりいては、彼女に認めてもらうことは不可能だろう。明日か

らの舞台の調整はメリージアも参加する。つまり、残りの二日間が鍵となるのだ。

(……うん、がんばらなくっちゃ……ってわあ！)

ぐっと拳を握ると、持っていた箱を危うく落としそうになり、慌てて抱えなおした。これはただ高価なものという理由だけでなく、リーベとケルトを繋いでくれている大事な箱なのだ。落として割ってしまうようなことは、絶対あってはならない。

——ピィ。

「だ、大丈夫だよ、シロ。ケルトさんの所、いこっか」

気を取り直し、リーベはケルトのいる貴族街を目指す。

既に行き慣れた道を通る足取りは軽い。ケルトに会えると思うと、自然と身体が軽くなる。しかしその理由は未だにわからないままだ。悪いことではないと思うため、今では特に気にしていない。

注がれる日差しに、頬から汗が伝い落ちる。肩で時折拭いながら進んでいくと、貴族街が見えてきた。そこさえたどり着いてしまえば、後はもうすぐである。

「ついた……！」

いつもの一角へ到着すると、手馴れたようにシロがリーベの肩から飛び降りた。

「お願いね、シロ」

——ピィ！

任せろ、とでも言ったのか、とても頼もしい返事が返ってくる。リーベは箱を抱える腕に力を込め、ドキドキと心臓を高鳴らせながらケルトが来るのを待った。

(あ、あれ……?)

シロが庭へ入ってから、数分が経過した。いつもなら、すぐに姿を現してくれるのに、一向にきてくれる気配がない。

(お、お留守なのかな……)

先ほどとは別の意味でばくばくと心臓が鳴り響く。何か特別な用事でもできてしまったのだろうか。それなら仕方がないと思うが、もしも以前の体調不良が原因で部屋の中にいるとしたら——

(ど、どうしようどうしよう！)

体調が悪いのに来てしまったのだとしたら、大変申し訳がない。落ち着きなく近くをうろうろしていると、ガサリと音がなった。

「あ……！」

ケルトだ。普段通り、シロを肩に乗せている。しかし、今日はいつもとは全く違うことが起きていた。

「おや、リーベさんだったのか。いらっしゃい」

「え……イ、イグニアス様……!?!」

ケルトと共にいたのは、シロだけではなかった。

男性にしては少し長めの紅蓮の髪と瞳を持った美青年は、ほんの数日前に会ったばかりでなくとも、一度見たら忘れられないだろう。ケルトの隣に立つ美しい美青年は、間違いなく以前リーベに会いに来たイグニアス本人だった。

「ケルトに会いに来てくれたというお客さんが君だとは思わなかったよ。今鍵を開けるから、こちらにあがっておいで」

「え……え？」

ガチャリとケルトが無言で扉を開いた。今までリーベは庭に入ったことは一度もなく、ただ困惑した。勝手に庭の中へ入ってしまえば不法侵入であるし、それにケルトと会えるのであれば、場所はどこであろうとも構わなかったため気にしたこともなく。

「……入るといい。主が許可したから、問題ない」

「え……！　じゃ、じゃあケルトさんのご主人様って……！」

「そう、私だよ」

「……！」

こんなことであるのだろうか。しかし、火神将からとった名前を持つ人物が主であるならば、ケルトが神話に詳しい理由にも納得がいく。まさか、イグニアスがケルトの主だとは思わなかったが。

「……」

ケルトがリーベの肩に手を伸ばした。そこからシロが、リーベの肩に向かって移動してくる。思わずケルトを見上げると、彼は固い表情をしながら、ずっとリーベから視線を逸らした。

「ケルトさん……？」

ケルトの様子がいっつもとおかしい。彼はいつもまっすぐリーベの瞳を見してくれるのに、彼の方から逸らしてくるなんて。

「あの……今日も体調がよくないんじゃないか……」

「いや……大丈夫だ」

もしやと思い、体調不良ではないかと訊ねたが、返ってきたのは否定の言葉。そして、リーベが扉を通ったのを確認した後、扉を閉めて先に庭の中へと戻って行ってしまふ。

「リーベさん、おいで」

「は、はい……！」

イグニアスに手招きされ、ガチゴチと身体が強張るのを感じた。あのときはユナフィアが傍にいてくれたのと、短時間だったのとで、そこまで大変だったとは思わなかった。むしろすぐに済んでほっとした気持ち強い。

だが、こうして招かれてしまった以上、無碍にすることなどできないだろう。イグニアスは貴族だ。彼の機嫌を損ねないよう、言動には気をつけなければならない。

(う、うあああう……)

心の中で呻きながら、リーベは恐る恐るイグニアスの後を追った。

庭の様子を見る余裕もなくたどり着いた場所は、華美ではないもののしっかりと手が込んだ作りだとわかる木製のテーブルと椅子が並べられたテラスだった。

そこにはケルトともう一人、鮮やかな青色の長い髪をシニヨンにした女性がティーポットに茶を注いでいる姿がある。彼女はこちらに気づくと、董色の瞳をにこりと細めた。

「いらっしゃい」

「こ、こんにちは……！」

よくよく見れば、彼女はあのときイグニアスと共にいた女性だった。確か名前はララリエだっただろうか。

あの日は彼女のことを注視する余裕などなかったが、ララリエもまたイグニアスに引けをとらない、美しい女性だった。白い肌に、形のいい朱唇。董色を縁取る長い睫。均整のとれたプロポーション。同性であるリーベでも、惚れ惚れとする美しさだ。

再び緊張で心臓がドキドキバクバクと音を立てる。慣れ親しんだケルトだけならともかく、こんな綺麗な人を相手どるなど、リーベには無理だ。

(か、かかかか、帰りたい……！)

普段通り、ケルトの元へ来たただけだというのに、どうしてこうなってしまったのか。だが、ララリエに椅子を引いてどうぞと笑顔で言われてしまったら、首を横に振るなんてできるはずがなく。

「し、失礼、します……」

まるで錆び付いた金属製の扉のように、ギギギと音を立てそうな動きでリーベはテーブルに近づいた。そのとき、テーブルの上に広げられているものに目が釘付けになる。

「うわぁ……焼き菓子がいっぱい……！」

お洒落な大皿が三枚ほど置かれ、その上には様々な種類の焼き菓子が置かれていた。ドライフルーツが混ざっているもの、チョコのマーブル状のものが、甘い香りを漂わせている。

「リーベさんは甘いものは好き？」

「は、はい！」

「ならよかった。これ、全部ケルトが作ったのよ」

「わあ、じゃあ絶対美味しいですね……！」

「ああ、そうだね。私もケルトの作ってくれる焼き菓子はとても美味しくて大好きなんだ」

「……！」

いつの間にか椅子に座っていたイグニアスが、微笑みながらリーベを見ていた。焼き菓子を見て舞い上がっていたところを、鈍器で腹を殴られたような衝撃を受ける。

(うわあああああああ！ 焼き菓子に気をとられてる場合じゃないよおおおう！)

心の中で絶叫をあげていると、リーベの前にコトリと紅茶の入ったティーカップが置かれた。ハーブの香りが鼻腔をくすぐる。

「どうぞ。召し上がって、リーベさん」

ララリエの美しい微笑みに完全に引けなくなったリーベは、いただきますと小さな声で呟いてから椅子に座り、持っていた箱をテーブルの上へと置いた。ティーカップに恐る恐る口付ける。

「！ 美味しいです……！」

さっぱりとした口当たりは、リーベの苦手なほろ苦さを感じない。そして心がどこか落ち着くような、ほっとする味わいだ。

「ララはお茶を淹れるのが上手いからね。焼き菓子も好きなものを食べていいよ」

「い、いいんですか!?!」

「もちろん。そのために君を招待したんだからね」

イグニアスもまた、カップに口をつけた。その動作すら優雅で眩暈がしそうである。綺麗すぎる人は、あまり目によろしくない。

「どうぞ、リーベさん」

ララリエに焼き菓子を差し出され、リーベはおずおずと手を出した。同性である分、まだ彼女の方が落ち着いていられる。

「美味しい……！」

さくさくとした食感もさながら、甘い香りとも味わいが口いっぱいに広がっていく。やはりケルトの作る焼き菓子はとても美味しい。

気づけばパクパクと手当たりしだい、焼き菓子を口の中に放り込んでいた。昼食は食べてきたのだが、これが所謂『別腹』というものなのだろう。

カップに残っていた紅茶を飲み干して一息ついた後、はっと我に返った。ここにいるのはリーベだけではなく、貴族であるイグニアスも同席しているというのに、夢中で焼き菓子を食べってしまった。さあっと体中から血の気が引いていくのを感じた。

「す、すいません！ わ、わたしばかりたくさん食べてしまって――痛っ！」

慌てて頭を下げたものだから、ゴチンと額をテーブルにぶつけてしまう。じんじんとした痛みが額から

発せられ、リーベは口元を歪めながら両手で額を押さえた。

「だ、大丈夫!？」

「い、痛いけどだ、大丈夫、です……！」

ララリエが心配そうに顔を覗かせると、彼女はハンカチを取り出し、近くにあった水桶にハンカチを浸して水を絞る。そしてそれをリーベの額へと当ててくれた。ひんやりとしてとても気持ちがいい。

「お、お手数おかけして、す、すいません……」

「気にしなくていいのよ。紅茶のおかわりいるかしら？」

「え、えと……い、いただきます」

優しげにふわりと笑みを見せてくれるララリエに、リーベは思わず見惚れる。粗相をしたリーベを叱責するでなく、優しい言葉をかけてくれるなんて、まるで孤児院の先生のような。ケルトもそうだが、貴族に仕える人は心優しいのだろうか。

「少し待っていてね」

「は、はい！」

ララリエがティーポットを手に取り、リーベのカップに紅茶を注いでくれる。

「それにしても、二人はどうして知り合ったんだい？ 教えてほしいな」

「え、えっとですね……」

イグニアスに再び声を掛けられて、リーベはビクリと身体を震わせた。彼に対してはどうにも慣れる気がしない。

たどたとしくなりながらも、リーベはケルトと出会った経緯を説明した。偶々観光目的で貴族街にやってきたとき、友人とはぐれ、飼い鳥であるシロが突然リーベから離れてしまい、ケルトのいるこの屋敷の庭に入って行ってしまったことを。

「なるほど、つまりシロ君が道に迷ってしまったリーベさんを助けるために、ケルトと出会わせてくれたんだね」

「そ、そうですね……」

リーベの言葉を簡単に纏めるとそうなるだろう。リーベは肩に乗っているシロを見やった。シロはそれを見越してケルトのいる庭へと入っていったのだろうか。シロはシロで不思議そうに首を傾げながらリーベを見上げている。

「……いえ、シロは庭が気に入ったから入ってきたようです」

今まで会話に混じっていなかったケルトが口を開いた。そしてその言葉に同調するかのように、シロがピィと鳴く。片羽を広げてぴょんとテーブルの上へと飛び乗った。

「シ、シロ！」

「そうか、この庭が気に入ってくれたんだね。やっぱりケルトに庭の手入れを任せて正解だったな」

イグニアスがシロに手を伸ばすと、シロは触れられる寸前でくるりと方向転換し、リーベのところへと戻ってくる。

「おや、残念。ふられてしまったか」

「す、すいません……！ シ、シロは基本的に人見知りで……！」

「そうか。それは仕方がないね」

イグニアスは特に気に留めていないといった笑顔を見せているが、リーベは背中から冷や汗がだらだらと流れているのを感じた。

先ほどから、彼に対して失礼なことを連続でしているように思う。いつ怒りを買ってしまったもおかしくはない。

「ケルト、そこに立っていないで君も座ったらどうだい？ ララの淹れたお茶が冷めてしまうよ」

「いえ、俺は……」

気づけばイグニアスの視線はリーベから外れ、椅子に座ることなくイグニアスの後ろの方へ待機していたケルトの方を向いていた。そこで漸く、リーベはずっと彼が立ちっぱなしであったことに気づく。自分のことでいっぱいいっぱい、ケルトのことを気にかける余裕がなかった自分を叱咤したい気分だ。

「偶にはこうしてのんびりお茶を飲むのもいいものだよ。ケルトにものんびりしてもらいたいんだ」

「……はい」

ケルトもまたリーベと同じように、イグニアスと同席することに対して気が引けているのだろうか。諭されて徐に椅子を引いたケルトの琥珀色の瞳と、目があう。

(あ……)

しかしまた、ケルトの方からふいと視線を逸らされてしまった。ズキリと心臓にトゲが刺さったような感覚がおこる。どうしていつもみたいに、まっすぐ見てくれないのだろう。何か彼の気を悪くするようなことを、してしまっただろうか。

――ピィ。

テーブルの上に載ったままだったシロが、じっとリーベを見つめていた。どうかしたのだろうかとリーベは首を傾げたが、すぐに肩に移動したいのだと理解し、腕をシロに近づける。シロはリーベの腕を伝って肩へと戻った。

その後も、気まずいお茶会は続いた。イグニアスに話しかけられる度にどもりながらも、何とか返事ができていたように思う。が、記憶がどうも曖昧で頭に残らない。時折ケルトの方を見やるが、彼はこちらを見てくれることはなかった。そのせいでどんどん心が塞いでいくのを感じてしまう。

「リーベさん、大丈夫？ 顔色が優れないようだけれど……」

「す、すみません……」

重くなっている心が、表情に出てきてしまったのだろう、ララリエが心配そうに顔を覗き込んでくる。こんなとき、感情を上手くコントロールできない自分が嫌になった。一度悪い方向へ考えてしまうと止まらなくなってしまうのは、リーベの悪い癖だ。

「少し青いね……ララ、冷水を」

「えと……その、そこまでは――」

「――それなら俺が行ってきます」

イグニアスにまで心配をかけてしまい、リーベは首を横に振って断ろうとするが、それを遮ってケルトが立ち上がる。イグニアスに軽く頭を下げてから、屋敷の中へと入って行ってしまった。

「リーベさん、これを額に当てるといいわ」

「……すみません」

冷水をとりに行ってしまったケルトの変わりに、ララリエが水を絞ったハンカチを再び貸してくれた。彼女の優しさが、今度ばかりは胸が痛い。リーベは決して体調が悪いというわけではないのだ。しかし、顔色が悪い理由を上手く説明できるとも思えず、おずおずとハンカチを受け取って額に当てる。夏の暑さに、水気のある布はやはりとても気持ちがいい。

「……戻りました」

ケルトが戻ってくると、リーベの前に水が注がれたグラスが置かれる。

「ありがとうございます」

「……いや」

ケルトに礼を言うと、やはり彼はリーベに視線を合わせることなく、自分の席の方へ戻ってしまった。

思えば、今日はイグニアスやララリエとばかり話していて、ケルトとは全く会話をしていない。確かにケルトは口数は少ないが、リーベが話しかければ、それなりに言葉を交わしてくれていた。なのに今日のケルトは、必要最低限のみの言の葉しか紡いでくれていない。

(わたしと話すの……嫌になっちゃったのかな……)

後ろ向きな思いが、胸中をぐるぐると支配し続ける。ケルトが用意してくれた水にも、手を伸ばす気がおきなかった。

「……すまないね、体調が悪かったのに長居させてしまったようだ」

「い、いえ……そんなことは……」

顔色が悪いのは、決して体調不良からくるものではない。しかし本当のことを言う勇気などリーベにはなく、心配してくれるイグニアスに対してぶんぶんと首を横にふった。

「お、お水いただきますね……」

これ以上の心配をかけるわけにはいかず、リーベはグラスを手にとり唇をつけた。喉を通る水はひんやりと冷たく、美味しい。目線を合わせてくれなくても、ケルトの優しさを感じて胸が熱くなった。

「ケルト、リーベさんをミュージアムまで送ってくれないか」

「！」

イグニアスの言葉に、思わず息が詰まりそうになる。

「だ、大丈夫です！ ひ、一人で帰られますから、そ、そこまでしていただくなくても……！」

ケルトと一緒にいられる時間が増えるのは嬉しいことではあるが、彼にこれ以上迷惑をかけることをしたくはない。

(嫌われたくないよ……)

ケルトに嫌われたくない。嫌われるのが怖い。だから今も、ケルトがどんな表情をしているのかが怖くて、リーベは俯くことしかできなかった。

「そういうわけにはいかないよ、リーベさん。もし道中倒れでもしたら大変だ。大事な公演を控えているのだから、身体を大事にするべきだよ」

「サ……イグニアス様の言う通りよ、リーベさん。ケルトに送ってもらいなさい」

「う……はい」

本気で心配してくれている二人に、リーベは二の句を紡ぐことができない。上手い理由など咄嗟に思いつけるほど器用でもないため、頷く以外に道はなかった。

「お、お願いします……ケルトさん」

「……了解した」

おずおずと顔をあげれば、ケルトは既にリーベに背を向けており、裏口の方へ向かっていた。リーベは慌てて立ち上がり、逡巡した後、テーブルに置いた箱を抱きしめる。そしてイグニアスとララリエに深々と頭を下げた。

「お大事にね、リーベさん。公演、楽しみしているから」

「あ、ありがとうございます……！」

最後にもう一度深くお辞儀をした後、リーベは踵を返して裏口の方へと向かった。ケルトを待たせてしまうわけにはいかない。

裏口へたどり着くと、既に開かれた扉の外側にケルトは立っていた。リーベは小走りになりながら扉を抜け、ケルトにも深く頭を下げる。

「お、お願いします……！」

「……ああ」

返ってきたのは、やはり短い返事だった。気まずい沈黙が流れ、身体がむずがゆさを訴えてくる。

(ど、どうしよう……！)

今までケルトと二人でいることを、気まずいなどと思ったことは初めて会ったとき以外になかったのに。何をしゃべっていいか全くわからなかった。これまでずっと、ケルトとはどんな話しをしていたのかもよく思い出せない。

ケルトは扉を閉めると無言で歩き出し、リーベもまた何も言えずにそれに続く。何か話しかけようと思っても、口はもごもごするばかりで、言葉は生まれなかった。

気づけば貴族街の出入り口まで来てしまっていた。この調子で歩き続けたら、終始無言でミュージアムまでついてしまうかもしれない。せっかくケルトに会いにきたのに、ろくに話しもしないまま帰ることになってしまう。

(それに、次もまた来ますって言ってない……)

帰り際の挨拶の恒例となった言葉を、まだリーベは紡げていない。それに、気まずいまま帰ってしまうことになるのも嫌だ。

「あ、あの……ケルトさん」

リーベは自身の持てる勇気を振り絞り、ケルトに話しかけた。それに応えてくれたかのように、ケルトの足がピタリと止まる。

「あ、あの、つ、次のお休みに、ま、また来てもいいですか……？」

尻つぼみになりながらも、何とか口に出来たことに心の中で安堵する。公演が始まってしまうため、次の休みは公演後となるだろう。少し間が空いてしまうことになるが、気持ちを切り替えるにはむしろそのくらい空いている方がいいかもしれない。

「……」

リーベは押し黙りながら、ケルトの言葉を待った。流石に顔を見る勇気まではない。このときばかりは、小柄な己の背丈に感謝した。軽く俯くだけで、ケルトの表情を見ずに済む。

「……次は、もうない」

「え……？」

ケルトから発せられた言葉に、リーベは身体が岩のように硬くなるのを感じた。思わず顔をあげる。

「ど、どうしてですか!？」

「……主が目的を達成したからだ。公演を見終わったら、フォーリエストに滞在する理由がなくなる」

「……！」

今更のように、この貴族街はフォーリエストで休養をとるための別荘地だったことを思い出す。フォーリエストに定住している貴族など、一握りであろう。

ケルトの口ぶりからして、イグニアスもまたその例に漏れない。目的を達成してしまったのなら滞在し続ける理由はなく、元々定住していた場所へと帰るだけだ。

(も、もう……会えない……)

ずんと重いものが頭にのしかかる。全身から血の気が引いていって、足がブルブルと震えた。

「……その箱は好きにしてもらって構わない。俺には必要ないものだ」

「……」

リーベはずっと渡しそびれていた箱を、ぎゅっと抱きしめる。今までだったらこんな高いものを貰うのは恐れ多いと思うのに、不思議と今はそう思わなかった。恐らく、もう会えないのであれば、ケルトの存在を実感できるものを傍に置いておきたくなかったのかもしれない。

この箱は、ケルトとの繋がりを証明する唯一の品だ。

「それと……出来れば、俺のことは忘れてほしい」

「え……」

突然冷水をかけられたかのようなだった。血の気が引くだけでなく、どこか肌寒さを感じた。傾きつつはある太陽は、未だ強い光を放っているのにも関わらず。

「ど、どうして……？」

「俺は……リーベが思っているような、優しい人間なんかじゃない。覚えていても意味のない人間だ。だから、忘れてくれ」

話はこれで終わりとはばかりに、ケルトは再び歩き出した。リーベはそれに続くことができず、呆然と立ち尽くす。

(忘れる……ケルトさんを？ そんなこと、できるわけないよ……！)

リーベは抱きしめていた箱を両手に乗せて見下ろす。この箱を見る度にリーベはケルトのことを思い出すだろう。それに、ケルトは自分が優しい人間じゃないと言ったが、ケルトはリーベに対していつも優しくかった。突然そんなことを言われてはいと頷けるわけがない。

「リーベ……？」

先行していたはずのケルトが止まったままのリーベに気づいたのか、若干開いた距離で立ち止まる。その表情はリーベを気にかけてくれる優しいもの。――やはりケルトは優しい人だという認識は、間違っていない。

「忘れるなんて……いや、です」

搾り出した声は、思った以上に大きかった。ケルトが琥珀色の瞳を見開く。

ケルトのことを忘れることができないのではない、嫌なのだ。偶然の出会いであれど、言葉をたくさん交わした。歌のお礼として美味しい焼き菓子をくれた。その全てがリーベの心に大事な記憶として刻まれている。それをなかったことになんてしたくない。

「わたしはもう会えなくなっても、ケルトさんを忘れたくありません！ 今までたくさんお話できて嬉しかったのに……楽しかったのに、それをなかったことにするなんて絶対嫌です！」

じわりと視界が滲んだ。一度溢れた感情は止まることを知らず、零れ続ける。

「……っ」

ケルトはわずかに顔を歪めるも、やはりリーベの方を見てはくれなかった。やはり今日の彼は変だ。それに、会えなくなることとケルトを忘れなければならないことは、全く関係がない。

「今日のケルトさんは変です……何かあったんですか？ ……わたしじゃ頼りなくて全然力になれないですけど……でも、忘れてほしいなんて悲しいこと、言わないでください……！」

ボロボロと泣いているリーベの顔は、なんとも情けないものとなっていることだろう。だが、リーベの黒い瞳は逸らすことなくケルトを見つめ続けた。

「……俺は」

一度だけ、琥珀色の瞳がリーベを捉える。しかしすぐに逸らされた上に、ケルトはリーベに背中を向けた。

「……やはり俺のことは忘れてくれ。それが、リーベのためになる」

「……！」

続けられた言葉に、リーベは言葉を失った。リーベはケルトを忘れることなど全く望んではいないというのに。何故頑なに彼はそれを言うのだろう。

枷が外れかけていた感情は、いとも容易く爆発した。

「……っ、ケルトさんの馬鹿ぁ！」

「！ リーベ！」

リーベは大きな声で叫ぶと、その場から逃げるように走り出す。広い街道ではなく、複雑な横道へと入り込んだ。背後でケルトがリーベに止まるよう声を荒げるが、今のリーベにその声は届かなかった。

(なんで……どうして……！)

ポロポロと止まらない涙と、慣れない全力疾走に加えて身体が次第に耐えられなくなったリーベは、近場の壁に背中を預け、ごほごほと咳き込んだ。

(うー……。ケルトさんの馬鹿ぁ……)

いつもならこんなこと、罪悪感が先走って口にするのはもちろん、心に思うことすらないのに。そんな自分を不思議に思う。

(……本当に、どうしちゃったんだろうケルトさん……)

そして立ち止まったことで身体が冷え、頭が落ち着きを取り戻していく。思えば、何の理由もなく、ケルトがあんなことを言い出すとは思えない。自身を忘れてほしいと言い出すということは、同等の理由があるということだ。

(……逃げるんじゃなくて、ちゃんとしっかりした理由を聞けばよかった……)

ずるずると身体から力が抜け、地面に腰を下ろした。ケルトの都合を考えもせず、感情に任せて叫んでしまったことに、今更のように罪悪感が募った。

――ピィ。

シロが大丈夫と言わんばかりに小さく鳴いた。突然走り出して、シロもさぞかし驚いてしまったことだろう。ごめんねと言いながら、軽く指で身体を撫でる。

「……戻ろうか。ケルトさんに謝らないと……」

これで最後になってしまうのならば、こんな形で別れたままにしたくない。きちんと今まで親切にしてくれたことに対して、礼を言わなければならないだろう。それに、忘れてほしいと言う理由も、詳しく聞いてみたい。リーベはゆっくりと立ち上がった。

――ピ、ピピピィ！

「？ シロどうし――」

広い道へ戻ろうとすると、突然シロが大きな声で鳴きはじめる。首を傾げると、リーベの言葉は途中で遮られた。

「――捕らえたぞ」

「！ ――!？」

背後から首に腕を回され、布のようなものを嗅がされる。リーベは慌ててもがくが、力が次第に抜けていくのを感じた。

――ピィ！ ピィ！

「邪魔だな、この鳥」

――ピィィィィ！

シロと突然の襲撃者の声がぼんやりと聞こえる。近い位置から聞こえていたのが、突然下の方からへと変わってしまった。リーベの肩から落ちてしまったのだろう。

(シロ……ケルトさん……)

かすんでいく意識に、リーベはなす術もなく身を委ねるほかなかった。

(どこに行ってしまったんだ……)

ケルトは突然走り去ってしまったリーベを見つけるため、周囲を探っていた。リーベの足はそこまで速くはなかったが、入り組んだ路地に入られてしまったため、完全に見失ってしまったのだ。

(……俺は、彼女を傷つけてしまったのだろうか……)

リーベは涙目になることはあっても、実際に涙を流したところを見たのは、今日が初めてだった。出会った日のときも、真っ青になってはいたが泣くところまではいかず、先ほどもサフィラスに対して怯えてはいたが、泣いてはいなかった。

もう彼女はケルトに怯えてはいない。なのに泣かせてしまった。傷つけてしまった。

(やはり……俺にリーベの傍にいる資格はない……)

ケルトは己の掌を見つめた。節くれだった手は、変わらぬ肌色をしている。しかしどんなに綺麗に洗ったとしても、この手についた紅が、なかったことになるわけもなく。

(サフィラス様や仲間たちは、それを知った上で接してくれるが……)

リーベは知らない。過去にケルトが犯した業を。決して己自身が望んだことではなくとも、どんなに年月が経とうとも、罪深き所業は永遠に刻まれたまま。

ケルトには生まれもって、動植物と会話ができるという特殊な能力を持っていた。

それは常人からしたらありえない力。それ故、実の両親に疎まれていたケルトは、貧困もあって幼くして人買いに売り飛ばされた。そして特殊な力を持つケルトを買ったのが――暗殺を生業としている組織。

動植物の声が聞こえるということは、人間では侵入するのも困難な場所への情報収集が可能となり、実際侵入する際の手助けも得られる。

そうした情報収集だけでなく、人を殺める術をケルトは叩き込まれた。朝から就寝時間まで、毎日のように続く血が滲むような鍛錬。それに加え、命を奪うことに戸惑いをなくすために、何かしらの命を絶つことを強制された。初めは虫を。次に小動物を。その次は中型の犬など、対称は次第に大きなものへと変わっていった。

動植物の声が聞こえるケルトには、彼らの恐怖、焦燥、断末魔の悲鳴まで、全て耳に聞こえていた。怖い、やめてと叫ぶ動物達に臆すれば、これしきもできないのかと暴行を受ける。そしてケルトの前で彼らを殺してしまうのだ。お前が殺さずとも、彼らの命運は既に決まっていたのだと嘲笑いながら。

そんな地獄の日々を送っていたケルトは、次第に動物達が何を言おうとも、表情を変えることなく命を絶つことができるようになっていく。そして大型の動物の次に用意されたのは――人間だった。

手足だけでなく、身体を柱に括り付けられたために身動きをすることができず、青ざめた表情と恐怖にぬれた瞳がケルトを射抜いた。しかしケルトが刃物を繰り出す動きに躊躇は一切ない。大きな声で悲鳴を上げる声も耳には入らず、ただ淡々と、目の前にある命を絶つ。

「よくやった」

命を絶つと組織の人間はケルトを褒めるが、そんな言葉もケルトの耳には入らない。

ケルトはただ命令の通りに動く、人形と化していた。それはケルトを買った組織の人間が望んでいた姿そのもの。琥珀色の瞳は常に暗闇を纏い、光を宿すことはない。

年齢が二桁に達する頃には、『本番』が用意された。指定された人間を、場合によっては目撃者も、言われるがままに、命じられるがままに命を絶つ。

そんな暗闇しかない世界が一転したのは、本当に偶然の邂逅だった。

普段と変わらぬ命令、標的。ケルトに振られる依頼は、基本的に警備が厚い屋敷に暮らす人物ばかりだった。そのため鳥などに僅かな隙を探らせたり、夜分の決行時には蝙蝠などに警備の気を引かせる。厳しい鍛錬によって得た身体能力は、それくらいの隙さえあれば侵入は容易だった。

このときも特に問題なく侵入に成功した。調べがついている標的の部屋へと辿り着く。夜中だというのに部屋には灯りが燈されていたが、標的が起きていようがいまいが関係ない。

今回の標的はケルトと同年くらいの子供だと聞いた。それくらいの年齢ならば、暗殺者として鍛錬を積んできたケルトの敵ではないだろう。

窓ガラスを蹴り破り、部屋の中へと侵入する。音に気づいた標的は手に持っていた本を滑り落とし、紅蓮の瞳を驚愕に奮わせた。

「君は……！」

ケルトは床を蹴り、標的に向かって持っていたナイフを振りかざした。

「グラディオオン……！」

「！」

標的の口から呟かれた言葉に、ケルトの身体はピタリと固まった。

その名前に聞き覚えなどない。なのに何故だろう、ひどく懐かしいと感じている。

「やっぱりグラディオオンだ。やっと見つけた……！ アクアリアやゼファイルはすぐ近くにいたのに、君だけいないからずっと心配していたんだ」

標的は白い頬を僅かに紅潮させ、ケルトの方へ自ら歩み寄ってくる。ケルトよりも若干高い位置から見下ろしてくる紅蓮の瞳は、喜色に満ちていた。

ここでナイフを頸部へ突き刺せば、それで仕事は完了する。なのにケルトの身体は動かなかった。動かせなかった。どっと全身から冷や汗が流れたような感覚に陥る。自分は何か、とんでもない過ちを犯すところではなかったのかと。

「お、お前は、誰だ……！ お、俺はグラディオオンなんて、し、知らない！」

目の前の標的である少年から慌てて距離をとる。彼はケルトにとって全くとるに足らない相手のはずなのに、心臓はばくばくと大きく音を立て、今すぐここから逃げ出したいと全身が訴えている。

こんなことは初めてだった。

「――ああ、そうだった。君は記憶を継承せずに転生したのだったね。ごめんよ、突然こんなことを言われたら驚いてしまうよね」

少年は眉を八の字にしながらも、瞳を細めて笑みを作る。

「君には、動植物の声を聞くことができる特殊な力があるよね」

「……！」

ケルトは瞠目した。何故それを見ず知らずの少年が知っている。この力のことを知っているのは、組織の人間と、ケルトを売った親だけだ。知る術など、あるはずがない。

「その力はね、かつて天界で地を統べていた、地神将グラディオオンの持っていた力なんだよ。彼は全ての動植物に愛され、愛していたんだ」

「……」

一体、それとケルトとどう関係があるというのだろうか。

本来ならば、そんなことを聞く必要はなく、相手が油断しきっているのだから通常通り、任務をこなせばいい。だが、今のケルトに任務を全うする意識は、完全になくなっていた。

ただ、目の前の得体の知れない少年が恐ろしい。なのに、彼から目を離すことができない。逃げ出したい。彼の話を知りたい。相反する思いがケルトの胸中を駆け巡る。

「その力が使えるということが何よりの証拠だよ。――つまり、地神将グラディオンの生まれ変わりなんだ、君は」

「……!？」

少年が言い出した言葉は、なんとも荒唐無稽なことだった。神の生まれ変わり？ ケルトが？
「君だけじゃない。――わたしもそう。わたしは四神のまとめ役、火神将イグニアスの生まれ変わり。わたしと君は仲間なんだ」

ずっとケルトの前に何かが伸ばされる。条件反射で身を引かせるが、よくよく見れば、それは白くて小さな手だった。その手に握られているものは何もない。

「グラディオン。君はわたしの大切な仲間だよ。――おいで」

にこりと浮かべられた笑みはとても穏やかだった。燈された灯りを背負い、彼自身がまるで光輝いているかのよう。

「……っ！」

手からずりりとナイフが滑り落ちる。だが、拾おうとは思わない。既にケルトの中に、彼の命を絶つという選択肢は消えていた。そのままよろよろとした動きで、少年の差し出す手に向かって手を伸ばす。まるで光に惹かれたかのように。

触れた手は、ケルトよりも少し大きかった。背丈も彼の方が高い。同い年位とは聞いていたが、彼の方がケルトより年上なのだろう。

「君の今の名前を教えてもらってもいいかな。わたしはサフィラスと言うんだ」

「……ケルト」

捨てた親が見つけた名前を名乗るのは、久しぶりだった。最後に名乗ったのは、ケルトを買った組織の人間に告げたときだろう。それ以外で彼らはケルトに名を尋ねたりはしなかった。彼らにとってケルトの名前になど興味はない。依頼をこなせる実力があるかないか、それが全て。

「ケルト、いい名前だね。――すぐに見つけてやれなくて、すまなかった。これからは、わたしや他の仲間たちが君の傍にいるから」

サフィラスと名乗った少年はケルトの背中に腕をまわし、抱き寄せられる。

実の親にも抱きしめられた経験がなかったケルトは、その暖かさに驚いた。

組織の人間も、今までケルトが命を奪ってきた人間も、冷たさしか感じたことはない。初めて感じた温もりは、きっと一生忘れることなどないだろう。

初めて人の温かさを教えてくれたサフィラスのことを、ケルトは心から敬愛している。彼と出会わなければ、今もきっと手に血を染め続けていたに違いない。そしてリーベとも出会うことはなかった。

(このことを知ったら……リーベはまた俺を怖がるだろうか)

今まで仲間たち以外の人間と深く関わるといったことはなかったため、己の過去のことを特に気にしたことはなかった。彼らは、ケルトの事情を全て知った上でよくしてくれていたから、気にかける必要がなかったのかもしれない。

(いや……今はそんなことよりも、リーベを見つけなければ……)

ぼろぼろと大きな瞳から涙を流す少女に驚愕したために、突然走り出してしまったリーベに対する反応が遅れてしまった。その反応遅れの差は大きく、ケルトがリーベに追いつく前に複雑な路地裏に入られてしまった。

(早く見つけなければ……これで最後なのだから)

シロがいつも通り庭へとやってきたとき、丁度三人で茶会をしようとしたところだった。ずっとリーベのことをサフィラスに伝えていなかったケルトは、焦燥に駆られた。今までリーベがくる時間帯に、サフィ

ラスは出掛けていたため鉢合わせるといことがなかったのだ。だからこそ、リーベのことを別段報告する必要はないと判断したのだが、その考えは誤りだったと気づく。サフィラスが用事を済ませてしまえば、こうして鉢合わせる機会もできることを、すっかり失念していたのだ。

ケルトはリーベのことをずっと黙っていたことへの罪悪感を抱えながらも、サフィラスに最近訪ねてくる少女のことを報告した。サフィラスは彼女の存在を黙っていたケルトを怒ることなく、むしろにっこり笑って彼女も一緒に茶会に誘おうと言ってくれた。

「よろしいのですか……？」

「もちろん。幸い、席はもう一つ残っているし、君を訪ねてくれた客人をもてなさないわけにはいかないさ。それに――」

サフィラスが続けた言葉に、ケルトは目を逸らしていた現実に戻されることになる。

「恐らく彼女と会えるのは、今日が最後になってしまうだろうしね」

「――！」

フォーリエストに来訪したのは、ある目的のため。そのうちの一つは達成し、もう一つも完遂しつつあるという。そしてカーテュアリーミュージアムの公演を見たら、王都に帰らなければならない。

『ケルト、帰っちゃうの？』

シロがどこか落ち込んだ様子を出した。小さくすまないと呟きながら、シロの身体をそっと撫でる。リーベを迎えに行くことになった後も、ケルトの胸中にはもう会えなくなるという事実が渦巻き続けていた。このことをどうリーベに切り出していいかわからず、リーベに対してぎこちない態度で対応してしまったように思う。それでもなお、ケルトの身体の心配をしてくれるリーベに申し訳がなく、茶会の席でも同席するのに抵抗があった。

結局はサフィラスに押し切られてしまったが、やはりリーベの方を見ることができなかった。これで会うのが最後だというのに、結局ろくに会話をすることなく、体調が悪そうなリーベを慮って、茶会は早めに切り上げることになった。

それはあくまで表向きで、怯えるリーベをいい加減可哀想だと思ったからだろう。彼女はサフィラスに対して、完全に腰が引けていた。ケルトでもわかることが、彼にわからないわけがない。

そしてあまりリーベと話せていないケルトのために、リーベを送ることを命じたのだろう。そのことに感謝しつつも、ケルトからその話を切り出すことはできず、暫く無言が続いた。結局、話しを切り出したのはリーベからだ。

恒例となった『次』への約束。リーベは俯きながらも、ケルトの言葉を待っていた。

だが、ケルトはリーベの望む応えを示すことができない。この屋敷はあくまで別荘であり、本来の住居は王都にある。用が済んでしまえば、後は帰ってしまうだけ。

「……次は、もうない」

この言葉を紡ぐだけで、時間を必要としてしまった。意に沿わないことを伝えるということは、どうしてこうも重苦しい気分になるのだろう。

驚いた様子のリーベをできるだけ見ないようにしながら、もうフォーリエストに滞在する理由がないことを告げる。

そして、リーベには更に言わねばならないことがあった。

「……出来れば、俺のことは忘れてほしい」

ケルトの過去をリーベが知ることはないだろうが、一度は暗闇の世界に置かれていた身だ。そんな人間のことを記憶していても、いいことなど何一つない。――ケルトの所属していた組織は、未だに摘発されていないのだ。ケルトはサフィラスの庇護のおかげで、彼らの手から完全に逃れることができているが、

万が一ということもある。そのせいでリーベに危険が及んだりなど、あってはならない。

リーベのことは、ケルトが覚えているならそれでいい。彼女に忘れられるのは悲しいと思ったが、これもリーベの安全のためだ。

「忘れるなんて……いや、です」

返ってきたリーベの反応に、ケルトは驚愕した。リーベの漆黒の瞳には雫が溢れ、朱色に染まった頬を伝いながら落ちていく。

「わたしは、もう会えなくなっても、ケルトさんを忘れたくありません！ 今までたくさんお話できて嬉しかったのに……楽しかったのに、それをなかったことにするなんて絶対嫌です！」

「……っ！」

ボロボロと大粒の涙を零しながらも、リーベの瞳はしっかりとケルトを捉えていた。今まで見たことのない様子にどう反応していいかわからず、身体が固まる。

「今日のケルトさんは変です……何かあったんですか？ ……わたしじゃ頼りなくて全然力になれないですけど……でも、忘れてほしいなんて悲しいこと、言わないでください……！」

「俺は……」

本音を言えば、忘れてほしくなんかない。彼女もそれを望んではいないのだろう。だが、やはり万が一を思うと、導き出した答えを翻すわけにはいかなかった。

「……やはり俺のことは忘れてくれ。それが、リーベのためになる」

本当の事情は口が裂けても言えないが、どうかそれだけはわかってほしかった。ケルトはリーベに傷ついてほしくない。——なのに、どうして彼女は泣き止んでくれないのだろう。

「……っ、ケルトさんの馬鹿ぁ！」

「！ リーベ！」

拳の果てに、彼女に逃げられてしまう始末だ。己の不甲斐なさが嫌になる。

「リーベ、どこだ……！」

声を張り上げるが、リーベが姿を見せてくれる気配はない。別の場所へ移動しようとした、そのときだった。

『——ト！ ——ルト！』

僅かに聞こえてくる、悲痛な叫び声。ケルトは耳を澄ました。この声は、もしや——

『ケルト！ ケルト！』

「シロ！」

ケルトの名を呼ぶ、シロの声だった。シロの声がする方角を目指し、走る。

『ケルトー！』

「シロ！」

辿り着いた場所にシロはいた。しかし、彼と共にいるであろうリーベの姿はどこにもない。変わりにあるのは、リーベに渡した小さな小箱だけだ。ケルトは地面で片羽を広げるシロに手を伸ばすと、慌てた様子で飛び乗ってくる。

『ケルト大変だよ！ リーベが、リーベが変なヤツに連れていかれたんだ！』

「な……」

リーベが連れ去られた。その事実にあることが脳裏に過ぎる。

これはまさに、もう一人の仲間が追っている事件そのものではないか。いや、もしかしたら別件かもしれない。その事件は主に薄暗くなった夜に起きるものであり、夕暮れ前である今の時間帯に起きるものではなかったはずだ。しかし、無関係だと断言できる要素もない。

『あっち！ あっちの方へ行っちゃよ！ 早く追いかけてよう！』

片羽の羽で示された方角を確認し、ケルトはシロを肩へと乗せる。

「すまない、落とさないよう気を使えない」

『僕の話は気にしないでいいから！ 早くリーベを探さないと！』

「ああ……他の動植物達にも、リーベの行方を聞いてみよう」

ケルトは短く応えた後、シロが示した方角に向かって走る。

リーベが何者かに捕まってしまったのは、ケルトが彼女を傷つけてしまったせいだ。

彼女は近々公演を控えていると言っていた。もしも仲間が追っている事件に巻き込まれてしまったなら、早く助けださないと大変なことになってしまう。

(どうか……無事で……！)

シロや植物の声に耳を傾けながら、リーベを連れ去った人物の足跡を追った。

「リーベが帰ってきてないって？」

今日の分の仕事を終わらせたフォクノを待っていたのは、リーベではなく歌手の先輩たちだった。たっぷり休養をとった後だというのに浮かない顔をした彼女たちが恐る恐るといった様子で口にした言葉に、思わず眉根を寄せる。

「そ、そうなのよ……いつもならとっくに戻ってきてるのに、もうすぐ日が暮れる時間帯なのに、まだ帰ってきてなくて……」

それは明らかにおかしかった。リーベは必ず、日が暮れる前には帰ってきていた。話しが弾んで帰るのが遅くなったとしても、もう戻ってきていてもおかしくはない時間だ。

それに、人攫いのこともある。最近勃発しているという行方不明事件のことを、リーベも耳に胼胝ができるくらい聞かされていた。そうでなくても臆病なリーベが、暗くなってきた道を歩きたがるわけがなく、だからこそまだ帰ってきていないことに違和感を覚える。

「フォクノは、リーベがどこへ行っているか知ってるんでしょう？ だから何か聞いてるんじゃないかと思って……」

「……ごめん、姉さん達。あたしも把握してないや。今日も普段通り帰ってくるとばかり……」

「そ、そうなの……」

フォクノが答えると、歌手たちの瞳が不安気に揺れた。お互い、顔を見合わせる。

(本当におかしいな……まだ帰ってきてないなんて……)

顎に手を当ててフォクノは思考する。ただ単に時間を忘れてしまっているのなら、それに越したことはない。が、何か嫌な予感がする。このまま待つだけでは、リーベが帰ってこないのではないかと。

ケルトがいるという屋敷へ直接行ったことはないが、道順はリーベから聞いている。ここは一度、確かめに行った方がいいかもしれない。

「姉さんたち、あたし今からちょっと様子を見てくるわ」

「え、でも、もうすぐ日が暮れるわよ？ 人攫いの事件が解決してないのに、一人で今から外に行くのは危ないわ」

「走ればギリギリなんとかなるさ」

幸い仕事は終わったばかりであるから、今抜けたところで誰にも迷惑はかからない。道中周囲に気をつけながら走れば、日暮れ前には目的の邸に着くだろう。足の速さには自信がある。

「……言っても聞かないだろうから止めないけど、十分注意しなさいよ。フォクノだって、人攫いの標的にされる可能性があるんだからね。あんたは全く気にしてないけど、綺麗な顔してるんだから」

「肝に銘じとくよ。ありがとね、姉さんたち」

彼女たちの心配してくれた気持ちをありがたく受け取り、フォクノは外へと駆け出した。外に出たら、持てる速さで貴族街へと向かう。

(……頼むから、屋敷にいてくれよ、リーベ)

周囲に気を張りながら走り続けると、貴族街に続く入り口が見えた。逸る足はリーベから聞いていた道順通り進み、ある邸の前へと到着する頃には、日は沈みかけていた。

裏口らしき扉があるが、当然鍵がかかっていて開けることはできない。柵の周りにはたくさんの木々が生えていて庭の中の様子を外から探ることができそうになかった。

(仕方ない、表に回ってみよう)

柵を辿り、正しい入り口を目指す。特に難しいこともなく正面へと来ることができたが、当然扉は閉められており、隙間から覗くことができる敷地内の中には、リーベどころか人影すらなかった。

(リーベは邸の中に入ることはないって言ってた。いつも外で歌って、しゃべって、焼き菓子を持ってきてもらって、帰る……その通りなら、もうここにはリーベはいないってこと……？ いや、まだいないと決まったわけじゃない)

静まり返った邸に、フォクノは舌を打つ。落ち着け、と心の中で自分に言い聞かせた。もしかしたら邸の中にいるかもしれないという一縷の望みに掛け、息を吸い込んだ。

「ケルトさんと言う人！ いるなら出てきて！ 聞きたいことがある！」

フォクノは邸に向かって大声で叫んだ。ケルト本人に聞こえるかはわからないが、これだけ大声で叫べば使用人の一人くらいはこちらに気づいて出て来るだろう。その人物に、ケルトを呼ぶように言えばいい。「あら……？」

狙い通り、一人の女性が屋敷の中から姿を現した。青色の長い髪をシニヨンに纏めた女性がフォクノに気づくと、首を傾げながらやってくる。

「ケルトにご用と聞いたけど、どちら様？」

「あたしはフォクノ。ここに通ってたリーベの幼馴染」

「まあ、リーベさんの。わたしはこの邸の主仕える侍女、ララリエと申します」

丁寧に自己紹介する彼女の言葉を耳半分に聞き流し、本題を切り出そうと口を開くが、続けられた言葉にフォクノは息をのんだ。

「貴女がここにいらしたということは……もしや、リーベさんはまだお帰りになられていないのですか？」

「！」

細められた董色の瞳が、苦々しい光を宿した。それはリーベがまだ帰ってこない理由に心当たりがあるということではないか。フォクノは碧の瞳をつりあげる。

「どういうこと？ リーベがまだ戻ってないって、あんた何か知ってんの!？」

「それは……」

「――こちらケルトがまだ帰ってきていないんだ、お嬢さん」

詰るようにララリエを問い詰めると、突如男の声が割り込んできた。邸から紅い髪をした背の高い男が出てくる。ララリエが振り返るとサフィラス様、と呟いた。彼女の言葉と漂わせている風格からして、彼がこの邸の主と見て間違いないだろう。

「ケルトさんとやらもないって、どういうことだよ。一から説明してくれない？」

「ああ。実は――」

フォクノの明らかに不遜な態度に気を悪くした風を見せることなく、サフィラスと呼ばれた男は丁寧に説明してくれた。四人でお茶会をしていたところ、リーベの顔色が悪かったため、ケルトに送って行かせたと。そしてそれは日暮れ前のことだというのに、未だにケルトは邸へと戻っていないという。

「流石にそろそろ心配だから、捜索に出ようと思っていたところなんだ」

「だったらあたしも行く！ 連れてって！」

彼らの話を聞くに、リーベとケルトはほぼ同時にいなくなっている。ならば、彼らは共にいる可能性が高い。そして共に何か事件に巻き込まれたなら、彼らを助け出すという利害は一致しているはずだ。

「――それは駄目だよ、お嬢さん。彼らがもし何か事件に巻き込まれているとしたら、君も巻き込むことになってしまう。リーベさんの大切な友人である君を巻き込むようなことは、したくないんだ」

「そんなの承知してるっての！ それに、危険なのはあんたもあたしも同じじゃないか。むしろ、貴族であるあんたがその辺うろうろしてる方が、人攫いの絶好のカモだろ」

サフィラスと呼ばれた男は、色恋に興味のないフォクノから見ても、端麗な容姿をしている。ラフな格好をしているフォクノと、出で立ちのいいサフィラス。どちらがより狙い目か、火を見るより明らかだ。「――私は一人で街を歩いている、絶対に捕まらない自信がある。例え周囲を囲まれたとしても、ね。君はそう言えるかい？」

「……」

普通に考えたら、サフィラスの言っていることはただのはったりだろう。彼がもし筋骨隆々とした男だったのであれば、まさにその通りだろうと納得できたかもしれない。だが彼はどう見ても華奢な体格で、襲撃者を撃退できるような力があるようには見えなかった。

しかし何故だろう、サフィラスの浮かべる笑みは自信に満ち、どこか凄みを感じる。ぞわりと背筋に悪寒が走ったフォクノは、思わず数歩後退した。この妙な得体の知れなさは一体なんなのだろう。

「ララ、彼女を家まで送って行ってあげてくれ。私は街中を探してくる」

「了解いたしました。……本当はお止めしたいものではありませんが、状況が状況ですものね……くれぐれも、無茶や無謀はなさらないようお願いいたします、サフィラス様」

ララリエが正門の扉を開けると、サフィラスが出てきた。フォクノの方にニコリと一瞥をくれると、そのままスタスタと歩いて行ってしまふ。存外足は速く、あっという間に背中が見えなくなった。

「行きましょうか、フォクノさん」

「……」

続いてララリエが出てきて扉を閉める。彼女に促されコクリと頷いた後、フォクノよりも背が低い彼女の背中を追う。

「ねえ……主様が自分で従者探すって、他に人がいないの？」

歩きながら、心と彼の行動を疑問に思った。普通、従者がいなくなっても、その主がわざわざ街中に出て探すなど、ありえない。他の従者の仕事ではないだろうか。なのに、彼は戸惑うことなく自ら外へと出て行った。考えられるのは、ケルトを探す人手がない、ということ。

「それもあるわね。あの屋敷にいるのは、わたしとサフィラス様とケルトと、そしてもう一人の四人だけだから」

「はあ!? すくな！」

想像以上に少ない人数だった。彼らが住まう邸は他の邸に引けをとらない位大きく、庭もまた広い。それをたった三人で管理しているというのか。

「ふふ、庭はケルトに任せておけば十分だし、使っていない部屋にまでは手をつけていないから、そこまで大変ということもないわ。サフィラス様も自分で出来ることはご自分でなさる方だから、仕事もそこまで多くはないの」

「へー……」

自分で話しを振っておきながら、フォクノは気のない返事を返す。正直なところ、彼女達のことなんてどうでもいい。今のフォクノにとって大事なものは、リーベの行方だ。

(どこ行ったんだよ……リーベ……)

一縷の望みであった、ケルトのいる邸にはいなかった。そして肝心のケルトも帰っていないとすると、何かしら事件に巻き込まれてしまったとみていいだろう。

フォクノがリーベと出会ったのは、五歳の頃だ。

物心ついたときには父はおらず、病弱な母と二人、生活が大変ながらも穏やかに暮らしていた。だが、その母もまだ幼かったフォクノを残して天へと旅立ってしまう。

その後、母の知人の紹介という形でフォクノは孤児院へと預けられた。亡くなる前に、フォクノの処遇

をどうするか考えていたところが、とても母らしい。

孤児院に来てから数日間、面倒をみてくれる先生や孤児院で暮らしている子供たちに囲まれ、再び穏やかな日が続いたが、心はどこか上の空で、彼らに馴染んでいるとは言えなかった。母が死んだというショックから、まだ抜け出せていなかったのもあるかもしれない。

ある日、フォクノは庭の隅に膝を抱えて蹲っていた。無性に母が恋しくて。けれども、この寂しい気持ちを誰かに伝えるのも億劫で。

「――、――」

そんなとき、どこからともなく聞こえてきた小さな歌声。誰かが近づいてきたことに身体を強張らせるも、徐々に鮮明になっていく歌声に、フォクノは思わず耳を傾ける。

それは子守唄だった。母が寝る前に歌ってくれたため、よく覚えている。臥せりがちになってからは聞くこともなく、懐かしさに臉を閉じた。

ドタン！

しかし、その歌は鈍い音と同時に途切れることとなる。パチリと目を開けたフォクノは歌が突然止んでしまったことを訝しく思い、その場で立ち上がった。そして理由はすぐに判明する。

「う……うう……」

フォクノと同じ年位の少女が、倒れながら小さな呻き声をあげていたのだ。元々聡かったフォクノは、それだけで何が起きたのか理解する。彼女が歌っている途中、躓いて転んでしまったのだと。

「えと……だ、だいじょうぶ？」

声をかけると、雫が溜まった黒い瞳と目があった。すると、見る見るうちに少女の顔は真っ青に染まっていく。

「き、聞いてたの……!？」

「え？ ……ああ、うん」

歌を聴いていたのかという彼女の問いかけに、フォクノは軽く頷いて見せると、少女は起き上がってあたふたと慌て始めた。

「う、うるさくしちゃって、ご、ごめんなさい……！」

そして続いたのは謝罪の言葉。たどたどしく紡がれる言葉を要約すると、「下手くそな歌を聞かせてごめん」ということだろうか。フォクノは先ほど聞いた歌を思い出すと、ぶんぶんと首を横に振った。

「下手じゃなかったよ。うるさくもなかったし」

フォクノに歌の上手い下手は正直わからないが、彼女の歌はとても耳に心地がよかった。できれば、もっと聴いていたいと思ったほどに。

「――ねえ、さっきの歌、もう一回歌ってよ。あたし、もっと聴きたい」

「え！」

彼女に歌をねだると、彼女は黒い瞳を驚愕に染める。嫌なのかと訊ねると、彼女は先ほどのフォクノと同じように首をぶんぶんと横に振った。

「……わ、わたしなんかの歌で、いいの？」

「うん」

肯定の意を示すと、彼女は白い頬を紅潮させた。そして胸の部分の服をぎゅっと掴みながら、大きく息を吸い込む。

再び紡がれた旋律に、フォクノは目を閉じて聴き入った。彼女の歌が、心の中に染み渡り全身に広がっていく。母の歌ってくれた子守唄の懐かしさにもう一度とねだってしまったが、今度はまた違う思いがむくむくと膨れ上がっていた。

「ねえ、今度は違うの歌ってよ」

彼女の歌う、別の歌も聴いてみたい。ほんの少し、彼女の歌を聴いただけだというのに、フォクノはすっかりこの少女の歌の虜になっていた。

しかし、彼女は俯きながら唇をぎゅっと引き結ぶ。そしてごめんなさいと小さく呟いた。

「わたし、これしか歌、知らなくて……」

この子守唄は、眠れない子がいるときなどに、院長先生が歌ってくれるのを聴いて覚えてらしい。それ故、他の歌は一切知らないのだとか。

「それなら、先生にほかの歌をおしえてもらえばいいじゃん」

名案とばかりに浮かんだ提案を、彼女は思い切り首を横に振って却下する。何故嫌なのかと問えば、彼女はいつもドジをして先生たちに迷惑をかけているから、これ以上迷惑をかけられないから、だと。

「先生たちにだめっていわれたの？」

「う、ううん……まだ言ってない、けど」

「なら聞いてみればいいじゃん。聞かなきゃおしえてくれるものもおしえてくれないよ」

聞く前から迷惑だなんだとうじうじしていたら、何もできない。だというのに、少女は俯くだけで、全く行動に移そうとはしなかった。

「……なら、今から聞きにいこう！」

「え……!？」

フォクノは彼女の手首を掴み、駆け出した。彼女に任せていたら、いつまで経っても教えてもらおうとしないだろう。ならば、一緒にフォクノが聞いてあげればいい。

そう広くはない孤児院の中、少し走ればすぐに面倒を見てくれている大人は見つかる。よし、と心の中で呟いてからフォクノは大きく息を吸い込んだ。

「先生！ ちょっと聞いて！」

「わわわわわ！」

少女を連れて、この子に歌を教えてあげてほしいと頼むと、先生は穏やかに笑いながら快諾してくれた。少女はポカンと大きく口を開けるも、すぐにはっとしてありがとうと笑った。

「だから言ったじゃん。聞いてみないとわからないって」

「うん……ありがとね、フォクノちゃん」

彼女から名前を呼ばれた後、今更のように少女の名前を知らなかったことを思い出す。そのまま口を開くと彼女は少しショックを受けたような顔をするが、すぐに自分の名前を教えてくれた。

「わたし、リーベっていうの。院長先生がつけてくれたんだよ」

「院長先生が？」

「うん。わたし、赤ちゃんのときからここにいたから……」

「……」

聞けば、少女リーベのように、赤ん坊の頃から孤児院に預けられ、親の顔を知ることもない子も何人かいるという。フォクノと同じく、何らかの理由で両親を失い、孤児院へと辿り着いた子供もまた同じ。

(あたしだけじゃ……ないんだ)

ここにいる子供たちは、皆親がいないのだ。すぐに気づいてもおかしくはない事実、フォクノはずっと気づかなかった。母の死からなかなか前を向けないせいで。

「……ねえ、あたらしい歌おぼえたら、聴かせてよ」

「うん、いいよ！」

これがリーベとの出会いであり、今に続く親交のきっかけでもある。

リーベはフォクノが切り出してくれたから今があると、後々感謝を述べていたが、それはフォクノも同じだった。リーベの歌を聴いて、後ろ向きな考えから脱却し、前を向けるようになった。母の死を乗り越えることができた。先生や他の子供たちとも自然と打ち解けることもでき、次第に母のいない寂しさは薄らいでいく。

先生たちから歌を教わるようになったリーベは、フォクノの前だけでなく人前でも歌うようになる。先生や他の子供たちからも歌を褒められるリーベを、まるで自分のことのように誇らしくなったものだ。そしてそのときから、フォクノはある確信を得る。

(リーベは絶対ミュージアムの歌い手になれる……！)

楽器の演奏や歌の披露をする娯楽施設、ミュージアム。華やかな衣装を纏い、耳だけでなく目も楽しませてくれるという。

しかし生活の余裕がないため一度もミュージアムの公演を見たことはなく、どんなものなのかは公演を見た人々の反応を伺うしか知る術はなかった。それでも、どの客も頬を紅潮させて感動していたことから、ミュージアムの舞台は素晴らしいものなのだと、共に様子を見ていたリーベが憧れるには十分だった。

リーベは歌い手になれるという確信と、彼女のミュージアムへの憧れを見て、フォクノはリーベが歌い手になれるよう、全力でフォローしようと決めた。鈍くさい故にドジが多いリーベは、吃驚するほど自分に自信がない。だからミュージアムへの憧れも、憧れのままにしてしまう可能性が高かった。所詮自分なんてと卑屈になって。実際その通りになり、フォクノが渴を入れなければ、リーベはきっと入団試験を受けたりはしなかつたろう。

そして憧れの舞台に立ったリーベは神鳥を勤めていたメリージアとの勝負に勝ち、新たに神鳥となった。大盛況に終わった初舞台は、彼女の歌声が多くの人々に受け入れられた何よりの証である。

これからも、リーベは『神鳥』として舞台上で歌い続ける。そしてフォクノは、そんなリーベを支え、サポートする。それがずっと続いていくと思っていたのに。

(無事に見つかって、リーベ……)

少し前を歩くララリエの背中を見ながら、フォクノは大事な親友の安否を祈った。

太陽が沈んだ後の街並みに、人影はほとんどない。

人攫いの噂が完全に街中に広まってしまったからだろう。仕事がやりづらくなってしまった。回数を増やしていいと指示されたときは歓喜したものだが、それも長くは続かなかつた。同時に、上が回数を絞っていた理由を漸く理解する。

フォーリエストは田舎街だ。娯楽施設がミュージアムしかない所に、夜出歩く人間は少ない。その分仕事はやりやすくもあつたが、獲物が少ないということでもあつた。

ここ最近自分たちの噂が広まってしまったせいも、夜に出歩いている人間を探しても見つからない、という事態にまで陥っている。こうなれば、そろそろ昼間での仕事の許可をもらうしかないだろう。上も本業が順調であるようだし、こちらの副業(・・)にも、もっと力を入れてもらいたいものだ。

(実際今日は夜になる前に依頼があつたしな。夜に仕事ができなくなるなら、昼も行動していいという御達しがくるのも時間の問題だろう)

自分たちにその依頼をしたのは上ではなく、彼の娘であつたが。彼女が指名した人物はなんてことのない、ごく普通の娘。時々独りで貴族街まで赴いていると簡単に調べが ついたため、仕事自体はとても簡単だった。しかし、何故彼女はこんなとるに足りないような少女を捕らえてほしがつたのだろう。

(まあ関係はないか……俺はただ与えられた仕事をこなせばいい)

余計な詮索は無用。特にこんな後ろ暗いことを生業にしているのならば、尚更だ。上から信用を失えば、問答無用で解雇される。それだけならまだしも、口封じを画策されることも有り得る。ならば、機嫌を損

ねないよう従順な犬を演じていればいい。金持ちに逆らうなど、マイナスばかりでプラスになることは一つもないのだ。

(あれは……)

前方に、独り街道を歩く人影が見える。咄嗟に近くの建物の影へと隠れた。段々と近づいてくるにつれ、人影の姿が鮮明に映るようになる。

人影は手元に松明のようなものを持っていたため、暗闇の中、大層目立つ。ぼんやりと照らされている顔立ちは、白磁のように白い肌が特徴的だった。続いて少し長めの赤い髪が動きに合わせて揺れている。切れ長の瞳はどうやら髪と同じ色をしているように思う。そして何より、その造作全てがまるで彫像のように整えられていた。

男もののズボンや上着を着ていることから、男性だと判断していいだろうが、もしそうでなかったら女性だと見間違えたかもしれない。それだけ、美しい面立ちをした青年である。

(なんで貴族のぼっちゃんがこんなところに……?)

十中八九、彼は貴族だろう。だが貴族の青年が真っ暗な夜に、たった独りで街道をうろうろしている理由に検討がつかない。しかしこれは、またとない絶好の機会でもある。

(あれだけ面のいい野郎なら、どんだけ高い値がつくか……!)

当然見目麗しい人間であればあるほど、その人物の価値は高くなる。できるだけ貴族には手を出すなど言われてはいるが、あれだけの大物を目の前にして何もしないなど勿体無い。これほどの美形ならば貴族であっても、上は許容してくれるだろう。

そうと決めてしまえば、後は行動するのみだ。建物の影で息を潜ませ、青年が通るのを待つ。そして確実に背後をとったあと、足音を立てずに近づきつつ、常備している睡眠薬が染み込んでいる布を取り出した。

心なしか、全身が熱くなっているのを感じる。大物を目の前にして、柄にもなく興奮してしまっているのだろう。

腕を伸ばせば届くところまで青年に近づいてから、妙な違和感を感じた。身体の熱がどんどん上がってきている。火照るところの生ぬるい熱さではなく、まるで焼かれるような激しい熱さが全身を襲う。

「う……ぐお……」

思わず呻き声を上げてしまって慌てて口を塞ぐが、同時に気力が削げて膝からがくりと崩れ落ちる。四つんばいになりながら徐に顔を上げると、前を歩いていた青年がこちらを見下ろしていた。

「ああ、やっとかかってくれた」

青年は髪と同じ色の瞳を細くし、口元をつりあげる。

笑っている。

熱くて仕方のない状態であるにも関わらず、ぞわりと悪寒が背筋に走った。そして、青年がこちらを向いたせいで判明した一つの事実に瞠目する。

松明だと思っていた手元の灯りが、青年の掌の上から燃え盛っていた。彼の手には燃料のようなものは何も握られていないにも関わらず、燃え尽きることなくゆらゆらと熱を発し続けている。

「熱いだろう？ 実は私の周囲には、眼に見えない炎が揺らめいているんだ。私に危害を加えようとする者にのみ反応する、特殊な炎がね」

「……!」

この男は一体何者なのだろう。自分は炎を自在に操っているとでもいうのか。そんなことが出来るはずがない。だが、男の掌の上で変わらず揺れている炎に、焼き尽くされるような全身の熱さ。熱と共に非現実的な事象を目の前にして、頭が全く働かない。

「ああ、君を纏っている炎は熱いだけだから焼死することはないよ。そこは安心してくれていい。――君に

聞きたいことがあるんだ。私の質問に答えてくれないかな」

正直に答えたら火を消すからと続ける口調はとても穏やかだったが、声音は恐ろしいほどに冷たかった。熱さと青年に対する恐ろしさから、既に顔もあげられない状態だ。無言で頷くしか、既に道は残されていない。

「まず一つめ――」

青年が言葉を紡ぐ時間が、まるで永遠のような長さを感じた。

空気がひやりとしている。頬や露出している部分の足や腕にも、同じような冷たさを感じた。少しずつ意識が浮上し、リーベはパチリと瞳を開く。

「え……？」

そして固まった。眼前にあるのは見慣れた自室の天井ではなく、鈍い色をした鋼が広がっている。そしてそこから柱のように伸びるのは、同じ色をした格子だった。まるで檻の中のように、幾つも連なっている。

思わずがばりと起き上がった。ここは明らかに異質な場所だ。何故こんなところにいるのだろう。

「お一、目が覚めたかい？ お嬢さん」

「！」

横から聞こえた声音に、リーベはびくりと肩を震わせる。声のした方を恐る恐る振り向くと、だぼっとしたみすぼらしいローブに身を包んだ一人の男性が、陽気にこちらに向かって手を振っていた。

「なかなか起きないから、お兄さん心配しちゃったわー。うんうん、大丈夫そうでなによりだ」

「あ、あなたは……？」

そしてここはどこなのだろう。キョロキョロと周りを見回すと、同じような鉄格子がたくさん設置されている。

(こ、ここはまさか……)

リーベは漸く意識が途切れる前のできごとを思い出し、顔を真っ青に染めた。突然背後から襲われ、拐かされたのだ。リーベは慌てて両肩を確認すると、いつもの定位置にシロがない。彼を巻き込まずに済んだことに、少しだけ安堵する。

「――あら。随分呑気なものね、神鳥さん」

「！」

聞き覚えのある冷たい声音に、身体が強張った。がちがちになった身体を徐に動かすと、こちらに一人の女性が優雅な足取りでやってくるのがわかる。

豪華な銀糸の巻き毛に、切れ長の黄金の瞳。ウエストの細さを強調した真紅のドレスを身に纏う彼女は、こんなときでもやはり綺麗だと思ってしまう。

「メ、メリージア、さん……」

「ごきげんよう、リーベ。目覚めの気分はどうかしら？」

「っ！」

言葉はこちらを気にかけてのものだというのに、鋭く細められた黄金の瞳からは威圧感を感じる。

「あら、漸く自分の立場を理解したようですわね。フッフ……いい気味ですこと」

メリージアは口元を歪めながら、檻の前で堂々と腕を組む。何故攫われたはずのリーベの前に、彼女はいるのだろう。

言っている言葉の意味もよく理解できず、リーベは何も言えないままメリージアを見上げた。

「見た目は地味だけど、歌の才能は一応あるから常連のお客様もきっと喜んでくださるわ。新たな主人に、誠心誠意お仕えなさいな」

「え……？」

彼女の言葉の意味を一つ一つ拾っていくことにより、さっと血の気が引いていくのを感じた。これは、つまり――

「ああ、安心なさい。神鳥はわたくしが変わりに務めてさしあげますわ。あなた以上にね。ウッフッフッフ」

そしてメリージアは高笑いをしながら、リーベに背を向ける。

「え、メ、メリージアさ……！」

「ウフフ……フフ、アハハハハ！」

甲高い笑い声が響き渡る。リーベは彼女の声を知っていることしかできなかった。

鈍臭いリーベでも、ここまでくればどういう状況に陥ってしまったのかは理解できる。リーベは、メリージアの手によって捕われてしまったのだと。

そしてその理由は恐らく、神鳥の座をリーベから取り戻すため。

(好かれてないのはわかってたけど……こんなことされるくらい、嫌われてたんだ、わたし……)

前回の舞台は大好評だったとみな絶賛してくれたが、結局初日から最終日まで、転ばない日はなかった。昼公演では転ばずとも、夜では転んでしまったり、そして大事な千秋楽でもやはり転んでしまった。

その失態は大きく、お客さんをごっかりさせてしまっただろう。皆は歌で全て帳消しになったと言っていたが、転ばないで済むならばそれに越したことはない。

だからこそ、次の舞台では転ばないよう訓練を続けてきたのだ。舞台を使っての練習でその成果を彼女に見てもらいたかったのに、彼女はそれすら許してはくれないのか。

「おっかない子だなあ。綺麗な顔してんだから、にっこり笑ってりゃいいのに」

隣の檻にいる男性の、どこかのんびりとした声にそちらを向いた。彼は檻の中だというのに、鉄格子に寄りかかりながらあぐらをかいている。どうみてもリラックスしているようにしか見えない青年に、リーベは再び頭が混乱しそうになった。

「あ、あの……あなたも捕まってるんです……よね」

「おお、そうだと。お嬢さんと同じだ。あっはっは」

からからと笑う男に、リーベは二の句が紡げなかった。リーベは周りを見渡すが、複数置かれている檻の中に入っている人間は、リーベとこの青年のみだった。他の人間が捕まっている様子はない。

「あ、あなたはどのようにして捕まってしまったんですか……？」

「俺？ んーと、夜中に小腹が減っちゃってなあ。邸の中に何も食べ物がなかったもんだから、外に生える木の実でも採ろうと思って庭に出てみたんだよ。なのに何もなくてなあ。他の木ならと思って敷地の外を散策してたら、気づいたら檻の中ってわけさ」

「……」

リーベは何も言えなくなった。それはつまり夜中に無闇に出歩いてしまった、自業自得なのではないのかと。しかしそれを率直に言える勇気など、リーベにはない。

呆然と彼を見つめていると、青年は突然ニヤリと口の端をつりあげた。

「――ってというのは冗談でな。捕われ仲間となったお嬢さんに、何故俺が捕まったのか真実を教えてやろう」

「はい……？」

青年は深緑の瞳をキラリと光らせる。仰々しいわりに、どこかふざけているように見えるのは気のせいだろうか。

「実はな、俺の仕える偉大な主様からの命令で、人攫いの動向をずっと伺っていたのさ。こうして捕まっちゃったのも実はわざとで、人攫いの客――つまり買い手を探るといって重大な任務を果たすためなんだ」

「人攫いの……買い手？」

「おうよ。――買う人間がいるから、人攫い一つ一闇の商売は成り立ってんだ。売り手だけでなく、買い手もとっつかまえねーと完全に解決したとはいえねえだろう？」

確かに、人買いというものは求められるからこそ、行われるもの。求める者がいなくなれば、人買いは行

われなくなるだろう。逆を言えば、求める者がいる以上、人攫いがなくなることはない。

「すごいんですね、お兄さん……」

リーベは思わず感嘆の声を上げた。人買いの買い手のことを調べるといって重要なことを任されるとは、それだけ主に信頼されているのだろう。

素直に感心していると、青年は突如リーベから顔を逸らし、口元を片手で覆う。そしてぷるぷると肩を震わせ始めた。またもや突然の行動の意味がわからず、リーベは頭に疑問符を浮かべた。

「あ、あの……？」

「い、いやはや、今時珍しい、す、素直な子だ……ぶほっ！」

「……」

笑っている。リーベは頬が引きつるのを感じた。

「か、からかったんですかぁ……！ ひ、酷いです！」

「いやー、ごめんごめん。こんな突飛な話を真に受けるなんて思わなくてさー」

こんな状況でからかわれるなど思ってもおらず、リーベはわなわなと身体を震わせた。この人は、今現在自分達が囚われの身であることを理解していないのだろうか。

「わりーなーお嬢さん。他に囚われ仲間なんていないし、見張りの連中も建物の外ばかり見回って構ってくれないしで、退屈してたんだわー。からかっちゃまったお詫びに、俺のとおきをお裾分けするから、許してくれや」

彼は懐から小さな袋を取り出すと口を開かせて掌に乗せる。そして鉄格子の隙間からリーベの方へと腕を伸ばした。

「ほれ、一つだけとかケチ臭いことはいわねえさ。二つ三つ持ってっていいぜ。あ、俺の分もちゃんと残しといてくれよ」

「あ、ありがとうございます……」

薄暗いせいか、袋の中身は見えなかったが、自分の分も残せと言っているということは、悪いものではないのだろう。

リーベも鉄格子から腕を伸ばし、袋の中にあるものを一つ摘む。

「これ……焼き菓子、ですか？」

「おうよ。可愛い弟分の手作りだ。美味いぜ」

紅茶の香りがする丸い形をした焼き菓子に、思わずケルトの存在が脳裏をよぎった。

突然走り去ってしまって、さぞ驚いたことだろう。そして、リーベの姿が見つからないと、心配しているかもしれない。

(また迷惑……かけちゃった……)

リーベの体力のなさからして、ケルトからそう遠く離れた所までは行ってはいないはず。

だからシロを見つけてくれる可能性は高いが、リーベの姿がないことを彼は一体どう思うのか。

「おいおいお嬢さん、甘いもの前でそんな辛気臭い顔すんなよ。そんな顔で食ったら、焼き菓子が可哀想だろ。甘いものはな、もっとにっこにっこ笑って食べるもんだぜ」

「……ごめんなさい」

確かにこんな陰鬱な気持ちで食べるものではないだろう。いつもなら、焼き菓子を見るだけで気分は浮上するというのに。

「……もしかして、甘いもの苦手かい？ お嬢さん」

「いえ……」

「なら食ってみろよ。これ本当に美味いんだぜ。食ったら一発で笑顔になること間違いなしだ！」

「……さっきと言ってること、違いますか？」

「こまけーことは気にすんな！」

快活に笑う青年に、リーベも思わずクスリと笑みを零した。人攫いに捕われたというどうしようもない状況だというのに、少し心が軽くなった気がする。

「ありがとうございます。いただきますね」

さくさくとした食感と共に、甘い味が広がっていく。

(ケルトさんの作ってくれたのみたいに美味しい……)

幸せな甘さに、頬が綻んでいくのがわかる。本当に現金なものだと、内心苦笑した。どんなに落ち込んでいても、焼き菓子を食べるだけで気分が浮上するのだから。

「やっといい顔になったじゃねえか。ほら、もう一個食うか？」

「あ、いただきます」

鉄格子の隙間から腕を伸ばし、袋に手を入れる。そして二つ目を口へと運んだときだった。

コツコツと聞こえてくる複数の足音。それらは徐々にリーベ達のいる檻へと近づいてくる。ドキリと心臓の音が跳ねた。

檻の前に、黒で統一された服を纏った男達が立ち並ぶ。一様に顔には鉄の仮面がつけられていて、それがずらりと並んでいるのだから異様な光景だった。ぞわりと背筋に悪寒が走る。

「たは一……せっかくお嬢さんの機嫌をよくさせたのに、空気読めっての」

青年が額に手を当てながら、大きく嘆息する。

仮面を被った男達の中に、一人だけ顔に何もつけていない人物がいた。恰幅のいい中年の男性で、纏っているゆったりとしたシャツは、遠めで見ても上質の絹が使われているとわかる、な高価もの。

「今回は二人だけか……まあいい。連れ出せ」

「はっ！」

男が命じると、仮面の男達はリーベと青年のいる檻の鍵に触れる。がちゃりと鍵が開く音と共に、鉄格子の扉が大きく口をあけた。

「立て、小娘」

「……！」

檻の中に男達が入り込み、リーベは身体が硬直していくのがわかった。不気味な仮面に取り囲まれ、何も言うことができない。

「ちっ……。おい」

「！ い、痛っ！」

ぶるぶると怯えるリーベに痺れをきらしたのか、腕を思い切り捕まれ、無理やり立たされる。ずきりと肩から痛みが発し、表情が歪む。

「おいおい、女の子はもっと丁寧に扱えよお前ら」

青年の方を見やると、彼もまた仮面の男達に両腕を捕まれ、拘束されていた。手荒な扱いを受けているリーベを見て顔を顰めるが、リーベとは違いどこか余裕を感じさせる。どうして彼はああも冷静でいられるのだろう。

「足を動かせ」

「うう……」

両腕を捕まれた状態で檻から出される。肩から腕にかけての痛みが激しい。このまま腕を掴まれ続けたら、腕がとれてしまうのではないだろうか。想像してしまい、頭からさあっと血の気が引いていく。

「よし、連れて行け」

「は！」

男の号令と共に、腕を強く引っ張られる。周りに立つ仮面が恐ろしく、足はぶるぶると震えてろくに動かない。そのせいで腕を引く力は粗雑で、肩が悲鳴を上げ続けた。

「だからよ、もっと優しくしてやんなっての。怖がってるし痛がって――」

見兼ねた青年が、再び仮面の男達を諫めようとする。

バリーン！

しかしそれは、突如鳴り響いた甲高くけたたましい音に遮られた。それは何かが弾け飛んだ音。音の高さからして、高い位置にある窓ガラスが破られたのだろうか。

「わ、なんだこいつら！」

「やめろ！ こっちにくるな！」

リーベの予想は当たり、穴が空いたであろう上部から蝙蝠が姿を現し、その数はどんどん増えに増えていく。そして仮面の男達のすぐ近くを飛び回っては羽を当て、そして頭上に引くを繰り返した。

それはリーベの腕を掴んでいた男達も例外ではなく、彼らは迫り来る蝙蝠から身を守るため、リーベから腕を離れた。しかしそれに気づいても、群がる蝙蝠もまた恐怖の対象でしかなく、リーベはその場でへたりこんでしまう。

「この統制された動き……まさか……」

青年が何かを呟いているが、蝙蝠の羽音が煩く聞き取ることができない。リーベはただ、座り込んだ姿勢のまま後ずさった。

ドオオン！

そして再び鳴り響く轟音。それと共に、壁がガラガラと音を立てながら崩壊していく。土ぼこりが立ち上り、その後ろから黒い影が飛び出てきた。

「な、なんだあれは……！」

土煙の中から伸びてきたのは、太い木の腕だった。まるで蛇のような撓（しな）をつくりながら動き、それが更に複数本、開いた穴から侵入してくる。

「ぐはっ……！」

その木の腕は室内で大きく広がり、まるでムチのように仮面の男達に襲いかかった。リーベの近くに立っていた仮面の男も、側面が肩へと当たり、弾き飛ばされる。

「――リーベ！」

「！」

リーベの名を呼ぶ声に、はっと顔を上げる。

未だ伸びる木の腕を伝って、駆けてくる人影があった。こちらに向かって近づくにつれ、彼の姿が鮮明にわかるようになっていく。そしてうねる枝の上から飛び降り、床へと着地した彼の名をリーベは叫んだ。

「ケルトさん……！」

見間違えるはずがない。赤茶の短髪に琥珀色の瞳。別れてしまったときとそのままの格好で、ケルトはリーベを見据えながら立ち上がる。

「ど、どこから入ってきやがった、小僧!？」

「……」

警戒する仮面達に、ケルトは一瞥した。そしてまるでボソリと呟くように口を開く。

「敵意のある者を、薙ぎ払え」

刹那、木々たちがまるで水を得た魚のように、動きが更に俊敏になる。蝙蝠が纏わりついているせいでろくに動くことのできない仮面達は、一人、また一人と木の鞭に薙ぎ払われていく。男の低い呻き声が広

がっていった。

——ピィ。

「！ シロ……！」

リーベの足元に現れた、真っ白な小鳥。肩羽までしかない右側の羽は、間違いなくシロだ。

「どうしてここに……あ、そうかケルトさんに……！」

きっとケルトがシロを肩に乗せ、ここまで一緒に連れてきてくれたのだろう。手を伸ばすと、シロはぴよこんと飛び乗り、腕を伝ってリーベの肩へと移動した。

「この……くそガキがあ……！」

シロからケルトの方に視線を戻すと、仮面の一人が棒を片手に、ケルトに襲いかかろうとしているところだった。流石に数が多かったせいか、未だに木々に薙ぎ払われていない仮面の男がちらほらいる。この男もまたその一人だったのだろう。

「ケルトさん！ 危ない！」

ケルトは襲いかかろうとしてくる仮面の男に対し、なんの対応もしていない。避けようとするどころか、視界にすら映してはいなかった。流石に気づいていないということはないはずなのに。振りかざされた棒を見て、リーベは思わずぎゅっと眼を瞑った。

「ぐはっ……！」

しかし聞こえてきたのはケルトの呻き声ではなかった。そっと眼を開けると、ケルトは変わらず立っており、その隣に見覚えのある青年が腰に手を当てて仁王立ちしていた。

「まったくケルトよお……俺の段取りを壊すなっつ。ただ壊滅させるだけじゃ意味ねえってのは、お前だっ
てわかってただろ？」

「……すまない、ファステル」

リーベと共に捕われていた青年だった。いつの間にか仮面の男達の拘束から逃れたらしい。それと会話の内容から察するに、彼らは知り合いなのだろうか。

「まあこうなっちまったもんはしゃあねえ。——加勢するぜ。派手に暴れてやろうや」

「——ああ」

ファステルと呼ばれた青年は二つと口の端をつりあげると、片手を大きく振り上げた。

「風よ、俺達以外の野郎共を吹き飛ばしちまいな！」

突如、室内だというのに頬を撫でる風が吹き始めた。それは急速に勢いを増し、仮面達に襲いかかる。

「蝙蝠たちよ、出入り口を封鎖してくれ」

同時に、仮面達に群がっていた蝙蝠が離れ、出入り口の方角へ一斉に飛んでいく。

(すごい、けど……一体どうなって……?)

二人はまるで、風や蝙蝠を自在に操っているかのよう。しかし、普通の人間にそんなことができるはずもない。

それでも他に説明のしようがなく、リーベは頭が混乱していくのを感じた。

そのせいで、背後にそろりと近づいてくる影に気づけなかった。

「わ！」

突然腕を掴まれ引っ張られ、首に腕が回される。そしてキラリと鈍く光る鋭い切っ先が頬を掠めた。刃物だ。

「ひっ……！」

「これを見ろ！ これ以上暴れれば、この娘の命はない！」

リーベの首に回された腕は、上質の絹で出来たゆったりとした袖に覆われている。そういえば木の腕や

蝙蝠の襲撃を受けていたのは、仮面の男達ばかりであった。この男の存在をすっかり忘れてしまっていた。

「リーベ！」

「お嬢さん！」

ケルトとファステルが、こちらに気づいて焦り声をあげた。しかしリーベは頬に僅かに当たる刃物への恐怖が募り、二人のことを気に掛ける余裕がない。

――ピィ！ ピィ！

「チッ、煩い鳥だ」

リーベの肩の上で大きく鳴いていたシロが、背後の男により叩き落とされてしまう。べしゃりと床に落ちてしまったシロに慌てて手を伸ばそうとするが、首に回された腕に阻止されてしまう。

「この娘を殺されたくないければ、両手を挙げて大人しくしろ！ あの憎らしい蝙蝠どもや植物もな！」

「……無抵抗のお嬢さんを乱暴に扱うだけでなく人質にするなんざ、ゲスの極みだなあ、おい……！」

「ハハハハハハ！ なんとでもいえ！」

苦々しい表情を浮かべるファステルと、無言のまま男を睨み付けているケルト。

出入り口付近を飛んでいた蝙蝠たちが、まばらに散り始めた。室内にいることは変わらないが、彼らがいたせいで塞がれていた出入り口が、ぽっかりと穴を開ける。そして先ほどまで吹き荒れていた風が、完全に止んだ。

「さあお前達、この二人を捕らえるのだ！」

抵抗をするのを止めた二人を、未だ意識の残っている仮面達に取り押さえる。

「ケルトさん！ お兄さん……！」

「ハハハハハハハ！ 風を操る化け物に、動植物を操る化け物！ こいつは高く売れるぞ！ フハハハハハハ！」

興奮が露になった甲高い嘲笑が、リーベの耳に突き刺さる。

(わ、わたしが捕まっちゃったせいだ……)

リーベが人質となってしまったせいで、彼らは形勢を逆転されてしまった。彼らの持つ特殊な力で仮面達を追い詰めていたのに。リーベがこうして捕まることさえなければ、彼らは確実にこの場を制圧できただろう。

「体の傷は服で隠せば問題なからう……お前たち、邪魔をしてくれた礼をしてやれ」

「……！」

二人を囲った仮面の男達は、彼らの背中を蹴り飛ばして床へと転がした。そのせいで二人の姿が完全に仮面達に覆われ、見えなくなってしまう。リーベに聞こえるのは、鈍い音と二人の呻き声。複数から蹴られているのだとすぐにわかり、頭からどンドン血の気が引いていく。

「や、やめ……！」

「大人しくしている。顔に傷などつけたくないだろ？ ん？」

これみよがしに刃物を突きつけられ、恐怖に身を竦ませる。だが、リーベ以上に彼らの方が傷ついているはずだ。刃物などに怯えている場合ではない。リーベが拘束から逃れることができれば、きっと形勢は好転するはず。

「はな……離して！」

「大人しくしていると言っているだろう、小娘！」

じたばたともがいてみるものの、非力なリーベと男の力の差は圧倒的だった。首に回された腕の力は強く、外すことができない。

(どうしよう……！ このままじゃケルトさんが……！)

失礼な態度をとったにも関わらず、彼はリーベのことを助けに来てくれた。それなのにリーベの失態で、彼を危険な目に合わせている。このままでは怪我では済まなくなってしまうかもしれない。どうすれば、ケルトを助けられるだろうか。

——彼らを、助けたい？

「!？」

突然聞こえた場違いな落ち着いた声音。リーベは辺りを見回した。しかし、どこにもそれらしき人物は見当たらない。

「何をきょろきょろ首を動かしている、小娘」

「……！」

どうやら、背後の男にはリーベの聞こえた声は聞こえなかったらしい。しかし幻聴にしては、はっきりと頭に音声が残っている。一体、今のは誰の声なのだろう。

——君には、彼らを助ける力があるよ。

「！」

再び聞こえた声に、リーベはドキドキと胸を高鳴らせた。普段ならば姿無き人物の声など恐ろしくて堪らないだろうに、何故かこの声のことを怖いとは思わない。自然と、リーベは頭の中に響く声に耳を傾けていた。

——彼らを助けたいという気持ちを込めて、歌ってごらん。

「歌う……？」

——そう。思いを込めて、ね。

どうして歌うことが、彼らを助けることに繋がるのだろうか。そんな疑問が沸きあがった刹那、眼前に透き通った人物が現れる。襟首で揃えられた黒髪に、同じ色の丸い瞳。

その姿はまさしく——

(わたし……?)

鏡で見慣れたリーベ自身だった。

白く柔らかな長衣に身を包んでいる彼女(・・)は、まっすぐ腕を伸ばしてニコリと微笑む。

——歌って、リーベ。大丈夫、君ならできるから。

「——！」

その姿はすぐに宙に解けて消えてしまう。だが同時に、リーベの心はストンと落ち着きを取り戻していた。

(歌ってみよう……！ わたしは歌い手なんだから……！)

リーベの唯一にして最大の特技。これでケルトが助かるというのなら、例え妨害されたとしても唄いきってみせよう。彼らを助けたいと想いを乗せて。

スウと大きく息を吸い込むと頭の中にずっと調(しらべ)が浮かび上がる。

「——わたしは今日も歌を唄う」

それは、お気に入りの『神鳥の唄』。神の心を癒すために唄い続けたという、神鳥の想いを表現した歌。何故この歌が浮かんだのだろう。

「全てに心をくたく偉大なあなたのために」

ふと、初めてケルトと出会った日のことを思い出す。彼に請われて唄ったのは、確かこの歌だった。

「あなたの心を癒したい。あなたの心をほぐしたい」

この歌が頭によぎったのは、ケルトとの思い出の一つだからだろうか。

「わたしは唄うよ何度でも。わたしの歌であなたが幸せになってくれるのならば」

あとワンフレーズで、歌は終わる。リーベはケルトと過ごした日々に関心を馳せた。

歌って、取り留めのない話をして、笑い合っただけ。それはとても楽しい毎日だった。だが数日後、ケルトは王都へと戻ってしまう。

これはケルトに捧げる最後の歌となる。ならば、幸せだった日々の想いも歌にこめよう。わたしは貴方に会えてよかったと。じわりと身体から熱が発していくのを感じた。

「それがわたしの最高の幸せ」

妨害されるのではと思った歌は、最後まで邪魔が入ることなく全てを唄いきった。

突如、ふらりと足元がふらついた。身体を支えることができず、そのままペタンと尻もちをつく。
(あれ……？ わたし捕まっていたんじゃないか……?)

ぼうっとする頭で、いつの間にか首に回されていた腕がないことに気づいた。そしてふと、リーベを拘束していたであろう男のいる方を見ると、彼は険しい顔をしながら両腕を下げた状態でリーベを睨んでいる。

「き、さま……い、一体何をした……！」

「え？」

何をされたかと言われたら、歌を唄ったとしか言い様がない。そしてリーベは、ふらふらとする己の身体を倒れないように力を入れるので精一杯で、彼の身に何が起きたのか理解することもできなかった。

「今すぐリーベを安全な場所へ！」

離れた所からケルトの声が聞こえた。そうだ、彼は無事なのだろうかと振り返る。

刹那、リーベの腰にしゅるりと撓った木の腕が巻きついた。そして感じるのは浮遊感。床が遠く離れ、体が宙に浮いている。いや、木の腕によって持ち上げられたという方が正しいだろう。

「神鳥のお嬢さんさえ取りもどしちまえば、こっちのモンだ！」

男達の手の届くことのない、安全な所から見下ろせる位置にリーベはいた。ケルトもファステルも、両の足でしっかりと床を踏みしめている。

別の木の腕が動き、リーベを捕まえていた男に巻きついていった。リーベのように腰だけではなく、胸部から脛までぐるぐると。仮面の男達も、一人残らず同じように束縛されていく。

「リーベ！」

ケルトに名を呼ばれると、するりと高度が下降する。リーベを気遣ってか、速度は非常にゆっくりだ。床に足がつくと、木の腕はしゅるりと音を立ててリーベから離れていった。同時に支えを失ったリーベは、ふらりと身体が倒れそうになる。

「！」

倒れる衝撃を覚悟したが、それは訪れなかった。しっかりとした人の腕が、リーベの身体を支えてくれている。

「大丈夫か、リーベ!？」

「ケルト……さん」

背中に腕を回され、仰向けになったリーベを覗くケルトの表情は焦りを帯びていた。きっと心配してくれているのだろう。リーベは視線をケルトの胸部の方へと移す。

「ケルトさんも……怪我は？」

彼は何度も蹴られていた。そのせいか、いつもきっちりと服を着ているのに、ところどころ乱れている。だが服の上からでは、怪我の有無はわからない。

「……それは治った。リーベのおかげだ。それよりも――」

「そっか……よかった、です……」

怪我が治った（・・・）ならばもう大丈夫だろう。リーベは安堵から、薄くなりつつあった意識を完全に

手放す。

「リーベ！ どうしたんだ、リーベ！」

「落ち着けケルト。あれだけの力を使ったんだ、きっと身体が疲れちまったんだよ。――しっかしすげえな、神鳥の力は。歌で敵さんの動きを封じると同時に、俺たちの怪我も治しちまうんだからよ」

取り乱すケルトをファステルが宥める。

意識を失ったリーベの表情は、とても安らかなものだった。

メリージアはそわそわと落ち着きなく、自室の中を歩き回っていた。

既にもう就寝時間を回っており、美容のためにももう寝なければならないのだが、高揚する気分が、どうしてもそれを阻んでしまう。

(だってわたくしがまた神鳥になるんですもの。ああ、明日がとても待ち遠しいわ)

リーベは近日中、どこぞの貴族に売られることとなるだろう。そしてリーベのいなくなったミュージアムで神鳥を務められるのは、メリージアしかいない。満員となった客席の歓声を一身に受ける一時を想像するだけで、胸が高鳴るのを感じた。

「お嬢様、まだ起きてらっしゃいますか!? お嬢様！」

しかし突然扉の外からノックする音と同時に、叫び散らす侍女の無粋な声が水を差した。メリージアは一つ文句を言ってやろうと扉を勢いよく開ける。

「ちょっと、今何時だと思っ――」

侍女に投げかけようとした雑言が、思わず途中で途切れた。

「こんばんは、コントクト家のメリージア嬢。夜分遅くに大変申し訳ない」

扉の前に立っていたのは侍女だけではなかった。高い背丈から見下ろしてくる瞳は紅蓮の輝きを放ち、少し長めの髪は同じく燃え盛る炎のような鮮やかな赤。すっきりと整った顔立ちと白磁の肌を持つ目の前の男性は、己の美しさに自信を持っているメリージアでさえ美しいと思ってしまう美貌を誇っていた。

(な、なんて美しい方……！)

幸せな気分にも水を差されたことなど、すぐに頭の片隅へと追いやられる。先ほどとはまた違った胸の高鳴りを覚えた。

「君と少し話がしたくて、家の人に無理を言ってしまった。突然レディの部屋を訪ねるという無礼を、どうか許してほしい」

「そ、そんなこと……！」

纏う高貴な雰囲気からして、かれは上級貴族だろうか。メリージアは嬉々としながら自室にあるソファを勧め、メリージアもその向かいに腰掛ける。

(わたくしに話とは何でしょう？ ……ま、まさかわたくしを妻に娶るためにいらっしゃったのでは……!?)

ああでも、わたくしには神鳥を務めるという使命が……！ これもこれも、わたくしの持つ美貌と才能のせいね。美しきは罪だわ……)

コントクト商家は貴族ではないが、貴族も軽視はできないほどの財を持ち合わせている。それにメリージアの美貌と歌の才能も合わされば、引く手数多というものだ。

一代で今の財を築き上げた父も素晴らしいが、メリージアもまた、そんな父に恥じない立派な娘であろう。母譲りの美しい容姿に高い教養は貴族令嬢にも引けをとらず、父の仕事内容にも理解がある。

「侍女に何か飲み物を入れさせますわ。――えっと、お名前をお聞きしてもよろしいでしょうか」

彼をもてなすため、彼の好きな飲み物を入れさせようと思ったが、ふと彼の名前をまだ聞いていないことを思い出す。

「失敬、まだ私が名乗っていなかったね。私の名はサフィラス。サフィラス・デネリオ・リファラムド」

「リファラムド……!? ま、まさか貴方様は……！」

リファラムドは、フォーリエストや楽都セーレーンが属する王国の名。それを家名として名乗れる存在は、王国内でも極少数に限られている。

「そう、私はリファラムド王国の末の王子だ。でも、だからと畏まる必要はないよ」

目の前の青年がとても麗しい理由がよくわかった。鮮やかな紅蓮の髪と瞳も、整った顔立ちも、王子だからこそキラキラと輝いている。

(お、王子様がわたくしに求婚だなんて……！)

彼の話がメリージアとの縁談と決まったわけではないが、これはもう確定したと言っていいだろう。夜分遅くにわざわざ王子様ご本人が訪ねて来てくれたのだ。それ以外にありえない。

「――その必要は全く無い話だからね」

「え……？」

急にサフィラスの声のトーンが下がった。冷ややかになったともいう。優しい雰囲気纏っていたはずの空気が、ピンと張り詰めたものに変貌し、思わず息を呑む。

「先ほど、とある男が捕らえられた。その男は表ではフォーリエストを貴族のための保養地として開拓していたが、住民を配下の者に攫わせ、貴族に売りつけるという裏の顔を持っている」

「……！」

今までにないほどの焦燥がメリージアを襲う。バクバクと心臓がいやに大きな音を立てている。サフィラスの言葉は、まさしく――

「お、お父様が捕まってしまったというのですか!?!」

メリージアは父がどんな仕事に手を出しているか、知っている(……)。それが違法であることも。もしも発覚してしまったときにどうになってしまうのかも。

だが、父はいつも発覚する心配なんてないとメリージアに自慢げに話してくれていた。実際、今までそんな素振りも見ることが無い。だから安心しきっていたのに。

「ち、父は一体、どうになってしまうのです!?!」

「――なるほど、君は父君の仕事がどんなものか知っていた、ということだね」

「そ、それは……！」

父のことが気がかりになり、思わずサフィラスに縋った。だが彼はメリージアの問いに答えるどころか、逆に冷ややかな視線を向けてくる。更に痛いところを突かれた。このままでは、メリージアも父のように捕まってしまうかもしれない。それは嫌だ。捕まってしまったら、せっかく手に入れた神鳥の座が、永遠に手に入らなくなってしまう。

「ち、父から仕事の話をよく聞かされていまして……！ で、ですが、わたくし自身は一度も父の仕事に直接関わったことはございませんわ！ 本当です！」

淑女らしくかぬ大声をあげてしまうが、身の潔白を証明するためだ。今は身の振り方を気にしている場合ではない。自然と熱がこもってしまうのは、当然のこと。

「君は一切、父君の裏の仕事について関与していないと」

「そ、そうですわ！」

メリージアの必死の説得がサフィラスに通じたのだろう。ほっと胸を撫で下ろす。

「――それはおかしいね。君の父親を捕えたときに保護したお嬢さんが、牢の中で君と会ったと言っていたよ。全く関与してないはずの君が、どうしてそんなところに？」

「！」

しかし再び息が詰まったと同時に瞠目した。リーベは、助けられてしまったというのか。せっかく、二

度とミュージアムに戻れないよう取り計らったというのに。

本当に父の配下の者達は何をしていたのか。彼らさえしっかりしていれば父が捕まるということも、リーベが救出されるということも起きなかつたらう。

(あの役立たず……！ お父様から高い給金を貰っているというのに！ 金額分、しっかりと働かないとは不屈きな！)

心の中で盛大に悪態をつくが、今彼らはこの場にはいない。もしもいたら、即刻首にしていたというのに。

(それにリーベが助かったということは、ミュージアムに戻ってくるということ。それだけでなく、サフィラス様にわたくしのことを悪し様に伝え、わたくしをミュージアムから追放するに決まっているわ……！)

事実、リーベはサフィラスにメリージアのことを告げ口している。そしてサフィラスはそれを信じてしまった。早く、悪印象を解消しなければ。焦りが胸中に広がっていく。

「それはでたらめですわ！ あの娘が、リーベがわたくしを陥れようとするための虚言です！ 自分の神鳥の地位を脅かすわたくしのことを、あの娘は前々から気に入らないと零しておりましたもの！」

実際リーベから直接聞いたことなどないが、リーベはメリージアのことを神鳥を狙っている憎らしい相手だと思っているはずだ。だからこれは決して嘘ではない。

紅蓮の瞳をまっすぐ見つめるが、その視線に優しさが再び籠ることはない。メリージアは思わずたじろいだ。

「……私は、保護したお嬢さんがリーベさんだなんて、一言も言っていないんだけどね。何故君は捕まっていたのがリーベさんだとわかったんだい？」

「……！」

「それと、さっき一つ嘘をつかせてもらったよ。リーベさんを保護したのは本当だけど、彼女は気絶していて未だ目を覚ましてはいない。――陥れようとしているのはどちらなのか、明白だな」

まるで頭から冷水をかけられたかのような寒気が、メリージアを襲った。鋭い刃物のようなサフィラスの言葉が、メリージアの身体に深々と突き刺さっていく。

「わ、わたくしは……！」

「これ以上の戯言はもう結構。君自身に黒だと自白させることができただけで十分だ。――覚悟しておけ。我らが同胞を私怨で傷つけた罪を、私は決して許すことはしない」

炎のごとき色をしているのに、紅蓮の瞳は氷の様な冷気を纏っているかのようにだった。

サフィラスはソファから立ち上がると、無言のままメリージアの横を通り過ぎる。

「お、お待ちくださいませ……！」

メリージアは慌ててサフィラスを引きとめようと手を伸ばすが、その手は空しく宙をきって終わってしまう。

そして一度もこちらを振り返ることなく、サフィラスはメリージアの部屋から退出する。絶望に染まったメリージアだけが、部屋に取り残された。

目の前には、既に見慣れたはずの庭の柵。まるで中を覆い隠すように生えている木々。そのどちらも、以前のままだ。ケルトに会いに来ていたときと。

それもそのはず。あの日から今日まで、まだ十日ほどしか経っていない。そんな短時間で庭の風景はそう様変わりすることはないだろう。

人買いの牢屋で気を失ったリーベが目覚めたのは、見慣れた自室だった。ゆっくり起き上がると、ベッドの真横にある椅子に座っていたフォクノと目があい、心配しただる馬鹿、と怒られる。その声を聞きつけたのか、すぐさま部屋に歌い手の先輩たちや他の団員たちが集まってきて、次々とリーベが目覚めたことを喜んでくれた。

わいわいと賑やかになっていく部屋を落ち着かせたのは、オーナーのユナフィアだった。彼女はリーベが目覚めたのだから、各自仕事に戻るように伝える。公演まで残り二日を切っているのだからと。

ユナフィアの鶴の一声により、団員たちはちらほらと部屋から出て行った。ユナフィアとフォクノの二人だけが、その場に残される。

「本当に無事でよかったわ、リーベ」

「全くだ。あの超絶美人なお兄さんが詳しい事情を全部説明してくれたんだけど、お嬢様のせいで攫われたって聞いたときは吃驚したよ」

聞くとところに寄ると、メリージアとそしてコントクト商家の主は、人身売買の罪で昨夜のうちに全員捕まったらしい。元々コントクト商家は楽都サーレーンでも人買いに手を出していた疑惑があり、サーレーンで続けるのが厳しくなったため、フォーリエストに拠点を移したのだという。

一年程前から発生していた浮浪者が突然失踪する事件も、裏で彼らが糸を引いていたようだ。始めはいなくなっても深く追求されない人間を、そして次第に一般人を。イグニアスはその事件を重く見た王政府により、彼らを調べるために派遣されたのだという。

「フォクノ、その……ケルトさんがどうなったかは、聞いてない？」

「ケルトさんなら、リーベをベッドに寝かせてすぐに自分のお屋敷に帰ってったよ。――そんなに気になるなら、あの美人のお兄さんに聞いてみればいいんじゃないかな」

「え？」

「……今、応接室に来ているのよ、彼。リーベに大事な話があるとね」

今度はユナフィアも同席せずに、話しがしたいのだとか。本音を言えば断りたかったらしいが、リーベを助けてくれた恩人でもあるため、無碍にはできなかったと告げる。

「起きたばかりで申し訳ないけれど、応接室へ来てもらっていいかしら」

「は、はい。わかりました……」

イグニアスと会うのはこれで三度目である。しかし、あの美麗すぎる彼との対面はただ緊張するしかなく、ばくばくと心臓が大きな音を立てている。

それでももしかしたらという期待を込めて応接室の扉をノックし開くと、リーベはしょんぼりと肩を落とすところを寸でのところで堪えた。

「こんにちはリーベさん。身体におかしなところはないかしら？」

応接室にいたのはイグニアスだけはなかった。青い髪をシニヨンにした、侍女のララリエ。以前会ったときも彼女がついていたのだから、今回もまたララリエがお付として来るのは当然とも言える。

ただ、そこに望む人の姿がないことが、残念だっただけで。

「だ、大丈夫です。あ、ありがとうございます」

きっと彼女もまた、リーベのことを心配してくれていたのだろう。軽く目を細めて微笑むラリエは大変美しく、思わず見惚れてしまう。

「元気そうでこちらも安心したよ。怖い目に合わせてしまって申し訳なかった」

「い、いえ……！」

相変わらずキラキラと、まるで光っているかのような美貌を放つイグニアスに、リーベは及び腰になる。彼の場合は逆に綺麗すぎて、近づくだけでも大変恐れ多いと思ってしまうのはどうしようもない。

「来てくれてありがとう。――少し長い話になるだろうから、君も座るといい」

「あ、ありがとうございます……」

リーベはイグニアスの斜め向かいに腰をかけた。流石に彼の真正面に座る勇氣はない。

「あ、あの……お話というのは……？」

ユナフィアが言うには、大事な話があるらしいが、リーベにはさっぱり検討もつかない。こうして彼が会いにくる理由も。

「……どこから話しましょうか、サフィラス様」

「うーん、突飛な話だから悩むね」

「……サフィラス様？」

ラリエが呼んだ名に、リーベは首を傾げた。彼の名前はイグニアスだとリーベは聞いている。なのに、彼はサフィラスという呼び名に戸惑うことなく応えていた。

「ああ、丁度いいからそこから話そう。私の今（・）の名前はサフィラス。サフィラス・デネリオ・リファラムド。この国の第三王子なんだ」

「え……？」

第三王子、という言葉がリーベの脳内に駆け巡る。同時に全身からサアッと血の気が引いていった。目の前に、決して無礼を働いてはならない尊い御身がいる。己が彼の前でしでかした醜態に、リーベは今すぐこの場から消えたくなくなった。

「す、すいません！ お、王子様だとし、知らなかったばかりに、わ、わたし、貴方様に大変失礼なこと……！」

全力で頭を下げる。がちんと額とテーブルがぶつかる音が鳴ると同時に、痛みが額に走った。以前邸で犯した失態と全く同じことをして、リーベは痛みと羞恥に顔を隠すように額を押さえた。

「だ、大丈夫!？」

「す、すいません……」

ラリエがリーベの方へ寄り、湿ったハンカチを差し出してくれた。それを受け取り額に当てると、ひんやりとした気持ちよさが伝わってくる。

「落ち着いたかい、リーベさん」

「あ、はい……すいません……」

穏やかに笑うサフィラスに、またやってしまったとリーベは内心縮こまる。しかし同時に動転した心が落ち着いてきたのも確かだ。彼はリーベを詰ることなく、いつもと変わらない笑みを向けてくれている。もう大丈夫ですと、ハンカチをラリエに返した。

「君が気にすることはないよ。フォーリエストへ来たのはお忍びだから、身分を隠していたんだ。――イグニアスという名も、偽名というわけではないのだけどね」

「え？」

サフィラスが本名ならば、イグニアスは本当の名ではないはずだ。なのにこちらも偽の名前ではないという。それは一体、どういうことなのだろう。

「イグニアスは、かつての私の名なんだ。まだ天界がこの世に存在していた頃の、遠い昔の話ではあるけど」
「へ……？」

思わず変な声が出てしまい、リーベは慌てて口を押さえた。

神話に出てくる炎を操る神がかつての己だと、サフィラスはそう言っている。理解はできてもそれが信じられるかどうかは別の問題だ。とてもでもないが、そんな話を信じることはできなかった。しかし彼の表情からして、リーベをからかうために与太話をしているという風でもない。

それを悟ったのか、サフィラスがクスリと苦笑する。

「突然そんなことを言われても信じられるわけがないよね。――私が火神将イグニアスだという証拠を見せようか」

サフィラスは腕をまっすぐリーベへと伸ばし、掌を見せる。思わず彼の手を注視したリーベは、瞳を大きく見開くこととなった。

「て、手から火が……！」

彼の掌から、メラメラと彼の髪と同じ色をした炎が揺らめいている。彼の手には燃料のようなものが握られていないにも関わらず。

「これが私の『神』としての力だよ。炎を生み出し、自在に操ることができる」

リーベの視線はサフィラスの手に釘付けになったまま動かない。こうやって実際目にしてしまった以上、彼の話は真実だと受け止めるしかないだろう。

「それと彼女、ララリエもまた私と同じ、かつて神だった者だ。ララから借りたハンカチ、濡れていただろう？ 水のないこの部屋で、どうして水分を含んでいたと思う？」

「あ……」

言われてみれば、今この場に水の入った桶のようなものはない。ララリエの方に視線をやると、彼女もまたまっすぐ腕を伸ばし、掌を広げる。ゴポリと音を立てながら、水の塊がその手の上に現れた。

「わたしは水神将アクアリア。この通り、水を操る力があるの」

「それと、リーベさんと一緒に捕まっていたファステルもそう。彼は風神将ゼファイル。風を意のままに操る力を持つ」

共に牢に捕われていた青年を思い出す。彼は自分で風を操っているかのような素振りを見せていたが、それは本当に風を操っていたのだ。

そして何故彼が捕われていたのかといえば、サフィラスの命で潜入調査をしていたらしい。コントクト商家以外に人身売買に手を出している者を把握するために。彼が冗談だと言っていたことは、実は本当のことだったのだ。

「あ、あの……それじゃあもしかして、ケルトさんも……？」

あの場所で大暴れしていた蝙蝠や木々は、ケルトの言葉に従っていた。そしてケルトから聞いた四神将と呼ばれていた神々の名で、まだ出てきていない者が一人いる。

「そう、察しの通りだよ。ケルトは自然を愛し愛される地神将、グラディオンの生まれ変わりなんだ」

それならば、彼が植物のことを深く理解しているような口ぶりに納得がいく。

彼自身が語っていた地神将は、動植物の声を聞くことができるということだ。だから草木が喜んでいることもわかったのだろう。

「あ、あの……どうして天界にいるはずの神様の皆さんが、下界に……？」

そう切り出してから、サフィラスの言葉を思い出してはっとした。『まだ、この世に天界が存在していた頃』。過去形であるそれはつまり、今現在は存在しないことを意味している。

「神々が暮らしていた天界は、今はもう存在しないんだ。――天界を創造し、統括していた真の神である創

造神、クリエルト様が崩御してしまったせいだね。天界が完全に崩壊する前に、神々には二つの選択肢が残された。天界と共に自身も消滅するか——あるいは下界の輪廻転生の輪に乗り、人間として転生するか」

神から人間への転生。神話に全く造詣がないリーベには、いまいちピンとこない。だが、不思議な力を持つ『神』を名乗る彼らが、こうしてここにいることの辻褄だけは合っているように思えた。

「天界が消滅してから既に永い時が経っている。それだけ時間が経ってしまえば、信仰も失われてしまうのも無理はないよね……クリエルト様に捧げられた唄だけは残っていてくれたようだけど」

苦笑を浮かべるサフィラスの表情は、少し寂しげだった。リーベの周りにはいる人の大半が、神話のことなどほとんど知らないだろう。せいぜい『神鳥』の語源くらいだろうか、かろうじて解るといえるのは。

「あ、あの……ど、どうしてわたしにそんな話を……？」

今の話は、軽々しく人に話していいものではないと、リーベにもわかる。なのにどうしてサフィラスはリーベに教えてくれたのだろう。

「君も同じだからさ。リーベさんも神から『転生』した人間なんだよ」

「……！」

衝撃的な言葉に、リーベは言葉を発することができない。

「で、でも、わ、わたしっ……み、皆さんのような、ふ、不思議な力なんて——」

「いいや、君は昨夜『力』を使っているよ。その素晴らしい唄声でケルトとファステルの傷を癒し、同時に敵対していたコントクトの者たちの動きを封じたというじゃないか」

「！」

サフィラスの言葉に、昨夜の出来事が呼び起される。唄い終わった後熱くなった身体。固まった動かなくなったリーベを捕えていたはずの男。そして怪我を『治った』と言ったケルト。

「その力は『呪歌（じゅか）』と呼ばれている。想いを唄に乗せて、様々な効果を発揮させることができる力だよ。そして呪歌を使うことができる神は、たった一人——かつてクリエルト様のお心を癒すために歌い続けた『神鳥』と呼ばれし歌の女神、リエーネ。リーベ、君は彼女の生まれ変わりなんだよ」

「わ、わたしが……？」

リーベは困惑気味に俯いた。はっきりいって、突然すぎて理解の範疇を越えている。

「あの、でも……わたしには皆さんみたいに過去の記憶は……」

「ああ、大抵の『神』たちは、記憶を継承せずに転生している。私たちのように、記憶を持ったまま転生している者の方が少ないんだ。記憶の保持は、己の力の大半を削ってしまうからね。記憶を残すと、神としての力を失ってしまう。逆に記憶を残さなければ、神だった頃と同じ力が扱える。記憶を継承し、且つ力が使えるのは、私たちのような強い力を持った上位の神々に限られているんだ。リエーネも力が強い女神だったから記憶を継承することもできたのだろうけど、どうやら彼女は記憶を残さないことを選んだらしいね」

転生を選んだ神々が、それぞれ記憶の継承まで選んだかどうかまでは把握していないらしい。

（もしかして、あのとき聞こえた『声』って……まさか、あの人がリエーネ、さん？）

暴行を受けるケルトたちを助けたいと願ったとき、どこからともなく聞こえた声と、うっすらと浮かんだリーベと瓜二つの姿をした少女。

「……そうだね、きっと彼女はリエーネだ。転生するとしても魂は神のままだから、以前の面影を強く残す。だからリーベ、君と初めて出会った時、見ただけですぐに私たちはリエーネだとわかったよ」

そのまま説明すると、サフィラスもリーベの答えに同意を示した。リエーネは常にクリエルトがいる神殿の奥にいたため、面識はあまりなかったようだが、それでもすぐにわかったらしい。

「私たちが記憶を継承したのは、転生した神たちの動向を探るためなんだ。もし力を振りかざして悪事を働いているのなら捕え——反対に異端視されているようであれば、保護できるように」

「リーベさんに会いに来たのも、貴女がリエーネであることの確認と、もし貴女が迫害されているようであれば、保護しようと思っていたの」

ラリエの言葉に、サフィラスに今幸せかどうかを問われたことを思い出す。何故そんなことをと思ったが、あのときの言葉は決して意味のないものではなかったのだ。

「本当はもう君とは会わずに王都へ帰ろうと思っていたんだけど、ファステルからリーベが力を使ったと聞いたものだから。君の中に眠る力がどのようなものなのか、説明しなければと思って今日は来たんだ」

「そ、そう、だったんですね……ありがとうございます」

リーベはそっと自分の両手を見た。サフィラスに言われるまで昨日の記憶は朧気ではあった。しかし日が経つにつれて当時の力のことについて、悩んだかもしれない。どうしてあんなことが起こったのだと。彼らはそれを見越して、あらかじめ力の正体を教えてくれたのだろう。

「あ、あの……ケルトさんは、どうしてます、か……？」

心が落ち着くと同時に、ずっと気になっていたことを切り出す。彼は捕われたリーベを助けにきてくれたのに、碌にお礼を言っていない。このまま話が終わってサフィラスが邸へと戻ってしまえば、ケルトのことを聞く機会も永遠に失われてしまうだろう。

「……ケルトは邸にいるよ。今日来るときに誘ってみただけだね、リーベに合わせる顔がないからと、断られてしまった。――君とケルトの間であったことを聞く限り、確かに悪いのはケルトだね。会い難いと思うのはわかる。でも、最後だからこそリーベに会わせただけで、どうにも頑なで。連れてくることができなかったんだ。謝らせることができなくてすまないね」

「そんな……わ、わたしこそ、ケルトさんに謝らないといけないのに……」

感情を爆発させて彼の元から飛び出したこと。多大な心配や迷惑をかけてしまったこと。謝らないといけないことはたくさんある。

「――代わりといっってはなんだけれど、これを受け取ってもらえないかな、リーベ」

「え？」

差し出された手に思わずリーベも手を伸ばすが、手渡されたものを見て、困惑する。サフィラスの顔を見上げるが、彼は穏やかに笑うだけだった。

リーベは目の前にある扉を凝視しながら、サフィラスから貰ったものをぐっと握り締める。金属の擦れる甲高い音が僅かに聞こえた。

サフィラスがリーベにくれたのは、裏口の扉の鍵だった。彼曰く、よければ休日のおきにきて、植物たちのために歌ってほしいと。

無事に公演を終わらせ、本日休暇を貰ったリーベは行くか行くまいか悩んだ結果、行くことを決意し、ここまで来た。しかし、いくらサフィラスから許しを得ているといっても、人様の庭に勝手に入ることに戸惑いを覚える。中に誰もいないのだから尚更だ。

「ど、どうしようかシロ……」

――ピィ。

小さな鳴き声は、励ましてくれているようにも、呆れているようにも聞こえる。できれば、前者であってほしい。

「う、うーん……」

――ピィィ。

うんうん呻っていると、突如シロが片羽を広げた。そしてリーベの肩から飛び降り、柵の内側へと着地してしまう。

「シ、シロ!？」

ーピィ！

おいでよと言わんばかりに、シロが元気よく鳴いた。そしてそのままピュッと庭の奥へと歩いて行ってしまふ。

「あ、ああもう！」

これでは中へと入らないといけないではないか。リーベは意を決して鍵を握り締める。鍵を入れてまわすと、ガチャリと大きな金属音が鳴った。後はそう力を入れずとも、きいと扉が開く。

「シロ！ 待って！」

庭の中へと進入するが、シロはリーベの静止の声に聞く耳を持たず、どンドン先へと行ってしまふ。木々が並ぶところを急いで抜け、テラスのある大きく開かれた場所へと飛び出した。

「シ……！」

シロの名前を叫ぼうとした声が途中で途切れた。驚愕のあまり、声を飲み込んでしまったせいで。

テラスの近くで大人しくしているシロともう一人、そこにいるはずのない人物がいた。さらりとした赤茶の短い髪に、優しさを宿した琥珀色の瞳。

「ケ、ケルトさん！」

「……リーベ」

彼の名を呼ぶと、彼もまたリーベの名前を呼んでくれた。

ケルトとは、結局あの日を最後に今まで会うことはなかった。すぐに公演が始まり、そちらに意識を集中させていたのもある。ここに訪れたのと同じく、彼と会うのは実に十日ぶりだった。

「……っ！」

会えて嬉しい。助けてくれてありがとう。勝手に離れてごめんなさい。ケルトに言いたいことがたくさんありすぎて、そのせいで逆に何から話せばいいのかわからなくて、言葉が続かなかった。

暫くお互い無言だった。特にリーベはごちゃごちゃした頭を一生懸命整理している最中で、とてもではないが声として発するところまではいかない。

「すまなかつた……」

先に沈黙を破ったのはケルトだった。それにリーベははっとする。

「わ、わたしこそごめんなさい！ 勝手に飛び出したりして……ご迷惑をおかけしてしまつて……」

リーベも慌てて頭を深く下げながら謝罪の言葉を口にした。

「いや……リーベは悪くない。サフィラス様に言われた……同じことをリーベから言われたらどう思うかと。……やっつと、リーベが嫌だと言つた理由がわかつた。だから本当に、すまなかつた」

琥珀色の瞳を伏せながら謝るケルトに、リーベはぎゅっと拳を握つて己に力を入れた。脳裏に再び、サフィラスと交わしたある言葉が蘇る。

「あの……どうしてケルトさんは記憶を継承していないんですか？」

彼ら四神将は転生した神を保護するために、記憶を継承して現代に生を受けた。なのに、ケルトだけは神であつた頃の記憶はないのだという。

「それは私からグラディオンに進言したんだ。ーかつて彼は、ある女神に決して叶わない恋心を抱いていてね。彼女に対する捨てられない恋情と、想いが届くことのない現実に彼はずっと苦しんでいた。記憶を保持して生まれ変われば、その想いまで引き継いでしまふ。現世でもそのことで苦しむ彼を見たくはなかつたんだ。言うなれば、私の自己満足のお節介さ」

「そう……だつたんですか……」

ずきりと、何故か胸が痛みを發した。そつと胸に手を添えるが、どうして突然胸が痛みだしたのかはわからない。その痛みも物理的なものではなく、心が重くなつたと言つた方が正しいだろう。しかしどうし

てグラディオオンがとある女神に恋心を抱いていた話と、リーベの胸が苦しくなることに繋がるのか。

「――そのグラディオオンが恋情を抱いていた女神の名前なんだけどね」

サフィラスが悪戯っぽい笑顔を作る。そして告げられた名に、リーベはポカンと思考が停止したあと、カッと全身が沸騰した。

（――！ だからこれはケルトさんの話じゃなくてグラディオオンさん！ でもって好きになった相手っていうのもわたしじゃなくて、リエーネさん……！）

リーベは熱くなってきた頬を俯ける。

地神将グラディオオンが愛した女神は、神鳥と呼ばれる歌の女神リエーネ。彼女が己の前世だと実感してはいなくせに、前世の彼に想われていたことが気恥ずかしさと共に湧きあがる嬉しさが止まらない。

何故嬉しいと思ったのか。流石のリーベも、その気持ちがどういふものか知っている。

だがそれは同時に失恋をも意味していた。ケルトはサフィラスたちと共に王都へと戻り、もう会うことはできないのだから。

だからこそせめて彼との思い出のあるこの庭へと赴いたのだが、ここで再びケルトと会えるとは思っていなかった。巡ってきた好機を、逃すわけにはいかない。

リーベは意を決してケルトの傍へと駆け寄る。見上げた琥珀色の瞳は罰が悪そうに揺らいでいたが、同時に優しい光も湛えていた。

「わたし……っ、こ、これからもケルトさんのこと覚えていてもいいですか……？」

「……もう、あんなことは言わない。二度と」

ケルトに会うことができなかった公演期間中、ケルトのことを思い出さなかった日は一日たりともない。彼を想って胸がぎゅっと苦しくなり、なかなか寝つけない夜もあった。もう会えないという事実が辛くてこっそり泣いたこともある。

そのケルトが、今日の前にいる。嬉しくて堪らないと、全身が歓喜に震えていた。

「ケルトさんにまた会えて、とっても嬉しいです！」

「……ああ、俺もだ」

口の端が僅かに上がった微笑みを向けられて、ドキンと心臓が高鳴る。ポッと顔が赤くなるのを感じた。

「あ、あの……先日は助けていただいて、ありがとうございました」

「いや……あれは元はといえば、俺が……いや、やめておこう。リーベが無事で、本当によかった」

ケルトの手がリーベへと伸ばされ、ポンと頭に乗せられた。想像していたよりも大きな手と、そこから感じる温もりに心がじわりと温かくなっていく。口元が緩み、リーベは相好を崩した。

「えへへ……でも、どうしてケルトさん邸にいるんですか？ サフィラス様たちと王都へ帰ってしまったとばかり……」

「……それなんだが」

ケルトはポツリポツリと言の葉を繋げる。

「サフィラス様に、この邸の管理を任された」

王都へと出立するその日、ケルトはサフィラスからそう命じられたのだという。それはケルトを置いていくということと同義であり、直後、ケルトは青ざめた。

だがサフィラスはケルトの反応を予測していたらしく、穏やかな笑みを苦笑に変えながら、詳しい事情を説明する。

『リーベの公演が素晴らしかったから、今度は普通に公演を楽しむためにフォーリエストへ来たいんだ。これから頻繁にくるようになるだろうから、誰かにここの管理をしてもらいたいと思ってね』

そこでケルトに白羽の矢が立ったのだという。そして、どうしてケルトに頼んだのかといえば、理由は

一つしかなかった。

「リーベに合い鍵を渡したから、来るまでに謝る言葉を考えておくといいと……」

「だ、だからサフィラス様、わたしに鍵を……」

リーベに鍵をくれたのは、目覚めたばかりの公演前だ。そんなときからケルトを邸に残すことを考えていたのだろう。

「サフィラス様が……次の公演も楽しみにしていると。そして都合が合えば、また皆で茶会をしたいと、言っていた」

事件が起きる前のできごとが脳裏に蘇った。ケルトの作った焼き菓子は確かに美味しかったが、始終緊張しっぱなしだったことは記憶に新しい。サフィラスはリーベに、同じく神から転生した同胞として親しみを覚えているのだという。それと、神であった頃に親交はほとんどなかったようで、せっかくだからという気持ちが大きいのだとか。

正直に言えば、ケルトはともかく未だ彼らと話すと思うと緊張する。だが、彼から身分の高さとは関係なしに親切にしてもらったのも事実だ。こちらが気後れするからという理由で断るのは、申し訳がない。

「あの……今度は、ケルトさんも一緒ですよ？」

前はケルトはサフィラスに促されるまで同じ席に座らなかった。着席した後のこともよくは覚えていない。はっきりいって一緒に茶会をしたとは言えないだろう。

「その……ケルトさんと一緒なら、わたしもお茶会を楽しめると思って……」

サフィラスに気後れしてしまうのはどうしようもないことだが、ケルトが傍にいてくれるならば、それだけで安心できる。

「……ああ。次は俺も楽しませてもらう」

「ふふふ、約束ですよ！」

了承を得て、リーベの心はすっかり軽くなっていた。行くか行くまいか悩みに悩んで、来た甲斐があったというものだろう。

――ピィピィ！

ふと、足元から小鳥の囀りが聞こえる。

視線を下に向けると、シロがぴよんぴよんと跳ねながら、リーベとケルトの周りをちよろちよろと動き回っていた。

『自分も一緒がいい』……とシロが言っている」

「！ もちろん、シロも一緒だよ」

リーベはその場にしゃがんでシロに手を伸ばした。シロはピィと可愛らしく鳴くと、ちょっと手に飛び乗り、定位置である肩へと移動する。その間も、ピィピィと元気よく鳴き続けた。

「ケルトさん、シロはなんて言ってるんですか？」

『リーベと自分はいつでもどこでも一緒だ』と、言っている」

動植物の声を聞くことができる地神将の力。ケルトの口から初めて聞いたとき、シロと話がしたいと言ったのを覚えていてくれたのだろう。

「……シロのこと、聞きたいことがあったら聞いてくれてかまわない」

「ありがとうございます！」

すると、再びシロがピィと鳴いた。今度はなんと言ったのか、思わず期待の眼差しを彼に向けた。

『リーベの歌が聞きたい』と言ってる……俺も聞きたくなった、リーベの歌。だから歌ってはくれないか」

それは今まで交わしてきた、聞き慣れた決まり文句。なのに、目頭がじんと熱くなっていくのを感じた。いや、理由はわかっている。これはずっとリーベが望んでいた言葉だったからだ。やっと慣れ親しんだそ

の言葉を聞けて、身体が歓喜に沸いている。

「もちろんです！ わたしは歌い手ですから！」

快諾したリーベは、今日は何を歌おうかと考える。たくさん歌ってはいたが、まだケルトの前で歌っていない童謡は幾つか残っているため、いつも選出に少し時間がかかってしまうのだ。

「あのときの歌を……リーベが一番初めに歌ってくれた歌を、歌ってもらえないか。また、あれが聞きたい」「！」

ケルトからリクエストを貰ったのは、これが初めてだ。身体に緊張が走る。

『神鳥の唄』ですね。はい、わかりました！」

しかしその緊張はすぐさま興奮へと形を変える。リーベが気にいっている歌を、ケルトにも気にいってもらえたような気がして嬉しかった。

リーベは軽く喉の調子を整えた後、大きく息を吸い込む。

かつての神鳥は、創造神のために歌を歌い続けた。しかし今リーベが歌を歌うのは、ケルトのため。恋した人を想って歌う。相手は違えど、心を込めて歌うことにきっと違いはないだろう。己の歌を聞いて幸せになってもらえたら嬉しい。恐らくこの気性は、何度生まれ変わったとしても、きっと変わることはない。

「わたしは今日も唄を歌う――」

詩に想いを乗せて、リーベは高々と声を張り上げた。